

せい か ほう まさ
星 火 方 正

~燎原の火は^{ほうまさ}方正から~

丸山邦雄氏らの功績についての再評価

性暴力被害の記憶を受け継ぐ

詩 視線 散文詩 母の帽子

生かされた生命—天津の日本租界での生活を思い出しつつ—

私の引揚げ体験と『星火方正』

「日本人」はどうやってつくられたか、そして、どこに向かうべきか

なぜ中国は気前よくベトナムと北朝鮮に領土を譲与したか？

寺沢 秀文

上野 千鶴子

柳生 じゅん子

水沼 安美

戸田 和歌

高井 弘之

凌 星光



方正県大羅密の奥地の老爺嶺山中

敗戦後、長野県の泰阜村、読書村、埼玉県の中川村、また中国地方5県からなる七虎力開拓団などが方正県を逃避先として目指したが、松花江沿いにはソ連の艦隊がいて危険だと、この山中を彷徨いながら進んだ。(2007年、逃避行ルートを辿った寺沢秀文氏が撮る)

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第28号） ～燎原の火は方正から～

目次

丸山邦雄氏らの功績についての再評価	寺沢 秀文	1
「ポール邦明丸山氏よりのお手紙」		13
.....		
性暴力被害の記憶を受け継ぐ	上野 千鶴子	17
.....		
視線	柳生じゅん子	23
母の帽子	〃	24
.....		
私の引揚げ体験と『星火方正』	戸田 和歌	27
田井光枝さんとの出会いと戸田和歌さんの手紙	大類 善啓	32
生かされた生命—天津の日本租界での生活を思い出しつつ—	水沼 安美	33
.....		
「日本人」はどうやってつくられたか、そして、 どこに向かうべきか	高井 弘之	35
.....		
なぜ中国は気前よくベトナムと北朝鮮に領土を譲与したか？ —毛沢東、周恩来らの国際主義精神を見る—	凌 星光	42

法政大学経済学部同窓会建立 「平和記念碑」 どう守り、どう伝えるか 学徒出陣を体験した世代が後輩に残すメッセージ	加藤 毅	45
記憶を記録に～哈爾浜の思い出～	長尾 寿	52
生きるために闘ってきた人生	中島 茂	54
.....		
ハルビン市と方正県の間には高速鉄道開通！	石 金諧	59
.....		
牡丹江、ハルビン 鎮魂・平和の旅	藤後 博巳	60
宝塚市の高崎記念館を見学して	長澤 保	70
満蒙開拓平和記念館を訪れて	横井 幸夫	73
林口へ行ってきました	野中 西夫	75
「大地の子」も知らなかった私が、 方正地区日本人公墓を訪ねるまで	大澤 大介	79
.....		
合唱を通して中国の人々との草の根の文化交流	小淵 章	83
.....		
台北からの引揚	秋吉 任子	87
.....		
<旧満州に残され 74歳の帰国>	朝日新聞	91

<日本人と認めてほしい 中国残留孤児の女性 74年ぶりの帰国>	『日中友好新聞』	92
<歩いて越えた38度線>	日本経済新聞	93
<ソ満国境を 少年が見た死線>	日本経済新聞	94
<魯迅 日本人青年との友情>	〃	95
巨 東英 <科学技術文化の全分野で日中交流をさらに展開させたい>	『日本と中国』	96
半藤 一利 <すぎる人を蹴落として生き延びた東京大空襲>	しんぶん赤旗 日曜版	97
憲法の心、再発見	〃	
映画『誰がために憲法はある』 松元ヒロの一人芝居が基に		98
.....		
——「方正友好交流の会」へのお誘い——	方正友好交流の会	99
.....		
報告／書籍案内を兼ねた編集後記		100

丸山邦雄氏らの功績についての再評価

寺沢 秀文

1. 始めに

『星火方正』の第27号(昨年12月発行)に掲載された加藤聖文先生の『誰が満洲引揚を実現したのか』と題した論説について、またそこでも触れられている丸山邦雄氏らの功績について、私なりの私見を述べさせて頂きたいと思います。

まず、この論説については今や旧満州研究の第一人者とも言うべき加藤先生が書かれたものであり、内容的にも詳細で、大変勉強になる内容のものでした。しかしながら、在野の民間人に過ぎない当方が申し上げるには誠に僭越なものがあるかとは思いますが、その一部については「果たしてそうなのだろうか？」という思いを抱いたのも正直なところです。そう感ずる主な点としては、①加藤先生は在満邦人引き揚げ実現に関しての丸山邦雄氏らの直接的な功績をかなり強く否定されているも、同氏らの引き揚げ促進等に際しての貢献は相当のものであったと思われること、②加藤先生はこの引き揚げにおける直接的功績への疑問から、今般の長野県飯山市における丸山邦雄氏の功績の顕彰について懐疑的であるようであるも、その指摘内容等についてはやや違和感を覚えること、③今回のドラマ『どこにもない国』の内容自体についても問題指摘されているも、そのドラマ化等自体はこれまで知られることの無かった史実分野にも触れたものとして評価されるべきものであり、これらのことについて余り触れてこなかった歴史研究学術界自体にも問題はあったのではないか、等の点にあります。

2. 在満邦人引き揚げにおける丸山邦雄氏らの位置づけをどう捉えるか

まず、加藤先生は旧満州からの邦人引き揚げに向けての取り組みは丸山邦雄氏らの活動以前から進められていたことであり、必ずしも丸山氏らの活動により引き揚げが実現されたわけではない等と指摘されています。そして、まるで丸山氏らだけが引き揚げを実現したかのような印象を受けるとして、今回のドラマ『どこにもない国』の番組内容について疑問を呈し、結果としてそのドラマの原作となったポール丸山氏の著書『満州・奇跡の脱出』の記載内容等についても疑問を呈する形となっているかと思えます。しかし、「丸山氏らの引き揚げに関しては直接的な功績は無かった」、「引き揚げ実現を丸山氏らの功績とすることは間違い」等の指摘については正直なところ納得し難いものがあります。ドラマの原作となったポール丸山氏の著書『満州・奇跡の脱出』においても「丸山邦雄らの活動だけが引き揚げ実現の原因となった」と書かれているわけでもないのに、加藤先生のやや強い否定的な書き方はそれ自体にも反するところではないかと思われます。

勿論、書籍等であろうとテレビドラマ、映画等であろうと、どんなケースであったとしても史実について触れるものである以上、その基本的な部分での歴史的な実証性、客観性等は確保されなければならないことは言うまでもありません。しかし、旧満州からの邦人引き揚げに際しては丸山邦雄氏ら以外にも取り組み等があったことは、ポール丸山氏が書かれた『満州・奇跡の脱出』の中でも自ら指摘されている通りであり、丸山邦雄氏らの活動だけが邦人引き揚げの起因となったわけでもないことはポール丸山氏も、また私にして

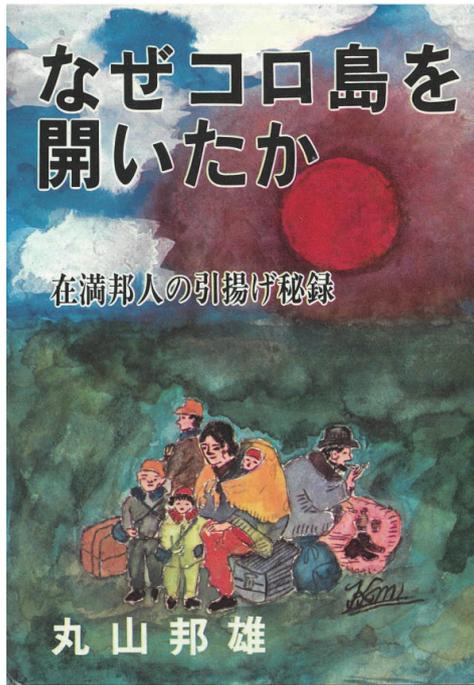
も十分に承知しています。しかし、丸山邦雄氏らの活動が旧満州からの邦人引き揚げの促進に際して一定以上の大きな貢献があったこともまた間違いのないところであり、「丸山氏らがこの邦人引き揚げに関して何の功績も無い」等と言うことは有り得ず、またその功績を顕彰等しようとすることに疑問を投げかけるのもまたやや違うのではないかと私には思われます。

確かに当時、在満邦人自体は勿論、敗戦国であった母国の日本政府においても邦人引き揚げのための力を持っていなかったことはその通りであると思います。しかし、そのような厳しい状況の中であっても、在満邦人の中からの具体的な活動として、旧満州から命懸けで脱出して日本に潜入し、政府要人やGHQ(占領軍)に直訴したり、NHKのラジオ放送で全国に向けて在満邦人の実態を訴えたり、また自ら『在満邦人を救へ』（写真別添）と言う冊子を作り鉄道売店等での頒布に努めたり（昭和21年6月15日発行。頒価は2円。印刷は信濃毎日新聞社印刷部となっている）、国内各地を講演で行脚して回った等の精力的活動をした日本人たちが実際にいたということは、実に画期的なことであり特筆に値することであると思います。そのような活動例があったことは他には聞いたことがありません。あるいは知られていないだけで実際にはあったのかも知れませんが、丸山氏らのように政府要人やマッカーサーにも面会して要求したり、あるいは国内各地を講演して歩いた等の活動をした例は無かったと思います。

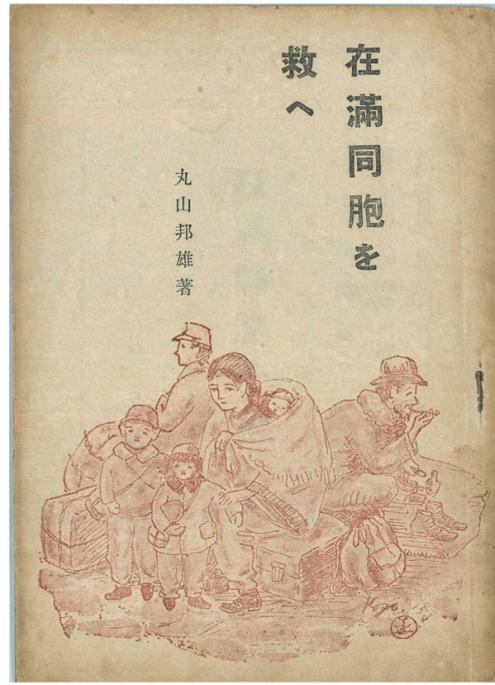
3. 丸山邦雄氏らの活動の具体例

丸山邦雄氏らの帰国後の精力的な活動内容等については、丸山氏ご自身が昭和45年10月に上梓された自著『なぜコロ島を開いたか～在満邦人の引揚げ秘録』（永田書房刊）にもかなり詳しく記述されているところです。例えば丸山氏らは日本帰国後に国内各地を行脚し、在満邦人らの実態等を報告し、早期引き揚げを訴える活動を続けられています。実は丸山邦雄氏らは私の住む長野県、そしてこの県南・飯田の地にもこの時期、講演に来られています。そのことの裏付けを取るために、以前に地元の図書館で過去の地元紙のマイクロフィルム保存等を検索していったところ、別添の通り、丸山邦雄氏らが長野県内の各地を講演して歩き、またこの飯田市でも昭和21年（1946年）4月3日、当時の追手町国民学校で講演会が開催される旨を告知する新聞記事が残っているのを見つけることが出来ました。そして、その2日後の4月5日には丸山氏らはもう東京に戻っていて、この5日にGHQでマッカーサー司令官に面会し、在満邦人の引き揚げ促進を直訴されています。

私が見つけた前記の地元紙記事等に拠れば、丸山邦雄氏らは昭和21年（1946年）3月30日から4月3日にかけて（中略）、長野県内の長野市、上田市、松本市、飯田市といった県内主要都市で開かれた「満鮮同胞救援県民大会」で講演し、毎回、会場に収容しきれないほどの聴講者が集まったと言います。まず、信濃毎日新聞（信毎）の昭和21年（1946年）4月1日付けの紙面に、「同胞救済は可能だ。満鮮同胞救援県民大会」という見出しがあり、これを読むと、「同大会は（3月）31日午後、長野市城山館で開催、参加者700名、去る2月26日、奉天発山海関から北支を通して帰国した丸山邦雄氏（飯山町）らから現地状況を聞き、联合国に送る陳情文を決定した」とあります（記事コピー別添）。またこの当時にこの飯田地方のみで発行されていた「新信州日報」という地元紙



丸山邦雄氏著『なぜコロ島を開いたか』の表紙



丸山邦雄氏著『在満邦人を救へ』の表紙



(上) 丸山邦雄氏らの講演会を告知する新信州日報(昭和21年3月31日付)の紙面

(下) 丸山邦雄氏らの講演の様子を伝える信濃毎日新聞(昭和21年4月1日付)の紙面

のマイクロフィルムを探してみたところ、同紙の昭和21年（1946年）3月31日付けの紙面にその県民大会の予告記事があるのを見つけることが出来ました（記事コピー別添）。そこには見出しとして「満州情況講演会。4月3日追手町校で」とあり、「満鮮同胞の消息に就いて、今回、満州重工業会社高碓総裁の重大使命を帯びて、極最近帰国された丸山邦雄氏、新甫八朗両氏が来県される機会に県在名同胞救出協会主催で県下5市に講演会を開くこととなり、飯田市では4月3日午後1時より追手町国民学校講堂で関係団体が主体となり県民大会を催すが、両氏の講演は満州の状況を最も真実に報ぜられるものとして期待される」とあります。そこにも「在満邦人の引き揚げにも尽力した高碓（達之助）氏からの重大使命を帯びて」とある通り、丸山邦雄氏らは満州脱出前に当時の在満日本人会会長でもあった高碓達之助氏に会い、邦人引き揚げの促進についての協力依頼等を受けています。この下りについては前出の『なぜコロ島を開いたか』の中でも詳しく触れられており、「（昭和21年）2月23日、新京を訪れて、当時の全満日本人会長高碓達之助氏等と秘密裏に会い、（中略）、高碓氏からは幣原総理等への懇請状を受け取り」等と詳述されています（同書60頁以下）。

4. 満州引揚者の家族としての感謝の思い

丸山邦雄氏らが命懸けで日本に戻ったこの時期は、終戦から一冬が過ぎようとしているばかりの頃であり、まだ旧満州に取り残されていた開拓団ら多くの在満邦人の消息等は日本国内には全く伝わってこず、国内親族等も不安な日々であったと言います。とりわけ全国で最も多くの開拓団を送出した長野県、そして更にその中でも最も多くを送出していたこの飯田・下伊那地方でも、消息の知れない在満の家族、友人、知人等のことを心配する人々も数多くいたことは言うまでもありません。そのような人々にとって、旧満州から命懸けで帰国し、各地で在満邦人の現状等を生の声として各地に届けてくれた丸山邦雄氏らの活動は大きな光明を見出すものであったことは間違いありません。

前記の通り、丸山邦雄氏は全国に向けてのラジオ放送でも在満同胞の窮状を訴えています。この放送は昭和21年4月17日夜7時よりのNHKラジオ全国放送『在満同胞の実状を訴う』として放送されましたが、この放送を聴いた全国各地の人々から丸山邦雄氏らの元に毎日五百通から千通もの手紙、ハガキが届いたと言います（前掲書100頁以下）。如何にその反響が大きかったかが判ります。

私事にて恐縮ながら、そのラジオ放送のあった頃、私の母らはまだ新京（現長春）の避難民収容所での過酷な避難民生活を送っていた頃でもあり、私の長兄は既にここで僅か1歳の命を流行病で落としていました。開拓の村からソ連軍侵攻直前にいわゆる「根こそぎ動員」により召集されていた父はそのままソ連軍の捕虜としてシベリア抑留



[昭和21年4月3日。丸山邦雄氏らが講演を行った飯田市内の旧追手町国民学校（今も健在）]

されていたものの、その夫の生死も知る術も無く、母らは新京の避難民収容所で過ごしていました。飢餓、流行病、厳寒等の過酷な生活の中で多くの犠牲者を出し続け、引き揚げが一日遅れれば失われる命が日々増え続けるという状況の中で、満州から日本に命懸けで戻り、懸命に国内で引き揚げ促進のために奔走してくれた丸山邦雄氏らの活動は決して小さなものなどではなかったと改めて思います。

前記のように丸山邦雄氏らは長野県内各地などを講演して歩かれています。当時の交通事情、終戦から半年余りの混乱等の中で、今ですら交通不便なこの飯田の地まで、多分は鉄道に拠ってとは思いますが、大変なご苦勞であったことと思います。前出の『なぜコロ島を開いたか』の中でも触れられていますが、この各地での講演の際には、講演後も家族等の消息を知りたいと願う人々からの質問攻めに遭い、講演会場を出たのが深夜12時過ぎの時もあったと言います（同書88頁以下）。在満邦人引き揚げ実現への直接的関与がどの程度あったかどうか等とは別のこととして、当時、他の誰がこのようなことをしてくれていたと言うのでしょうか？ 勿論、このような勇気ある活動をしてくれた日本人がいたということの発掘、顕彰と、どのように引き揚げ工作が取りまとめ実行されたかと言う実際の歴史的な動き等とは別次元のものとして峻別して把握していくべきことかも知れません。しかし、同時に、命懸けで日本に戻り在満邦人引き揚げのために尽力した日本人たちがいたということ自体、ポール丸山氏が『満州・奇跡の脱出』を書き顕わし、世に問うてくれるまでは、丸山邦雄氏らのこれらの諸活動等は日本国内でも長い間、ほとんど知られないままで来てしまっていました。このような活動が実際にあったということの史実もまたもっときちんと知られるべきであり、そしてその勇気ある活動等とその功績についてももっと日本国内でもきちんと評価されて然るべきものと私は思います。そして、そういった引き揚げの史実等が余り世に出されてこなかった中で、このことを世に出してくれた今般の一連の出版、ドラマ製作等に対して、私自身も元満蒙開拓団員の子弟の一人としても感謝したいものと改めて思います。

この丸山邦雄氏らの活動が当時の日本側の政府要人等の関心を更に呼び起こし、また在満邦人の安否を案ずる多くの国内の関係者等に希望を与え、世論にも少なからぬ影響を与えたことは間違いないと思います。勿論、冷静、客観的な視点より、活動の結果としての成果の有無、大小等はきちんと検証されなければならないところであり、学術研究と心情的なこと等とは峻別しなければならないことは言うまでもありません。しかし、それであったとしても当時の困難な状況等を思えば丸山氏らの活動は高く評価されて然るべきではと思います。また、加藤先生も指摘の通り、丸山氏らの帰国後の活動以前からも引き揚げに向けての準備は米軍等で水面下にて進められていたことも間違いないことですが、しかし丸山氏らの活動が引き揚げ実現、促進に向けての後押しとなったこともまた間違いないものと思います。その促進により、ポール丸山氏も指摘の通り、現地で毎日多くの犠牲者を出し続けていた邦人らの引き揚げ促進に繋がり、これにより救われた多くの命もあったこともまた間違いないところです。これらのこと等からしても丸山邦雄氏らの功績等は極めて大きく、そのリーダーでもあった丸山邦雄氏の功績は高く評価されるべきことであると思います。また、丸山邦雄氏らは昭和21年5月に葫蘆島からの引き揚げが開始されてから以降も引き続き、その引き揚げ促進等のために長きにわたり様々な活動を継続されこれに貢献されていたことも忘れてはならないことであると思います。

5. 飯山市における丸山邦雄氏の顕彰について

また、加藤先生はその論説の中で、丸山邦雄氏の出身地である長野県飯山市においてその顕彰の準備を進めている点についても疑問を呈されてもいます。勿論、どんな場合であっても様々な功績の顕彰等については十分な検証等を経ての上でなくてはならないことは言うまでもありません。しかし、その上でですが、やはり丸山氏の功績は顕彰されて然るべきものと私は確信しています。加藤先生は、在満邦人の引き揚げにおける功績等の点で丸山氏の顕彰について疑問視されていますが、しかし飯山市における丸山氏の功績の顕彰の検討は、そのことだけではなくもっと多角的になされています。自己弁護的なこととなるかも知れませんが、私はこの飯山市での「丸山邦雄氏顕彰検討委員会」の委員も拝命していた立場から、その顕彰検討の経過等についてもある程度は把握しているつもりです。私も10年ほどに渡り丸山邦雄氏に関わる諸資料等拝見させて頂いていますが、丸山氏の功績は決して在満邦人の引き揚げへの貢献等からだけではありません。もっとそれ以前のアメリカ留学時代、当時の「排日移民法」に対する反対運動の先頭に立って米国政府要人等とも直接交渉して成果を上げた等、国際人としての活躍等は評価されるに値するものであり、丸山氏のこれらの活躍等は飯山市が生んだ郷土の偉人として顕彰するに値するものと私も思います。

実は、この丸山邦雄氏の功績については既にかなり以前のことですが、長野県内の学校授業で活用する社会科の副教材『信州から世界を見よう』（1999年信濃教育会発行。写し別添）の中でも取り上げられています。この副教材は長野県出身者で国際的に活躍した人たちを取り上げた本で、この中に飯山市出身者として丸山氏も取り上げられています。この副教材にも載っている丸山氏のことを、飯山市内でもつい最近まで一部の人のみにしか知られていなかったこと等は残念なことですが、今回のドラマ等も一つのきっかけとなって丸山氏の幅広い国際的な功績を改めて見直し顕彰することとなったことは大変良い機会であったものと思います。

6. 杉原千畝氏との比較の中で

加藤先生はその論説の中で、今回の丸山邦雄氏への顕彰等に関連して、かの「命のビザ」で知られる「杉原千畝」氏の顕彰のことも引き合いとして出されています。杉原千畝の顕彰に関して過大評価とか、あるいはその顕彰活動等に関して何らかの問題点等があるのかについては不勉強な私は良くは判りませんが、しかしユダヤ人6,000人の命を救ったという杉原氏の行動自体は評価されて然るべきものと思います。日本政府の許可なしにビザを発行したという行動が、当時の一外交官が取った行動として正しかったかどうかは意見の分かれるところなのかも知れませんが、しかしそのことにより多くの命が救われ、そのことに対して多くのユダヤ人の人々等含め国際的な評価を得ていることは間違いのないところかと思えます。勿論、杉原氏が発行したビザが当時のソ連領通過の際にも有効とされた背景には当時のソ連側の思惑等があったり、杉原氏以外にも同様のビザを出していた他の領事等もいた等のこと等も踏まえ、また物事は多面的に見なくてはならず、ユダヤ人社会からの評価だけを基準とすること等にも慎重でなくてはならないものと思います。しかし相手が誰であろうと人道的措置を取った杉原氏の行動は国際的にも広く評価されて然るべきかと思えます。しかし、この杉原氏の一外交官としての行動は日本政府からは批判



丸山邦雄氏も紹介されている信濃教育会の社会科副教材『信州から世界を見よう』（1999年発行）



対象となり、外務省から追放され、杉原氏一家は戦後長い間不遇の生活を強いられ続けた本国内でも評価されることはありませんでしたが、その功績への高い評価は日本国内よりも海外での高まりからであったと言います。日本国内での評価が低かった、と言うよりも日本国内でも知られることがほとんど無かったと言う点では丸山邦雄氏らも類似したところがあると思います。その子息であるポール丸山氏が『満州・奇跡の脱出』を自ら書かねばならないと思った大きなきっかけの一つは、その杉原千畝氏のご子息の講演をアメリカ国内でお聞きしたことからと言います。杉原千畝氏にしても丸山邦雄氏にしても、多くの人がその誠実で敬虔なお人柄を讃えており、自らの活動等についてこれを余り他の人々に自分の功績等として吹聴するようなお人柄ではなかった点にも共通点を感じます。

7. テレビ、映画等と史実の掘り

杉原千畝氏に関しても、その功績等がようやく日本国内でも知られるようになってきたのはやはりドラマや映画等として取り上げられるようになってからでした。それらを後追的に追いかける形で地元での顕彰気運等も高まってきたのだと思います。テレビやドラマ等で取り上げられないと史実が広く知られない点にも幾ばくかの問題はあろうかと思えます。しかし、そういった形でしか広く国民に史実等を知らせる術を持たない現状等の中で、史実の歪曲等は当然にあってはならないも、ある程度はこういった映像媒体等を通じての国民への広まりはやはり一つの伝達手段としては有効なものと思えます。そのような中で、丸山邦雄氏らの活動がドラマとして取り上げられ、在満邦人の戦後の窮状やその邦人引き揚げ等の史実を知るきっかけを広く国民に与えてくれたものとして、そのドラマ化等はやはり評価されて然るべきものではないかと思えます。

そのことにも関連して、これはポール丸山さんも指摘され、私も同感するところですが、前記通りこの論説を寄稿された加藤先生はあのドラマ『どこにもない国』では時代考証を務めてもおられます。その立場にあった方が、今になってそのドラマの内容自体の根本に関わるような部分についてこれを疑問視するような内容の論説を出されてきたことについては、勿論いろいろな事情等もあってのこととは思いますが、やはり違和感は禁じ得ません。これらの経過等については、『星火方正』前号での論説の中でも加藤先生は、ドラマ制作等に際しては史実等について問題があり、NHK側ともいろいろなやり取りがあったと言うことを述べられています。多分は歴史学者として認め難い部分等もあったのかと思えます。しかし、浅学非才の身で立場を弁えずに敢えて言わせて頂くならば、一旦は時代考証を引き受けた以上、ましてやそのドラマが世に出たその後の今になって、その内容等のかなりの部分を否定、または疑問視等するような論説等を出すことについてはやはり慎重でなくてはならないものと私には思えます。

大変誠実なお人柄でもある加藤先生としても、多分はドラマの時代考証等を担当される中で、歴史学者としての意見等がドラマ内容に十分には反映されず、そのことに対する反省、あるいは事後検証、更には警鐘等としても、改めてドラマ内容と史実との違い等を訴えるために『星火方正』でのあのような論説という形で表明されたのであろうかとも推察します。歴史学者としての良心との葛藤もあったのかとも思われます。民間人である私がこのようなことを申し上げる立場ではないも、歴史検証に際しては、歴史学者の方は冷静に、客観的にこれを掘り下げなくてはならず、例え後になってからでもおかしいと感じたことはこうして世に問うていくことがその務めであるのかも知れません。

8. 満蒙開拓の史実伝承における学術研究界のこれまでに對する思い

今回の論説を寄せられた加藤先生が旧満州研究等に関する第一人者であり、様々な優れた研究成果等を世に出されてこられた研究者として尊敬すべき方ではあることは申し上げるまでもありません。しかし、加藤先生一個人の次元のこととしてではなく、戦後における歴史研究学術界全体として見た時、この旧満州や満蒙開拓全体に関する史実や、旧満州からの引揚の史実等について戦後これをどれだけ世に明らかにしてきたのかと言えば、それはやや心許ないものがあるのではと誠に僭越ながら思わずにはおられません。

戦後、旧満州や満蒙開拓等に関する調査研究等はタブー視される向きさえあった中で、今回の在満邦人の引き揚げにまつわる史実等も国民に対してはほとんど明らかにされてこなかったと思います。勿論、単に私自身が勉強不足であったことは否定しませんし、また以前にも映画『葫蘆島大遣返』等を含め、このことが取り上げられた機会があったのも事実です。しかし、これらをも含めてですが社会的にはこれらのことは余り知られるところではなく、実際に引き揚げを体験した本人たち等をも含めて、一般市民の人々がこの引き揚げの背景等について身近な形で知り得るような機会はこれまでほとんど無かったと思います。そのような中で、ポール丸山氏が書かれた『満州・奇跡の脱出』の出版、そしてそれを原作とした今回のドラマ『どこにもない国』の放送によって、ようやく国民の多くが在満邦人の引き揚げの様子等について身近な形で詳しく知る機会を持つことが出来ました。これは大きな功績であったと思います。加藤先生ら一部の先生方の研究活動等はあったものの、歴史研究界全体として見渡した時、一般市民レベルへの周知等はほとんど為し得てはいなかったのではと私は思います。それは何故だったのだろうか？と思う時、それはやはり「向き合にくい史実」であったからであろうと思います。

私が元満蒙開拓団員の子弟という立場の中から、この満蒙開拓の調査研究に関わりだした30年ほど前、中国帰国者の帰国後生活等について取り上げる研究者は若干はおられたものの、満蒙開拓そのものについての研究者は極めて少なかったと思います。あるいはおられても大変失礼ながら余り目立つことは無かったと思います。それはあるいは穿った見方かも知れませんが、「満蒙開拓」というテーマ自体が「不都合な史実」として取り上げにくいテーマであったからであろうと思います。かなり以前のこと、もう退職されたある大学の元教授の先生が直接私にそっと語ってくれたことですが、「自分が戦後しばらくしての頃、大学院で博士課程(修士課程?)の論文テーマとしてこの満蒙開拓を取り上げようとしたところ、指導教官の教授から「それはタブーだから取り上げない方が良い」と言われて止めた」というお話を聞いたことがあります。あるいはそれはレアケースであったのかも知れませんが、国策として進められた満蒙開拓の史実を戦後において学術研究として取り上げることはいろいろな面から取り上げにくいテーマであったのかも知れません。

9. 満蒙開拓平和記念館建設の取り組みを振り返って

勿論、歴史学者の先生方の研究成果等については我々市民としても関心と共に尊敬と感謝の念は絶えず持ち続けなくてはならないものと思います。しかし、満蒙開拓のようにこれまで学術研究界等でも余り取り組まれてこなかったのではないかと思われる歴史分野もあったのも事実かと思えます。我田引水かとは思いますが、私たちの満蒙開拓平和記念館は全くの民間人による施設であり、それが故に学術的にも多分に未熟な面も多々ある施設であると思います。しかし、それでさえも全国で唯一の満蒙開拓に特化した記念館である

ことを思う時、なぜそうであったのかは絶えず考えてきたところです。勿論、我が満蒙開拓平和記念館にしても、本来ならば公立等の財政的にも整備された中で、学芸員等も置いて学術的な点もフォローされて作られればそれに越したことはなかったと思います。しかし、私たちがこれを作るまで、全国どこにも一つも無かったのが事実です。私たちが作ろうとした時にも、それを公立として推進しようとする後押し等もありませんでした。それは何故なのか、「満蒙開拓」という歴史自体が専門の記念館等を作ってまで取り上げるほどの歴史的価値が無かったからなののでしょうか？ しかし、それは違うということ、満蒙開拓には語り継ぐだけの意義がある重要な歴史であるということをおこがましいながら私たちの記念館は取り敢えずはそれを少なからず実証することが出来たと思っています。としたならば、何故、私たちが作るまで満蒙開拓のことは余り世に出ることは無かったのか？ それは実際には後世に向けて学ぶことの多い意義ある重要な歴史であるにも関わらず、そのこと自体に光を当てることを良しとしなかったマイナスの力が働いていたのか、あるいはその重要性を見出すことが出来なかったのか、あるいはそれは感じてはいてもそれを世に出すだけの力、あるいは思いが無かったからなのか、いずれにしても何らかの理由があったのではないかと思います。歴史研究者の先生方の世界においても、最近こそは加藤先生を筆頭として旧満州等についての研究者の先生方が活躍されるようになりましたが、少し前まではそうでは無かったように思われます。

そういう向き合いにくい歴史でもあった「満蒙開拓」と言う史実をより多くの人々に、より身近なものとして知ってもらおう場所としたいとの思いから私たちの記念館は民間主体にて作られました。「それを私たち民間がやったのだ」などと吹聴等するつもりは毛頭ありません。正直なところ、このような語り継ぐための障壁の多い、そして不条理なこととの闘いの連続でもあることを民間でやろうなどということはとても大変なことです。今でもなお、民間でやることの大変さ、理不尽さを感じ、民間だけでやるには限界があることを痛感しつつ、また私事面でも、館長でありながらも本業ありきのボランティア館長として常勤することも出来ないような厳しい環境の中で、それでも前に進まなくてはならず、日々の運営に頭を悩ませているのが実際です。それは、記念館構想に最初に取り組んできた頃から、そして記念館開館から満6年を経た今も変わらず、民間人でありながら、時間に追われ、無報酬同然でこれに取り組まなくてはならない理不尽さを感じることも多い日々です。それに比較してと言うのは大変失礼で不謹慎ながら、当然とは言え報酬を得ながら、科研費等含め調査研究環境等も整う中で、自分の好きな研究分野に、それを仕事として専念出来る大学等の研究者の先生方のことを時々羨ましくも思える時もあります。しかし、それだけに、そういった恵まれた環境にある先生方には、しっかりとした研究成果を上げて頂き、失礼ながら、それを自分の学業実績のためだけとか、あるいは自分たち学術界だけのものとはせず、国民全体のものとするために、誰にも判りやすい形で、そして誰でも知り得るような形で国民に研究成果をフィードバックして頂きたいものと願ってやみません。

10. 学術研究成果の目に見えた形での国民へのフィードバックを

私たちが民間主導で、そして地域の力で満蒙開拓に特化した資料館を作ろうと思うに至った幾つかの理由の一つとして、もう30年近くも前のことですが、この地域に満蒙開拓のことを研究に入られた学者の先生方のグループがありました。その中には大変研究熱心

で誠実な研究者の先生方も数多くおられました。しかし一部の研究者の中には、当方の両親らも含め多くの開拓団員らから沢山の資料を出させて持ち帰り、それらのうちの資料のうちの一部は返却を要請しても返してくれることはありませんでした。その先生方はそれらの研究成果により一定の学業実績として成果を上げられたようであり、それらの研究成果等は一般人には手が届かないような高価または専門的過ぎる専門研究書等とはなったようですが、開拓団員らの一般市民の所に判りやすいような形でのフィードバックがなされたことはほとんどありませんでした。私事私情ながら、そのことに対する反感、反省等からも学者の先生方の中の一部には自分の学績向上のために主として動き、市民にはなかなかフィードバックしてはくれない先生もいらっしゃるのだなという思いが強まったのも事実でした。この一部の学者の先生方に対する不信感は、その後、何人かの人格的にも優れた先生方との出会い、交流等の中で、本当に研究成果をフィードバックすることに努めてくれる信頼出来る先生方もいるのだという形で払拭されることとなりました。勿論、加藤先生もそのお一人です。しかし、戦後における中・長期的なタイムスパンの中では、やはり満蒙開拓関係等に関しては学術研究界全体としての研究成果自体等の国民へのフィードバックは不十分であったのではないかと言う疑念はなかなか消えることはありませんでした。私たちもまた元開拓団員の皆さん等との直接の触れ合い等の中から得てきた調査研究成果等を広く公開等することにより、歴史研究の進展のために少しでもお役に立てれば良いものと願っています。

1 1. 最後に

いずれにしても、こういった満蒙開拓研究等に対する過去の取り組み経過、状況等を振り返ってみるに、旧満州からの引き揚げ等についてもその実態、背景等について国民が身近な形で知ることの機会が少なかったという事実の中で、今回の NHK による『どこにもない国』のドラマ化はやはりインパクトのある大きな出来事であったと思います。勿論、ドラマ化に当たっては、短い放送時間の中にいろいろなことを凝縮し伝えなくてはならない等の制約等からややフィクション的なことが盛り込まれたり、あるいは誇張等も介入したり、逆に省略等されてしまった部分等もあったのかも知れません。しかし、それがあつたとしても、より多くの国民が身近な形でこの旧満州からの引き揚げというテーマに少しでも知識、関心を持つきっかけとなってくれたことは間違いなく、これはやはりこのことを取り上げて2週に渡ってのドラマとして世に出してくれたNHKの功績もまた大きいものと思います。

そして、そのドラマ化に際しての原作となった『満州・奇跡の脱出』を世に出したポール丸山さんの努力、功績もまた大きなものがあつたと思います。歴史研究等は大学などの先生方だけでなく、在野の方の中にも素晴らしい調査研究を実践されている方も沢山いらっしゃいます。ポール丸山さんも間違いなくそのお一人です。在野の中からこのような取り組みがなされ、それがまたテレビドラマとしてより多くの人々の目に触れることとなったことは、それは高く評価されて然るべきことと私は思います。在野の民間人であってもここまでやれるのだということを実践されたこともまた、私たち「在野の者」にとっても大きな励みとなるころでした。ポール丸山氏を始めとしたそういった方々の存在をも励みとして、我々もまた頑張っていかななくてはならないものと思っています。

今回、論説を寄せられた加藤聖文先生も旧満州関係等に関して鋭い史的分析をなされる歴史研究者として大変尊敬申し上げますが、同時にポール丸山氏も国際経験、そして人生経験の豊かな紳士であり、何よりもその誠実、高潔、温なお人柄からして心から尊敬出来る人生の大先輩でもあります。そして、父上である丸山邦雄氏と同様に、多くの輝かしい経歴を持たれながらも謙虚なお人柄であり、何よりも真実と正義を探求しようとするそのご姿勢は、その著作『満州・奇跡の脱出』の著述過程においても十分に発揮されているものと思います。

最後に、加藤先生、ポール丸山氏、それぞれより多くの学びの機会を頂いたことに改めて感謝申し上げますと共に、丸山邦雄氏らの功績の再評価等も含め、旧満州に関わる様々な史実等について、私たちもまた出来る限りの、そして出来る範囲内での調査研究に努め、それを多くの皆さんに伝え、共に学んでいきたいものと思います。

(てらさわ・ひでふみ：1953年生まれ。満蒙開拓平和記念館・館長。不動産鑑定士の傍ら館長業務に奔走。元開拓団跡地などを訪ね歩き、両親が暮らした吉林省水曲柳などを20数回訪れる。現在、長野県松川町在住。)

『ポール邦昭丸山氏よりのお手紙』

※. これは『星火方正』前号に掲載の加藤聖文先生の論説のコピーをアメリカ・コロラド在住のポール邦昭丸山氏にお送りしたところ、その後メール添付で寺沢宛て送ってこられた丸山さんよりのお手紙です。今回、丸山さんご自身からも『星火方正』への原稿寄稿を予定していましたが、丸山さんにおかれては今年3月に肩の手術をされたために約2ヶ月にわたりパソコン操作が出来なくなっておられます。丸山さんご本人ともご相談の結果、以前に寺沢宛てお送り頂いていたこのお手紙をその原稿に代えて掲載して欲しいとのご要望であったところから、ここに掲載させていただきます。

寺沢秀文

~~~~~

2019年2月5日

寺沢秀文 様

過日に『星火方正』27号(2018年12月刊)に載った加藤聖文氏の論説「誰が満州引き揚げを実現させたのか」のコピーをお送りくださったことに感謝致します。

実を言いますと、論説の内容並びに加藤氏の『論調』、『指摘』に非常に驚き、かつ悲しく感じています。その論説を読み終わって、何だか私の著書『満州奇跡の脱出』には誤解ばかりが述べてあり、全てデタラメで、私が読者をごまかそうとしたかのような印象が与えられました。とは言え、加藤氏は学者であり、戦時、戦後の満州並びに中国の実情を研究されている方であり、彼の述べたことは加藤氏が学者として調べられたことであり、無視することも、完全に否定することも出来ないものと思います。

ただ、私が著書の中で述べた全ては、自分が父並びに武蔵正道氏等の書かれた本などに基づき、6年以上の調査、研究、確認などを積み上げて来た結果としてのものです。父、武蔵氏の2人が本の中で述べたことが事実に基づいているものであるかを確認する為に、主にはアメリカ国内の資料館(バージニア州のマッカーサー資料館、ニューヨークのメリーノール・カトリック資料館、メリーランド州の国立資料館など)で資料調査、確認を重ねました。その理由は、満洲からの引き揚げに関する資料は、それを主導して実施したアメリカの資料館の方が豊富に保管していると判断したからです。勿論、日本では当時まだ健在であった武蔵正道氏にも直接お会いし聞き取り等いたしました。更に、今はもう存在していませんが「アジア・コンプレックス」と言う日本の製作会社からも各種資料を提供して頂きました。この会社のスタッフの方々はその親たちが満洲からの引揚者だったので満洲に関して非常に詳しい人々でした。これらの長年の調査等に基づいて私の著書は書かれたものです。確かに丸山邦雄は私の父ですが、しかしだからと言って私情に流されて事実の判断に誤り等があるとは思いません、確実な資料の裏付け等を取ることに努めました。決して、父がこう書いたからとか、こう言ったからとか等の私的レベルでの次元からではなく、客観的な資料等に基づいて私の本は書かれたものであることは言うまでも

ありません。

このようにして苦心を重ねて事実に基づくものとして書いた私の本ですから、誰かを騙そうとか嘘を述べようとする意図は当然に全く無く、それ故に、今回の加藤氏の論説内容には非常に驚き、傷付けられました。この論説を見ての私の最初の思いとしては、この論説は無視しておこうと思いました。しかし、私がこのことについて全く黙っていれば、加藤氏の述べられた全ての点に納得、賛成している様に思われる恐れがあります。そこで、いつもお世話になっている寺沢さんには、一応下記のコメントを述べさせていただきます。勿論、学者でもなく、日本語が完璧でない私の文章は下手で分かりにくい表現が多いであろうことは確かなので、できるだけ簡潔に短いコメントを述べさせていただくことに致します。

まず最初に、加藤氏は、父の本『なぜコロ島を開いたか』と、武蔵正道氏の本『ユートピアを目指して』の内容を比べると、微妙な相違が見られると述べています。しかし、それ自体は仕方のないことであると思います。何故ならば、父の『なぜコロ島を開いたか』は1970年に出版され、また武蔵氏の本は30年後の2000年に出版されています。2人は同じ出来事、体験についての記憶を辿りながら、父の場合には25年後に、武蔵氏の場合には55年後に本を書いており、その時間の経過等の中で、二人の著書に微妙な相違等があることは仕方のないことであると思います。しかし、勿論、微細な部分の違いはともかくもその体験等における重要な部分についてはその記載が一致していることが当然に必要であると思います。私は、これらの本やこれにまつわることについての調査において、双方における微妙な相違を感じた点もありますが、それらの多くの場合、父の記憶の方が事実に近いだろうと判断しました。その理由は、父は武蔵さんが書かれた時よりも遥かに当時に近い時期に本を書いており、また当然に事実内容を意図的に変えたりするはずもなく、父の記憶の方が正確だろうと判断しました。しかし、これらの微妙な相違点もその多くは重要な部分についてではなく、私が書こうとする物語の内容には影響しないと私は判断しました。

次に、加藤氏の論説の中においては次の様に述べています。

「ただし、丸山らの行動のお陰で引き上げが実現したという話は事実ではない。また、丸山らの前に誰も満州の悲惨な状況を日本政府に伝えていなかったわけでもない。更に、米軍の葫蘆島の存在を知らなかったわけでもない。しかも、マッカーサーは満州から日本人を引き揚げさせる権限はなかった。」

これらの指摘について私としてのコメントを簡潔に述べさせていただきます。

1. 「丸山らの行動のお陰で引き上げが実現したという話は事実ではない。また、丸山らの前に誰も満州の悲惨な状況を日本政府に伝えていなかったわけでもない」

満州からの引き上げが実現したのは、単に丸山ら3人のみの行動のお陰だけに拠るものではなかったと言う点については私も異議がありません。私もそのことについては十分に理解しています。例えば、当方の著書『満州・奇蹟の脱出』の第7章（88ページ、「日

本への密使」)の項においても、「全満日本人会会長高碇達之助の協力のもと、当時満鉄副総裁であった平島敏夫氏は1945年9月に数人の密使を日本に派遣し、満州の悲惨な状況を伝える書類を日本政府に渡した」ことを述べています。丸山らの前に他の日本人らが密かに満州を脱出して、日本政府に報告したことははっきりと著書に書いています。私は著書等の中でも丸山らの活動だけで引き揚げが実現したなどと言ったことは一度もありません。

しかし、丸山等3人の貢献を全く無視するということが自体は間違っており、不正であると思います。この点は後述します。

## 2. 「更に、米軍の葫蘆島の存在を知らなかったわけでもない」

当方著書の第13章でも触れている通り、丸山等はGHQの将校たちに対して満州引き揚げを開始するには「葫蘆島が良い」と提案しました。このことについては当方著書でも述べましたが、その時、将校達の持っていた英文での地図には『Koroto』と書いてある地図しかありませんでした。加藤氏が強調される通り、葫蘆島の存在をアメリカ軍が知らなかったはずは無いということは私もその通りであると思います。ただ、将校達は葫蘆島について『フルダオ』と言う中国語名でしか知っていなかったために、「葫蘆島(ころとう)」という地名は初めて聞き、それがその時の誤解の原因であったと思います。米軍との会合後、3人は神田神保町の書店街などで地図を売っている本屋を必死に探しましたが、敗戦の間際において日本軍の命令により地図類の販売は禁止されていた様です。それらのために葫蘆島を確認するのに混乱がありました。この辺りのことは当方著書でも明記されているところであり、加藤氏がこれらの点等から丸山らの功績を否定等することは的を得ていないことは明らかです。

## 3. 「しかも、マッカーサーは満州から日本人を引き揚げさせる権限はなかった」

この加藤氏の指摘には驚いています。そしてそれは誤っていると思います。私も元米空軍の軍人ですから、軍人社会については熟知しているつもりです。まず、マッカーサーの当時の正式の肩書きは「Supreme Commander of Allied Powers (連合軍総司令官)」で、その時の軍位は五つ星の「元帥」でした。日本敗戦に関してはマッカーサーの功績が最も大きく、軍人の中では日本国の敗戦後の各種処理等に関してはマッカーサーが最大の権限を握っていました。(勿論、アメリカの憲法では大統領がNo. 1ですが、マッカーサーは朝鮮戦争時においてトルーマン大統領の許可なしで北朝鮮に侵攻する態度を見せて首になりました)。いずれにしろ、マッカーサーはその様な権力的地位にあった軍人だったので、中将の軍位にあったウイーデマイヤーがマッカーサー元帥に反対するとは信じられません。更に、マッカーサー指揮下にあったGHQには海外からの引揚者等に関する課題全てを担当する「G-3 Operation Section」があり、マッカーサーの副官であったH.B. Wheeler 大佐がこれを担当していました。ですから、マッカーサーが満州からの日本人引き揚げには権限が無かったと言う加藤氏の指摘は、私自身の調査の結果からしても、また私の軍人経験等からしてもとても信じ難い発言です。仮にもしも加藤氏の指摘が正しかったとしても、マッカーサーが引き揚げに関してウイーデマイヤーに声をかけたなら、ウイーデマイヤー

がマッカーサーに反対するとは到底考えられません。いずれにしろ、満州よりの日本人引き揚げは最終的には GHQ の最高司令官マッカーサーの命令で実現したことには全くの間違いはありません。どの資料を調べても、それだけは確認できます。

私は加藤先生のこれらの史実についての指摘に対して抗議等するつもりはありません。ただ、加藤氏の、非常にストレートな、一方的な各種の主張にただただ驚いています。その主張により、満州よりの引き揚げに尽力した丸山、新甫、武蔵の三氏の命懸けの行動が「ただの空騒ぎ」などと表現されて、何か余計な、無駄なことをしたかのように書かれた論説が『星火方正』に掲載されたことを心から残念に感じており、正直なところ、亡き父、武蔵様、並びに新甫様にどのようにお詫びして良いものか悩んでさえいます。

最後に、例えもしも丸山、新甫、武蔵三氏の尽力により、GHQ が既に計画していたと推定する引き揚げ船出航のスケジュールが進んでいたとしても、彼ら3人の働きによりその事業が更に早く伸展するために寄与していたことはまちがいなく、それだけでも多くの在満日本人の命を救ったことは間違いのないところです。当時、満州では一日に2,500人ぐらいもの日本人が死んでいっていました。彼ら3人の貢献により米軍主導による引き揚げのスケジュールが少しでも早まったことにより、たぶんはそのままならば失われていたであろう数千人、または数万人の命が救われたのではないかと思います。それだけでも丸山達の偉業は無視できないところであり、「丸山らの活動は引き揚げには全く貢献していなかった」などという批判は全く適切なものではないと私は思っています。それは例え加藤氏が指摘する様に3人が GHQ 或いは日本政府に利用されたのであったとしても、それによる貢献は変わらないと思います。私は、この勇氣ある3人の日本人が自ら命をかけて、満州を脱出して、しつこいほどの説得交渉で GHQ や日本政府やカトリック教会などを動かさなかったなら、更に何千、何万人もの民間日本人が犠牲になったか分からないと確信しています。

私はいつも日本人の丁寧、親切、思いやりなどの美德を常に自慢して来た日系三世のアメリカ人です。ですから、私が心から尊敬している3人の日本人英雄に対する今回の思いやりを欠いた不適切な文書とその表現内容に対して心から残念であると思っています。

以上の私の意見が、私の下手な日本語のためにきちんと、また正しく伝わるかどうか懸念がありますがご容赦ください。

この私の意見を、このことについて興味のある方々にも読んで頂くことは全然構いませんが、それについては寺沢さんの判断にお任せします。いつものご親切に感謝しています。

ポール邦昭丸山より

# 性暴力被害の記憶を受け継ぐ

上野 千鶴子

## 無知を恥じる

このところ、満蒙開拓団の引揚げ問題にのめりこんでいる。わけても引揚げ時の女性の性暴力経験に、強い関心を持っている。

それというのもこの2年間ばかり、上野千鶴子・蘭信三・平井和子編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』[上野・蘭・平井 2018]という編著を出すのに、並々でないエネルギーを割いてきたからなのだが、この中には、若い研究者による戦時性暴力研究の成果がいくつも収録されている。注目を集めた「慰安婦」問題ばかりではない。満洲引揚げ時の女性の性暴力経験を論じた猪股祐介「語り出した性暴力被害者---満洲引揚者の犠牲者言説を読み解く」、フィリピンの現地女性強姦事件をめぐる BC 級裁判記録を分析した岡田泰平「日本軍『慰安婦』制度と性暴力」、敗戦後のパンパンの生存戦略を論じた茶園敏美「セックスというコンタクトゾーン---日本占領の経験から」など、これまで論じられてこなかったテーマが扱われている。

また執筆陣のなかでは最高齢である樋口恵子さんが、引揚げ港博多にあった不法中絶実施の施設、二日市保養所の関係者を追跡調査した「引揚げ女性の『不法妊娠』と戦後日本の『中絶の自由』」は、戦後日本の「中絶天国」が、いかなる「水際作戦」をもとに成立したかを考えさせる執念のこもった論文であった。性暴力はそのとき限りで終わらない。トラウマはその後も長く後を引き、性病に罹患したり、場合によっては望まない妊娠や出産を招いたりする。そのトラウマを引きずったまま、戦後も長きにわたって沈黙を守った女たちがいたことを想像させる。

詳細は実際のテキストに当たってほしいと思うが、本書を編集する過程で、生まれる前とはいえ、わたしは近過去に起きた事実、自分が無知なことに驚愕し、恥じた。共編者の蘭信三さんは、同じ大学の同じ社会学研究室出身の後輩、彼が引揚げ研究をやっていたことは知っていた[蘭 1994]が、周囲の無理解な反応と同じく、「若いのにいまだき珍しい主題を扱って…」というものだった。その彼と1冊の本を共に編むことがあろうとは思ってもいなかった。日本オーラルヒストリー学会の会長でもある蘭さんは、オーラルヒストリーの側から性暴力に近づき、わたしはわたしでジェンダー研究の側から性暴力と証言の問題に接近していたのである。

改めてふりかえってみれば、敗戦後外地にいた軍人軍属と民間人の引揚げ者総数はおよそ600万人。当時の国内人口はおよそ7000万人。約1割の日本人に外地経験があることになる。今時グローバルゼーションなどというが、戦前・戦中の日本は、大きな国際移動の時代だったのだ。戦前世代に飢餓体験を聞いたときには、戦時中より敗戦後の方が、食糧不足はひどかったという。働き手も失った荒れ果てた国土に、腹を空かせた1割増の人口が入ってきたのだから、それはそうだろう。その飢餓体験の真っ最中に、戦場から帰って

きたお父さんたちが仕込んだタネが、わたしたち戦後ベビーブーム世代である。

日本軍は至るところで乱暴狼藉を働いた。敗戦後、「引揚げ」という名の国外追放の過程では、それまで日本がやってきたことの報復が各地で起きた。そのひとつが性暴力である。わたしたちの編著には佐藤文香「戦争と性暴力――語りの正統性をめぐって」が収録されているが、佐藤さんはこのなかで、強姦を含む性暴力が統制できない兵士の偶発的な逸脱ではなく、黙認も含む組織的な戦争兵器だと見なされるようになった、最新の欧米の研究動向を紹介している。昨年度のノーベル平和賞受賞者、性暴力被害者を支援してきたコンゴの婦人科医、デニ・ムクウェゲさんと IS の性暴力被害者、ナディア・ムラドさんの二人は、この認識を裏付けたものだ。

## 集団の圧力

戦局が白と黒とにオセロゲームのようにひっくり返ったとき、かつて自国の軍隊がやったことは、そっくりそのままやりかえされる。しかも旧満州で、日本軍は防衛線を後退して、自国の国民を取り残し、守ってさえくれなかった。軍隊は国民を守らない、ということ、満洲開拓民は骨の髄まで味わったはずだ。

わたしが無知を恥じたのは、開拓団の経験をあまりに知らなかったことだ。これまでも引揚げ文学と言われる著作はあった。なかでも女性が書いた体験記、藤原ていの『流れる星は生きている』[藤原 1965、1976]やヨーコ・カワシマ・ワトキンスの『竹林はるか遠く』[2013]のようなものは知っていたし、読んでいた。それがどんなに筆舌に尽くしがたい経験であるかも、想像はついた。だが、書物の書き手の多くは、高学歴の都市生活者、満鉄の従業員や行政マン、教員の家族たちだった。都市部のほかに、ソ満国境に配備された開拓団農民たちが膨大な規模で存在し、そのひとたちの経験が、都市住民の経験と大きく違っていることを知らなかった。敗戦の情報がいちはやくもたらされ、てんでんばらばらに逃避行を試みた都市民と違い、とりわけ分村移民のようなかたちで集団で入植した開拓団員は、集団で行動した。どちらがよかったかはわからない。だが集団での行動は、引揚げ時の混乱に、特有の集団的な同調性の圧力を加える要因になった。

しかも国境警備が手薄になったソ満国境近くに配備された開拓団から、成人男性たちが、敗戦直前に根こそぎ動員された。当時、移民や開拓団を志す青年のなかには、ひそかに徴兵逃れをめざす者たちもいたと聞くから、この根こそぎ動員は番狂わせに違いない。装備も充分でない弱兵たちのなかに投げ込まれて（使える兵卒たちは、すでに南方戦線へと送りだされていたから）、戦闘もしないうちにソ連兵に踏み込まれ、あっというまにシベリア抑留になったのが彼らだ。だが惨憺たる経験だったシベリア抑留でさえ、開拓団員の引揚げ経験と比べればまだましだったかもしれない。彼らは抑留を解かれて復員したあとに、家族の無惨な死を聞かされたのだから。

開拓団引揚者の性暴力被害に、わたしたちが言葉を失うのは、そのなかに、集団の圧力や同調性が作用しているからである。これまでも女性の引揚げ体験には、前出の藤原ていやヨーコ・カワシマ・ワトキンスの他に、澤地久枝『14 歳』[2015]などが知られていた。

だがそのなかにも、性暴力被害は出てこない。都市住民たちは、敗戦の知らせをいち早く受けて、家族単位でばらばらになって逃避行に就いた。ソ満国境地帯よりは、陸続きで朝鮮へも近かった。男手はすでになく、集団の守りはなかったかもしれないが、その代わり「津波てんでんこ」のように、知恵と才覚とで、生存の可能性は高まったかもしれない。また彼ら彼女らは、自分の体験をコトバにして世に送る術を持っていた。だが開拓団員については、ノンフィクションライターによるルポ『麻山事件』[中村 2011]や、遺族会を中心にした回想録『赤き黄土』[部落解放同盟熊本県連合会鹿本支部・旧満州来民開拓団遺族会 1988/1990]『満洲泰阜分村 70 年の歴史と記憶』[＜満洲泰阜分村--70 年の歴史と記憶＞編集委員会編 2007]などの他には、当事者による著作は見当たらない。体験談もほとんどが聞き書きである。筆舌に尽くしがたい極限的な体験だということもあるかもしれない。都市民が相対的に高学歴で言語表現や出版機会のアクセスに恵まれたという事情もあるだろう。だが、それ以上に、記憶をめぐるも集団の統制が働いていたような気がしてならない。<sup>1</sup>

## 性暴力被害の経験

とりわけ性暴力被害の体験については、記憶の抑圧が長い間、作用したことだろう。引揚者の記録のなかに、おびただしくあつただろう女性の性暴力被害体験は、伝聞形でしか記述されていないことは、早くから指摘されていた。いずれも自分ではない他の女性の経験を、見たり聞いたりした、というものだ。そのくらい、性暴力被害はトラウマ（精神的外傷）経験であることに加えて、社会的にはスティグマ（不名誉の烙印）となる経験だった。被害者は「汚れた女」として、未婚者は「お嫁に行けない」とされ、既婚者は貞操を破ったとして離縁されてもしかたがなかった。被害者は「身の恥」として墓場まで持って行くほかない秘密を守りつづけ、当事者の証言を聞くことはなかった。避難が個人化されたところでは、当事者が口をつぐめば、被害の事実は知られずに終わる。

性暴力被害の体験が言語化されるには、長い時間がかかった。2017年8月5日NHK ETV特集「告白 満蒙開拓団の女たち」は、戦後72年経って初めて引揚女性の性暴力被害経験を当事者の口から語る映像を放映した、画期的なものだった。岐阜県加茂郡黒川村（現白川町）から送出された黒川開拓団の生存者、佐藤ハルエさん（93歳）が実名で顔を出してカメラの前で証言したのだ。これに先だつ2013年11月9日には、長野県伊那郡阿智村にある満蒙開拓平和記念館の「語り部講演」で、同じ開拓団に属する女性が、ソ連兵による強姦被害を証言した。その背後には、2013年に開設されたこの民間の記念館と、記憶の継承事業としての「語り部講演」の効果があつただろう。

性暴力被害の背後には、「接待」という名のもとでの、ソ連兵の要求に応じた女性の供出があつた。女性の「選別」に当たったのは、団のリーダーたちだった。出征兵士の妻は除外され、数え年18歳以上の未婚女性に、「団の生死がかかっている」として「接待」が強制された。この問題を論じた猪股は、出征兵士の妻が除外されたことを「不在の団員との『ホモソーシャルな絆』」[上野・蘭・平井 2018: 177]が優先されたと解釈する。開拓団に

は「招集されて不在の仲間たち＝男性への配慮」があった、と。「出征兵士の妻を守る」ことも開拓団の役目であった。出征兵士の妻たちにしても、守られたのは彼女たちの「貞操」であって、それは「皇軍兵士の妻」に強制されたものであった。それが侵されるならば、いっそ死を選ぶというほど、生命よりも貞操が重かったのだ。いずれにしてもこの前提に、女性のセクシュアリティが家父長に属するという性差別的な家父長制の性規範があったことは言うまでもない。

「集団自決」か「性接待」か、の二者択一のもとでは、選別された女性たちにノーを言う自由などなかっただろう。「自由」とは完全に代替可能な選択肢があって初めて行使できるものである。「集団自決」という**代替《不》可能な選択肢しかない**ところでは、選択と見えるものも強制にほかならない。ところで「集団自決」はほんとうに代替選択肢なのだろうか？

我が子を手にかけるよりは、万にひとつの生き延びる可能性を信じて、子どもを満人や漢人に託す人もいた。ここでも集団は、生存の可能性を高めるのか、それともその反対なのかはアンビバレントである。

開拓団が「集団自決」を選択肢としたことには、驚くべき背景があることを、教えてくれたのは下嶋哲朗『非業の生者たち』[下嶋 2012]である。「集団自決 サイパンから満洲へ」と副題のあるこの本は、サイパンでの集団自決を嚆矢として、兵士については「玉砕」が、民間人については「集団自決」が、大本営とメディアによって美化されて波及したことを指摘する。下嶋が「強制集団死」と呼ぶ「集団自決」は、たとえ自発性の見かけを持っていたとしても「強制された自発性」にほかならず、国民の生命をなんとも思わない国家によって、軍の壊滅と運命を共にせよ、という「命令」だった。サイパンから始まった「集団自決」は沖縄に波及し、「軍官民共生共死」の思想のもとで民間人の集団死が迫られた。はるか満洲の地では、軍は防衛線をはるか南に撤退し、民間人を「人の盾」にした。

性暴力被害者は集団によって選別され、その後、集団に戻った。それから後にも、苦難は続いた。集団の中では、誰もが誰が何をしたかを、よく知っていた。「共同体の受難の犠牲者」「生き延びるための人身御供」だった犠牲者たちには、集団の中の匿名性はなかった。帰還後も、「尊い犠牲」だった彼女たちに、差別と蔑視が投げかけられた。まだ小さかった弟は姉のおかげで生きて還ってこられたというのに、「ねえちゃん、お嫁に行けないカラダになった」と言った。またある男性は「減るもんじゃなし」と心ない発言をしたという。犠牲になったうえに蔑視の対象となった被害女性たちに対しては、見て見ぬふりをする「沈黙」が「配慮」であり、共同体の生存戦略だった。

その蔑視に耐えかねて、佐藤ハルエさんは、引き揚げた郷里を後にして、新たな開拓地に向かう。そしてそこで出会った引揚者の男性と、すべてを承知したうえで結婚して家族を営んだ。そして72年間にわたって沈黙してきた。韓国でも、元「慰安婦」の女性の多くが郷里に戻らなかった理由は、共同体のなかの蔑視がもっとも抑圧的だからだ。「戦場から帰ってきた」というだけで、韓国社会に強い家父長制の純潔イデオロギーのもとでは、彼女たちの居場所はなかっただろう。その「慰安婦」被害者が公開の場で証言するにも、半

世紀にわたる沈黙が先だっていた。

## 証言と記憶

2013年の証言には、民間立の満蒙開拓平和記念館の「語り部」プロジェクトが効果を持ったことを述べた。この記念館が飯田市にではなく阿智村といういささか足の悪いロケーションにあることについても、ウラ事情を聞いたことがある。記念館立地の土地探しをしたとき、生存者たちがまだいる地域で、あらためて責任を問うようなことはしたくない、という忌避感が働いたという。行き場がなかったところに、当時の阿智村村長が助け船を出して、立地を提供してくれた。

開拓団の幹部たちが生存するあいだは、被害者の声もまた抑圧されたことだろう。団のリーダー層とその遺族から成る遺族会には、「接待」に供出された女性に対する慚愧の念が、長い間残っていたようである。開拓団記念碑に、「乙女の像」が建立されたのは1982年。未婚女性たちの犠牲に思いを寄せるこの碑には、だが、何の説明も付されていない。

その後、生存者は次々に他界し、遺族会の担い手は次の世代に移行した。昨年11月18日、黒川開拓団遺族会は性暴力被害を記憶するための新たな石碑を、乙女の碑の傍に建立した。除幕式には佐藤さんも立ち会った。遺族会の代表は、生存者がいる間に、と急いだという。

昨年10月21日、つてがあって佐藤ハルエさんとお目にかかる機会があった。小柄な、しかし意思の強そうな高齢の女性が、自宅の茶の間で迎えてくれた。最初にわたしが口を切ったのは、「佐藤さん、話してくださってありがとうございます」という感謝のことばだった。犠牲は彼女が選んだわけではない、だがその後の沈黙は別の問題だ。その沈黙を破る決断をしたのは、彼女自身である。「あんな時代だったからね、しかたなかったと思いますよ」とくり返す佐藤さんには、残り少ない命を前に、これを語り継がねば、という決然とした意思があるように見えた。朝鮮人「慰安婦」のおばあさんたちが、証言したことは佐藤さんの発言に影響しましたか、という問いには、その場ではかばかしい答えは得られなかったが、猪股論文によれば、それも影響しているようだ。<sup>2</sup>元「慰安婦」の女性たちの証言にもっとも抵抗したのは、家族だった。佐藤さんの場合には家族の支えがあったが、家族や共同体の抑圧に抗して、「わたしは悪くない」、「わたしは汚れてなどいない」、と言挙げするには、気持ちの変化があったはずだ。そしてその背景には、#MeTooにつながるような、性暴力を脱スティグマ化する社会の動きがあって、その風がこの高齢の女性の肩を押したと信じている。

出来事が起きてからすでに70年余。過去は今さらなかったことにはできないが、記憶は語り継がなければ消え失せてしまう。わたしたちは、直接の経験者から証言を聞くことのできる最後のチャンスに立ち会っている。語られないままに死者と共に埋もれてしまう多くの記憶がある。語られない限り、それは記憶に残らない。

わけても性暴力被害の経験は、語られない／語られにくい経験だ。性暴力被害は女が受けた被害、二流の被害として軽んじられてきたが、その構造にこそ、性差別があることを

忘れてはならない。生存者が一人去り、二人去り、しているこの転換期に、証言を聞いた者たちが、次の世代に何を伝えるかが問われている。

#### 参考文献

- 蘭信三 1994 『「満州移民」の歴史社会学』 行路社  
上野千鶴子・蘭信三・平井和子編 2018 『戦争と性暴力の比較史へ向けて』 岩波書店  
カワシマ・ワトキンズ、ヨーコ 2013 『竹林はるか遠く 日本人少女ヨーコの戦争体験記』  
ハート出版  
澤地久枝 2015 『14歳くフォーティーン>満洲開拓村からの帰還』 集英社新書  
下嶋哲朗 2012 『非業の生者たち 集団自決サイパンから満洲へ』 岩波書店  
中村雪子 2011 『麻山事件』 草思社  
藤原てい 1965 『流れる星は生きている』 1976 『新版流れる星は生きている』 偕成社  
部落解放同盟熊本県連合会鹿本支部・旧満州来民開拓団遺族会 1988/1990 改訂 『赤き黄土  
地平からの告発来民開拓団』  
保阪正康 2018 『戦場経験者』 ちくま文庫  
<満洲泰阜分村--70年の歴史と記憶>編集委員会編 2007 『満洲泰阜分村 70年の歴史と記  
憶』 不二出版
- 

<sup>1</sup> 保阪正康は戦友会研究のなかで、戦後長きにわたる戦友会の絆が記憶の統制と抑圧に関与したと指摘している[保阪 2018]。

<sup>2</sup> 猪股は証言を「後押ししたのが『慰安婦』である」[上野・蘭・平井 2018: 191]と指摘している。

(うえの・ちづこ: 1948年生まれ。社会学者・東京大学名誉教授。専門は女性学、ジェンダー研究。高齢者の介護問題にも関わる。『近代家族の成立と終焉』(岩波書店)でサントリー学芸賞受賞。「女性学・フェミニズムとケア問題の研究と実践で」朝日賞受賞。主著に『家父長制と資本制』(岩波書店)『ケアの社会学』(太田出版)、新刊に『情報生産者になる』(ちくま新書)など)

## 視線

柳生じゅん子

「満洲に転勤しなさい  
空襲はないだろうから」  
大伯父の言葉に追いたてられ  
船で大連に上陸したとき  
母が一番先に見つけたのは  
キャラメル

二歳になったばかりの兄の口に入れてやると  
いっぺんに花が開いたような表情をして  
見上げた目が輝いてきた  
六十年近くたって  
とてもうれしかったという母

昭和十七年晩秋  
内地では見るまに消えてしまった品々が  
溢れるように揃っていた  
ここを外地と呼ぶカラクリ  
同じように口を開けているこの国の  
大勢の子どもたち  
食べさせてやりたい母親たち  
見え隠れしながら  
きつといたに違いない

波音に混じる鳥の声  
よそよそしい大気の匂い  
日々変わる喧騒  
生れて間もないわたしは 母の背中において  
その母の甘い声 喜びの強い鼓動  
兄のかん高い声につられて  
笑い 手足をばたつかせている  
(わたしの子供たちがそうであったように)

母がトントンとわたしに  
父が気がついて  
覗きこみながら頭をなでてくれる  
満鉄の特急「あじあ」号に乗って  
撫順に行くことになるひととき

一粒のキャラメルに  
甘くふくらむ頬に  
舌は遠い記憶を持ちはじめ  
光と影がさしこんでくる

# 母の帽子

柳生じゅん子

「あんた どこから帰ったの？」って 両方で駆け寄ったのよ。女学校の時の同級生と街でばったり会ってね。一目見て満洲から引き揚げてきたとわかった。お互いに毛糸で編んだ帽子を被っていたからよ。ソ連軍が参戦したときに女の人たちは坊主頭にして 夜は屋根裏に潜ったりしたのよ。女って悲しいと思う悲劇は言い尽くせないほどあったわ。敗戦後もソ連兵は長くいたし 髪を短く切るとは外地で女の人が身を守る痛ましい術だったのね。だから襟足のところを隠すような独特の帽子だったの。お互いに引き揚げてまだ一ヵ月だった。

「北満 ソ連との国境近くよ」とMさんが言って「私は撫順だった」と言ったら急に「あんた（赤ん坊を）おぶってるのね。何人連れて帰ったの」って聞くから「三人とも」と答えたの。Mさんはしばらく口を閉ざした後「私は三人満洲に置いてきた」と絞り出すように言ったの。「みんな？」とやっと尋ねると「そう三人いた子を三人とも満洲に置いてきた」と今度は突き放すようにもう一度言ったわ。でもその後に「どこで死んだ」とか「どんな病気で」という言葉がないの。とっさに私はMさんの中に深い淵を見たような気がしたの。底の見えない淵。どんな光も言葉も届かない淵。夜になってひとりMさんが潜っている淵ね。

敗戦後も 私たちは満鉄の社宅にすることができたの。北から避難してきた社員を受け入れて一家族一部屋になったけど 働いてなんとか食べてもいけた。けれど近くの学校が 北の方から次々と非難してくる人たちの収容所になっていたの。私たちもふとんや衣類を出来る限り供出したけれど 間に合わなかったわね。禁止されていた河の水を飲んで疫痢になって次々と倒れたり 冬はマイナス三十度なのよ。飢えと寒さで毎日のように人が亡くなったの。後でわかったことだけど そういう人の数は二十万人を超えていたのよ。火葬するにも柩も燃やす木もないの。(満洲まつたけ)を山に取りに行く人に「死体を見る覚悟がないと行けないよ」と言われて それでもついて行ったら 痩せて骨ばかりの子供の死体を山犬が食い散らかした跡があちこちにあって 自分がよく気が変にならないできたなあと思う光景ばかりだったわね。けれど冬に亡くなると山に埋めることも出来ないから 凍って丸太のように河原に転がされていたの。寒さに 死んだ人の洋服まで剥いでいるから 恐くて側を震えながら通ったものよ。春になると溶けた死人を今度は毎日毎日一ヵ月近くも河原で焼くの。私たちも手伝ったのよ。どこか感情を殺さない出来ない仕事だったけど その煙と死臭が 中国の空を一面に覆っていくさまは壮絶で 世界の終りを見ているようだったわ。兵士じゃないのよその人たちは。開拓団なんて国策で連れてこられた人たちよ。どんなにか無念だっただろう。戦争はなんて無残なんだってつくづく思ったわ。でもよく考えると中国の人たちもその死臭に耐えてく

れたのだものね。文句言われたって話聞かなかったもの。異国の風習とはいってもひどいことよ。

会ったばかりの同級生のKさんもたった一人の子供を逃避行の途中病死させて国境近くの山に埋めてきて それから朝鮮の三十八度線を越えるのは辛かったと悲嘆にくれていたわ。もしかしたらMさんの子供さんもそうだったのかも知れないね。でもKさんの話を慰めにしてはいけないもの。どんなに同じような境遇に見えても ひとりひとり受けた痛みは違うものよ。

収容所では毎日のように子供たちが連れて行かれたの。人間せっぱ詰まると地獄よ。恐ろしいとかかわいそうだと思っても誰もどうすることも出来ないし。子供たちはみんなお腹をすかせていたもの。親自身が病気だったりすると 日本にいつ帰れるかわからない時だったからね。親が死ぬとその子たちはすぐにどこかへ連れて行かれていたの。Mさんも売った子がいたのかなあ。中国の人に渡すことは子どもを生かす最後の方法でもあったのよ。残った者を生き延びさせる方法でもあったけれど。本当のことはわからない。でも私からは聞いてはいけないと思った。だって あの苛酷な状況の時に 本当のことって何？ その時その時必死で考えて親がした選択は昔も今も本当のことだと私は思うよ。

「ダンナさんは満鉄？」って聞くからうなずくと「じゃあ皆無事に帰ってこられるよね。それに撫順は石炭があったからね」と言われて針でさされるような心地だったわ。石炭が生命を繋いだのは本当よ。収容所だって撫順はストーブを焚けたからね。Mさんのいた北満の方はどんなにか大変だったろうと 聞かなくてもわかったわ。私にも話したいことは沢山あったけど 胸が詰まって何もいえないでいると Mさんは私の背中のTちゃん（弟）の頭をなでるの。ねんねこの中で 気持ち良く眠っているTちゃんを黙っていつまでもなでるの。そこには静かな別の時間が流れているようだったわ。満洲の広野がどこまでも淋しく広がっていくの。だんだん低くなっていく土饅頭の墓や 風に晒された細い骨。そこへ落ちていく赤い大きな夕陽。赤ん坊にお乳をふくませるあの至福の時間も頬をかすめたわ。その時Mさんを包んでいた冷たい気配のようなものが緩んで 淵が少し見えた気がしたの。水面に子供さんたちとのどんな日々が写っているのかしらと。Mさんが私の方を少しでも触ってくれたら きっとそこから涙が吹き出していたわ。

「もう帽子は被らなくてもいいよ」ってMさんはどこかきっぱりと私に笑って言うてくれたの。女学校の時からしっかりした人だったなあ。それっきり。Mさんは あの帽子いつごろ脱いだのかしらね。止まった時をいつ動かしたかしらね。歳月は残酷だけど いつか薬にもなるから Mさんの淵が澄んできてそのまわりで子供さんたちが陽を浴びながらもう一度遊んでいるような日があってほしいものね。同期会には一度も来ないままだけど 私は忘れたことはないわ。

中国残留日本人孤児の記事を私はいねいに読むの。あの時Mさんの前で流せ

なかった涙をいつも流しているわ。もう一度会ったら一緒に泣きたいとずっと思ってきたもの。あの時中国の人に預かってもらっておけば 生きて会えることもあったんだと 嘆いたYさんという同級生もいたけど その時も私はMさんを思ったわ。置いてゆかれた子供の方のことを思えば 親は決して希望という形だけで思い続けることは出来ない気がしたわ。それでも子供を亡くしてきたYさんには言えないものね。そのYさんも早くに亡くなったわね。

どの子供もMさんの子供よ。どの子供も KさんやYさんの子供たちなのよ。私の子供だったかもしれないのよ。どんなに長い間親も辛かったかしらね。心の中で責められ続けてきたと思うよ。でも親たちも私と同じ八十歳は過ぎているのよ。だから孤児たちにごめんねごめんなさいね。お母さんに会えなくても どうか許してあげてねって 新聞の顔写真をひとりひとりなでながら 私はいつも言っているの。

(やぎゅう・じゅんこ：1942年生まれ。秋に中国東北部旧満州撫順へ。父は南満州鉄道勤務。1946年秋に、中国葫蘆島より引揚げ、福岡県に住む。母の語りを作品化するために「満州研究会」に通った。日本現代詩人会・日本詩人クラブ・日本社会文学会・日本文芸家協会 各会員)

# 私の引揚げ体験と『星火方正』など

戸田 和歌

## 引き揚げ体験—その1

田井光枝さん

先日は一年ぶりに再会できましてとても嬉しゅうございました。早速ですがお渡ししました”わんりい”の過去の資料につきまして一寸説明させていただきます。

私の友人で生長の家関係の人がおります。今回、大類善啓氏が書かれた”わんりい”の234号と235号の記事\*を読みましてふとこの友人を思い出しました。彼女は京都出身で、お父様が元大本（教）の信者でいらっしゃられたこと、生長の家の創始者の谷口雅春と一緒に当時活動をされていたと彼女が述べておられました。そこでこの”わんりい”の記事を渡しましたところ彼女に大変喜ばれました。それからさらに彼女が生長の家の方々などにこのコピーで伝え、皆様が生長の家の歴史の一端を大類先生の御文章により当時を垣間見ることが出来たのではと察しています。

大本（教）と言いましても現在の私たち（80歳前後）でさえ、大本事件の頃のことは皆目分からない時代になっておりますが、少し時代を遡りますと歴史の行間に色々な時代がありましたことが浮かび上がってきます。特にエスペラント語の普及について色々知ることになりましたことを大類先生に感謝しております。

それから田井さんには『星火方正』の一冊をいただきまして有難うございます。私は父が大学卒業後樺太の営林署に勤めた関係で1938年樺太に生まれましたが、更に父の満州林業に転職で渡満しました。父は終戦の2カ月前に現地応召で母と姉（9才）私（7才）弟（3才）が奉天（編集部注：現、瀋陽）の日本人アパートに残されました。ロシア兵の来襲で、海城に逃避行となり、治安が治った奉天に戻り、昭和21年6月に母と子供3人は無事に日本に引揚げて来ました。在満、満州の混乱中のことは幼かった私にとりまして、歴史的事実の記憶が曖昧で、細かいことが不明のため、人に聞かれましてもはっきりしたことが言えず、この時期のことは記憶喪失したかのようでしたが、引揚げの全体像が『星火方正』等読むことで少しはっきりして来ました。ようやく当時の全貌が少し分かりましたことは私の生涯中とても大事なことで有難いことでございます。

先日、高校の同窓会に出席する機会がありましたが、今回はこの歳になって、同席した隣のクラスの女性が突然、”川島（私の旧姓）さんは満州から引揚げて来られたと00君（私と同じクラスで学年で唯一の引揚者と思っていた。彼はチチハルから帰られた由。）から聞きました、と話しかけられ大変驚きました。彼女も00君と同じチチハルからの引揚げだとおっしゃったのです。同学年に満州引揚者の女性が存在したとは！ 翌日千葉県花見川の

彼女の自宅に早速電話をしました。彼女は満州でチフス（私の母も患ったが九死に一生を得た）に患ったこと、移動中に弟さんを栄養失調で亡くされた等々。更に新しい事実、私の同じクラスにもう既に亡くなられた女性がやはり引揚者だったことを教えてくれました。そのことも驚きの一言でした。戦後 70 年経ってお互いに自分の過去を伝えることもせず時間のみが過ぎ去ったわけです。

引揚者は自分の過去を伝える人がなく、自分でさえもそのことを忘れよう忘れようとしてきたことは何故か？ それは引揚げの事実は悲惨であったし、人間苦しいことは語りたくないということはありますが、更に思いますのは満州に職を得た人たちが日本の植民地建設に携わっていた面も拭い去ることができず、負い目があったことも否定できない、このことを長い間考えさせられました。日本人全体が中国人、韓国人に負い目を感じていると考えるのは事実でしょう。当時は満州行きを希望した時代でしたし、父は後になって当局の命により満州に渡ったと記してありますが。このことの複雑さを掘り下げることでこれからの時代にどう前向きに対処するかには私は希望を持ちたいです。読書の際にドイツの戦後の前向きな細かい対処に気づくことがあります。

その後中年になって台湾の人（文化大革命の時台湾に渡った由）と趣味のクラブで友達になりましたが、親しくしていながら私が満州帰りのことをついに話せず別れてしまいました。

私の長男は現在カルフォルニアに住んでいます。孫娘の高3と小5の男の子は多様な国から来た家族の友達と毎日過ごしており、息子一家はアルメニア人が多い地区に住み、近くにその他欧米人たち、韓国人、中国人も住んでいます。研究所勤めの息子は沢山の国からきた同僚と働いています。ところが最近、北朝鮮のミサイル事件の対アメリカ、日本への脅威がありました際、息子のお嫁さんが言いますには“わたくしたちは韓国人の父兄とレストランに行ったり、こんなに仲良くしているのに国と国とでは難しいことがあって、苦しいわ”と。私は戦後がこういう形で続いていることを実感しました。

戦争の被害者意識と加害者意識が長い間続いていると思います。私たちや世界のまた日本の学者が戦後の処理の複雑さを掘り下げることで、国と国との対立が融和の道へ進むようもつと模索して発表して下さることを希望したいです。国と国、人と人との交流が密になることで前へ進むかもしれないと思います。

『星火方正』で教えてくださいました、「方正日本人公墓」の存在（私は最近まで知りませんでした。）をもっと世に知られるようにして日中友好が進むことを願っています。

田井さんたち“わんりい”に長く携わっていらっしゃる方々は日本ではなかなかできないことを続けていらっしゃることに感謝しています。私はたいしたことができなくてと常々思っています。

前述の花見川の同級生は 2017 年の“引き揚げ 70 周年記念の集い”に残念ながら出かけられなかったので記録を取り寄せたとおっしゃいますので、『星火方正』の小冊子が出ていて、私が田井さんから戴いたことを伝えましたら、彼女は『星火方正』の発行元に連絡してみるということでした。

\*筆者注 2018年5月1日“わんりい”233号“混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」” 第23回 出口王仁三郎とは何者か？ 234号第24回「本当の世界平和」を願った王仁三郎

## 引き揚げ体験—その2

私の一家の満州での終戦前後の全体的経過につきましては、当時3～7歳で、幼くて体が弱くて引きこもりがちな私としては、分からないことが多く、書きました事柄の時間の経過には間違いがあるかもしれません。目前で経験したことの印象と、後になって繰り返し脳裏に浮かぶようになったことの実事と感想を順を追って述べたいと思います。

### ソ連兵の足音

川島茂生（父） 昭和20年、38歳、川島彰子（母）35歳、小織（長女）9歳、和歌（次女）7歳、伸也（次男）3歳

奉天市大和区葵町砂山壮 社宅日本人アパートに住む

終戦時の混乱で一家の住んでいた、日本人アパートは一カ所あった大きい門を閉鎖し、大きい木版をX状に釘付けにしていました。ソ連兵が独特の手を横に振り、脚を高く揚げる行進の音を響かせて街に侵入するのを聞いたのは大変な恐怖でした。

ある日母が私たちを連れ出して、私と姉はどこかで坊主頭にされました。女の子は衣類は女の子でしたが、男の子と同じように見せるためでした。

父の応召前は、ロの字型の2階建てアパートの2階に住み、熊の毛皮の敷物や当時珍しい蓄音機のある暮らしでしたが、父が不在となってソ連兵に接収され、1階のやや暗い部屋に移りました。そこで牡丹江からの逃避行の人を受け入れ、寺井さん（お名前を覚えています）一家、夫婦と子供3人と一時期襖を隔てて暮らしました。

### 姉が迷子に

この頃ははっきりしませんが、9歳の姉が韓国街で迷子になったことがあります。家の使用人で安（アン）さんという、家族に尽くしてくれていた韓国人が姉を探し出してくれました。人格者で樺太林野庁より満州林業に今でいうスカウトされたのかもしれない父（父は樺太を離れる時、部下に慕われていましたので、部下数人を連れて満州林業に移っていました。）と優しい母は中国人と韓国人を大事にしていたことを覚えています。韓国人の安さんは私たちにとって姉の命の恩人とも言えます。戦後、母があの人たちは良い人だったがどうなったかしら、と話していました。日本人と中国人、韓国人が対立ばかりしていたとは私には思えないのです。（私が46歳の時、主人が海外勤務になってアメリカに滞在しましたが、一般的に外地で子供が迷子になるということは大変危ないことと知りました。）

父が不在で生活が困窮することになり、母は現金収入を得るため、お醤油を仕入れて小分けにして日本人の家庭だけだったかもしれませんが小売りをしていました。部屋にお醬

油の瓶がたくさん並んでいました。（昔は高知ではお酒を小分けにして売っていたとか聞きます。）高知県安芸市黒鳥の田舎村の出でしたが、一応、蔵もある家の女学校勤務の2番目の跡取り娘（長女は親戚の家に嫁ぎ）でゆったり育った優しい母でした。5人の子供（長兄は一度満州に連れて行きましたが、小児結核となり、終戦前に内地に戻っていた。末の妹は戦後の生まれ。）を大学まで行かせるため、長年畑仕事とアルバイトで大変苦勞して頑張ってくれました。

## 逃避行

8月にソ連参戦の報が伝わり、近いうち奉天も戦場になるかもしれないというので、女子供は疎開しなければならないとアパートを出て奉天を離れることになり、翌日帯芯で作ったリュックサックを背負い逃避行となりました。覚えているのは広大な平原に行く無蓋列車に乗ったことです。列車はよく止まりました。列車が動きますと突然、私の衣類で日本の帰国先の住所を書いて縫い付けたものが風で飛ばされて無くなりました。その時の不安感の子供ながら大変でした。この時のことを後年度々繰り返し思い出すのです。

止まった収容所は学校のような感じでしたが、敷物は土の上にアンペラという“むしろ”のような敷物一枚だったようです。食事の内容はこうりゃんで小豆色の粒状で、ボソボソした噛みごたえのあるもので、食器がないのでおにぎりでした。今ではもう一度食べてみたいと思うことがあります。

奉天の元のアパートに戻ることに戻りましたが、帰り着いた時のアパートの部屋の中は大変な荒れようでした。大事にしていたものはほとんど無くなっていました。

父は万里の長城近くで終戦となり、部隊は奉天に一旦帰り、遼陽で武装解除になり、海城にも寄ったそうです。一時期私たちと同じところにいたかもしれせん。海城の駅で捕虜としてシベリアに行くものと南へ行くものと別れ、南へ行く組に入れられ、幸いシベリア行きを免れました。南方へ行った捕虜としても大変つらい暮らしだったと述べています。戦局は悪化し、父は軍人としては年齢的に最終の老兵の召集でした。

満州の冬の寒さで子供達は空き家になった家に入り暖房用に家の壁などを剥がして集めました。

## 母がチブスに

母がチブスに罹り、寝たきりになりました。死ぬかもしれないとお金を腹巻きに巻いていたそうです。高熱のためうわ言を言うので皆に分かってしまった旨。

近所の日本人の隣人は母が亡くなった時は手分けして子供3人を連れて行かねばと相談していたらしいのです。母が奇跡的に回復した時は寝汗のため布団の下の畳が腐っていたとか。私と弟は母のそばでうろうろするばかりでしたが、姉は母と弟と妹を世話しました。高熱の母のためにリンゴを探したりして、姉は母の命を救ったかもしれません。

迷子の事件や母の看病の姉の当時の苦勞と不安を思うと、2児を育てた姉ですが、後年になって表情の少ない姉にこの時のことが生い立ちとして影響したのではと思うことがあ

ります。とにかく私たちは残留孤児になるのを免れたのです。

## 母は遺骨を胸に

ようやく帰国できることになり、葫蘆島に集結し、アメリカ軍より調達された巨大な軍艦に乗船しました。船底の大きな開口部を覚えています。

舞鶴に上陸した後、初めて見るような四国鉄道に乗り、ようやく土佐電鉄の終着駅の安芸に着きました。6月でしたから、私は夏服の着の身着のままの姿でした。その時の様子をたまたま女学校帰りの従姉妹が目にしたようで、大変な格好だったとか。母は夫の母、義母（父は養子で母のところに婿入りしたのですが、渡満して実母を満州に呼び寄せていました。その母を終戦前に亡くしていました。）の白い布でくるんだ遺骨を胸に、リュックサックを背負い、その上に弟を乗せたりで帰国したのです。

子供達3人を生きて日本に連れ帰り、義母の遺骨も持ち帰った母と翌年帰還した父の思いはどんなだったろうと、最近の父母への私の思いには深いものがあります。

## 樺太

私の誕生の地は樺太の敷香（ホロナイスク、姉の誕生の地）の近くの野頃（ウラジミロヴォ）です。3歳の時樺太を離れましたので、樺太のことはおぼえているのはペチカぐらいです。一度現地に行って樺太の気候と景色に触れたいと長年願っていました。まだ簡単に行けそうにもないですが、気楽に行ける日が早く来ることを願っています。私の経歴からして東アジアの国々の友好と平安を心から願わずにはられません。

（とだ・わか：1938年生まれ、出版社勤務、主婦業、1984～87年ニューヨーク市在住、ニューヨーク市にて病院ボランティア、帰国後ボランティア活動を紹介され、現在八王子市で地域ボランティア活動を行う）

# 田井光枝さんとの出会いと戸田和歌さんの手紙

大類 善啓

2016年の初めだったか、日中文化交流市民サークル誌‘わんりい’の編集発行人だった田井光枝さんから、「なにかエスペラントについて書いてください」と言われた。当初は2、3回のみだったが、「興に乗ればもう少し書くかもしれません」と田井さんにお話したところ、「大いに結構、ずっと書いてください」と言われ、国家や民族を超えて、「我々は人類の一員だ」というエスペラントの創始者、ザメンホフの人類人主義という考えなどについて2016年3月号から書き始め、結果的には「日本エスペランティスト列伝」のような形になって2年半ほど28回に亘り連載し、日本のユニークなエスペランティストたちを紹介してきた。

名前を挙げると、中国人劉仁と結婚し中国に渡り、日本に向けて反戦放送をした長谷川テル、ベトナム戦争に加担する佐藤栄作政権に抗議して官邸前で焼身自殺をした由比忠之進、岩波新書『ザメンホフ』の著者で清廉な伊東三郎、アナーキスト山鹿泰治、日中戦争に流れる大勢に抗して闘った斎藤秀一などである。

また、大本（教）の教祖と呼ばれた出口王仁三郎を3回に亘って書いた。大本は、1892（明治25）年、京都の綾部で生まれた、出口なおという無学文盲の女性が神がかりになって創唱された、いわば世直し宗教である。関心のある方は、今は亡き一橋大学名誉教授・安丸良夫氏の著『出口なお』（朝日新聞社刊）を読んでみてください。

大本はその後、なおの娘と結婚した出口王仁三郎によって教団は拡大し、知識人や海軍士官などにも信徒が増え、それに危機感を感じた戦前の天皇制日本国家は二度も教団に大弾圧を加えた。カリスマ的な存在だった王仁三郎はエスペラントを推奨し、自らもエスペラントを学んだ。また大本は、教団から教祖的人物を多く輩出したことでも知られている。代表的な人物に「生長の家」の谷口雅春、「世界救世（メシア）教」の岡田茂吉がいる。

連載を終えた後、「読者が拙文を楽しみにしていた」という田井さんからの嬉しいメールをもらった。ちなみに、田井さんは20数年の‘わんりい’の発行活動で、2017年「日中学院倉石賞」を受賞された。以下、田井さんからのメールの一部である。

<子育てを一緒にした古い友人の戸田和歌さんが‘わんりい’の仲間になって下さりもう10何年かになります。その友人に会の活動でお会いした時に、大類さんの原稿を楽しみにしてきたけど掲載がなくなって淋しい。お礼も言いたいと言われました。読者の反響をきっと喜ばれると思うので、戸田さんのお気持ちを書いて見ませんかとお勧めしました>

「戸田さんの引き揚げ体験を知り涙がこぼれました。『星火方正』がきっかけになって引き揚げ体験者の皆さんがどんどん語るようになれるとよいです」という田井さんの言葉に改めて御礼を申し上げます。

（おおるい・よしひろ：本会・理事長。著書に『ある華僑の戦後日中関係史—日中交流のはざまに生きた韓慶愈』（明石書店刊）、共著に『風雪に耐えた「日本人公墓」—ハルビン市方正県物語』（東洋医学舎刊）、『満蒙の新しい地平線—衛藤藩吉先生追悼号』（満蒙研究プロジェクト編集委員会編）など）

# 生かされた生命

## —天津の日本租界での生活を思い出しつつ—

水沼 安美

昨年（2018年）の8月、東京新聞に、「語り継ぐ」のタイトルで原稿募集があり、書いて送り採用され掲載されましたがその文は短く、また、ある単語は削除されました。その削除された単語も入れて、戦争中のことを思い出しながら今回、もう少し長くして新たに書いてこのようにまとめてみました。

### 中国天津での日々

太平洋戦争が始まる年の春、父母、私、妹は中国の天津に渡りました。弁護士の父が赴任するためでした。当時天津は、日本租界、フランス租界というように、国別に居住区域が定められていて、私は日本人学校、芙蓉国民学校に入学しました。クラス名は、「忠孝仁義礼」という勇ましいもので、私は「忠組」でした。生活は良かったのでしょうか。革靴を履いて通学していました。

家の外には苦力<sup>クーリー</sup>と呼ばれる中国人労働者がいて、おいしそうパンを食べていました。私が「おいしそう。食べたい」と言うと、母は、「あれはとうもろこしのパンでパサパサしてるのよ」と教えてくれました。

また、通学途中で、日本人が中国人を殴ったり蹴ったりしているのをよく見かけました。蔑みの「チャンコロ」という言葉を発しながら。

学校では、3年生から薙刀の授業があって敵に向っていくことを教えられました。今でも面白く思い出すのは、警戒警報がなったら日本人は大慌てで防空壕に入るのに、中国人は悠々と歩いているのです。中国人は戦争をしていないのですから当然といえば当然でしょうが。

### 日本に帰りたくなかった父

そして迎えた敗戦、父は大らかな中国が好きで日本に帰りたくなかったのですが、技術者や医師は、中国人への指導者として留め置かれ、他の職種の方は帰されたのです。私たちも翌年の4月、日本に帰されました。

我が家も子どもが4人になっていまして、見兼ねた中国人（事務所にいた）が、子どもを預かると申し出てくれたのですが、父母はそれを断ったのです。残留孤児の記事を読むたびに涙したものです。

さて私たちは、持てるだけの物と、一人千円を持って塘沽<sup>タンクウ</sup>に集結し、アメリカの上陸用舟艇で日本に帰ってきました。途中、私と同じ年頃の男児が亡くなり水葬されました。骨も拾えず、両親はさぞ辛かったことでしょう。私たちは、山口県仙崎港に着きました。今

から15年位前、仙崎に行きたくなつたのです。仙崎が、金子みすゞの故郷であることを知ったからです。海と町の景色は覚えておりませんでした、懐かしさが込み上げてきました。

### 生かされた生命

また、知人の父で中国で憲兵をしていた人が、敗戦の報を聞いた途端、中国を逃げ出して日本に帰ったという話を聞きました。日本人に対してだけでなく、中国人をどれだけ虐げていたかが伺えます。

私たちの母は、親戚の家に落ち着いたある日、トイレで大騒ぎを起こしたのです。引揚げの疲れから赤ん坊をトイレに生み落としたのです。ここにも戦争の被害者がいました。危く残留孤児の難を免れた私、平和憲法の有難さを思いつつ、生かされた生命を噛みしめています。

(みずぬま・やすみ：1936年、愛媛県生まれ。父の仕事で中国北部の天津へ移住。1946年、日本に引揚げる。群馬県藤岡市で46年間、幼稚園の園長として勤めていた。現在、埼玉県東松山市在住)

「日本人」はどうやってつくられたか、そして、

どこに向かうべきか

高井 弘之

### はじめに―「日本―天皇制 150年」の現在―

昨2018年は、「明治150年」ということで、「近代日本国家150年」が政府によって礼賛された。そして、それは、いま、その「代替わり」を迎え、メディアを中心にその大讃美が行われている天皇制の150年でもあった。

ところで、150年という数え方（「明治150年」）をされる天皇制日本国家―日本とは、列島内を流れる時間の中での、後に近代と呼ばれることになるある時点において、その起点的時期がある形で、この列島で設立―組織され始めたものである。古代天皇国家の遺物など、列島の過去や現在に存在していたものなども「材料」として使いつつ、天皇をその中心に置く形で、上から―支配・統治する側から列島住民を組織化して、国家としての実質を備えるようになったものである。日本人意識を持つもので構成される日本人と呼ばれる集団も、その国家内に組織されていく過程で、さまざまな相互運動も伴いつつ、人為的に形成されて来たものであって、それがそのまま、列島内に、古くから、自然のように存在していたということではない。そして、列島住民を組織し構成していく原理として「国体」や日本型オリエンタリズム―レイシズムが存在していた。

つまり、日本とか日本人とか呼び―呼ばれる集団は、人為的・歴史的な構築物であり組織体である。そして、その集団・組織体たる日本国家は、その形成開始直後から、アジアの他地域・他国家への侵略を始め、占領・植民地支配を行い、その間、多くの人びとの生を蹂躪し、殺戮し、かつ、自国民にも犠牲を強いながら、その70数年後には、壊滅の危機に瀕した。

本来なら、上記のような原理で組織され、上記のような行為を行った天皇制日本国家、あるいは、「日本人」という集団は、このとき、完全に解体されなければならなかったと、その後世に生きる私は思う。しかしそうはならなかった。臣民化された列島民衆は、そうしようとはしなかった。

そして、その日本国家―大日本帝国における国体―天皇制も、植民地主義・レイシズムも、排外的・侵略的「富国強兵」政策も、他のアジアの国々・人びとに対する傲慢・偏狭な姿勢も、自国内の「日本人」以外の人びとに対する差別・抑圧も、戦後日本国家―日本社会へと継続―継承された。

そしていまや、その「継承」の程度をよしとしない日本人―日本ナショナリズム勢力によって、戦後日本国家は占拠され、もはや日本社会は、あるいは、「日本人」という集団は、それら存在感を強め続ける上記「主義・姿勢・原理」―大日本帝国原理とでも呼ぶべきものによって、「戦後」のこれまでとは違う次元で再組織化され、その方向で、行き着くところまで行こうとしつつあるように見える。その「行き着くところ」に現出するのは、明確な形は定かでないとも、地獄絵以外のものではないだろう。

状況が上のようなのであるなら、私たちには、彼らとは別の方向性と理由・目的による「天

皇制日本国家150年」—日本ナショナリズムの総括と対象化、そしてそれに基づくその克服・解体作業の開始が、このいまこそ、切実に求められているのではないだろうか。それは、日本ナショナリズムの主体たる「日本—日本人」を組織した原理を明示してその「日本」の正体を明らかにし、それら、それを構成しているものを一枚一枚剥がして、日本ナショナリズムを解体する作業でなければならないだろう。そして、その先に、どのような新たな列島社会と東アジアを展望していけるのか。

私は、この課題に向き合うべく、非力ながら、昨年と今年、『礼賛される「日本150年」とは、実は、何か—日本ナショナリズムの解体と新たな列島社会の形成に向けて—』『民主主義にとって象徴天皇制とは何か—天皇制大讃美を目の前にして—』の二著を作成—発行した。ここでは、紙数の関係上、その克服—解体作業の対象たる「日本—日本人」の形成過程及びその「正体」の一端に絞って記してみたい。

## 一 列島民衆の「日本人」化過程

### 江戸期の人びとにとっての「日本」

元会津藩士である井深梶之助は、近代日本国家が行なった日清戦争の渦中で、次のような回想をしている。

試みに王政維新前のことを想い見よ。非凡の学者は格別、通常の人己の生国または藩あるを知りて、日本国または日本国民なるものあるを知らざりき。現に余輩の学校に在る時に日本国民という詞を聞きたる覚えなし。ただ常に耳にしたところのものは、江戸將軍家、薩摩、長州、土佐、鍋島、尾州、紀州、水戸、越前等という名称なりき。成る程たまには、日本、唐土、天竺等の語を耳にせざるに非ざれども、実に茫々漠々として雲をつかむ如き考えなりき。実に余は会津藩士たる我なるを知りたれども、日本国民たる我あるを知らざりしといいて可なり。（「社会改良の前途に就いて」明治二十七年九月、於横浜女子夏期学校。井深梶之助：明治学院総理。キリスト教牧師）

この井深氏は、近代日本国家成立以前の徳川幕藩体制時代には、「会津藩士たる我なるを知りたれども、日本国民たる我あるを知らざりし」状況だったのである。つまり、自分が会津藩士であるという自覚はあっても、日本国民であるという意識は全くなかったというのである。そして、「日本」という語を耳にすることもあるにはあったが、その語は「実に茫々漠々として雲をつかむ如き」ものだったのである。

当時の日本列島（アイヌモシリ—蝦夷地や琉球を除く）を覆う統治組織であった徳川幕藩体制国家を構成する藩組織である会津藩・藩士にして、「日本」との関係はこのようであった。では、その会津藩に住む藩士たらざる住民はどうだったのだろうか。近代日本国家成立過程で行われた戊辰戦争で新政府軍—官軍の指導者として会津藩の攻略を手掛けた板垣退助は、次のような回想を記している。

会津は天下屈指の雄藩也、若し上下心を一にし、戮力以て藩国に尽くさば、僅かに五千未満の我官兵、あに容易に之を降すを得んや。しかもかくの如く庶民難を避けて負

荷逃散し、毫も累世の君恩にむくゆるの慨なく、その滅亡を眼前に見て風馬牛の感をなす所以のものは果して何の故ぞ。・・かくの如く一般人民に愛国心なき所以のものは、畢竟上下離隔し、士族の階級がその樂を独占して、平素に在て人民と之を分たざりし結果に外ならず。(平石弁蔵著『會津戊辰戦争』へ寄せた序文)

会津藩は天下屈指の雄藩であるから、藩士と藩の領民—「庶民」らが「上下心を一にし」て「藩国に尽く」していたら、容易に官軍を倒せていたはずである。しかし庶民らは「難を避けて」逃げ、藩の「滅亡を眼前に見て」も、全く自分には関係がない様子だったのである。これは、当時の会津藩に住み暮らす庶民に藩に対する帰属意識や一体感はなく、したがって、その戦も、「我われの戦争」ではなかったことを示している。上の井深氏のような藩士ではない庶民—民衆にとっては、藩との関係さえこのようなものであったのだから、「日本」なるものとの関係性がどうであったかは言うまでもないだろう。

ここでは、二例しか紹介できないが、明治新政府が近代国民国家の建設を始める以前の列島住民には、いまの「私たち日本人」が当たり前のように持っているだろう、「日本」への共属意識や「我が国」意識、あるいは、自分が日本人であるという意識や「我われ日本人」意識といったものが存在していたわけではない。むしろ、それらの意識と一体のものであるところの「日本」という形での一体的な「まとまり」—集団や国が存在していたわけでもない。

#### 「我われの戦争」としての日清戦争

しかし、新政府が発足してからわずか30数年後の列島住民は、日本国家が起こした中国(清)との戦争を、「我が国日本」の「我われの戦争」と捉えるようになっていた。

たとえば、日清戦争の渦中の1894年の夏、信州の山々をめぐるイギリスの登山家ウォルター・ウェストンは、その著で「この愛国的な国民4100万人全部は、戦争の進展について心も望みも一つになっていた。」(ウェストン著『日本アルプス』—植村和秀著『ナショナルリズム入門』より)と述べている。むしろ、彼は当時の列島全ての状況を見たわけではないだろうし、「愛国的な国民4100万人全部」というのも、ややオーバーではあるだろう。しかし、日清戦争時、多くの列島住民がこの戦争を「我が国の我われの戦争」と感じ、捉えていたことは多くの史料が語るところである。

たとえば、軍への義捐金献納運動が経済力・職業・地域等々の違いにかかわらず広範に行なわれたこと、日本軍の勝利に興奮し、祝勝会や祝勝行列が盛大に行なわれたことなどを当時の新聞は盛んに報道している。それらの中には、生活に困窮している家族が、「貧乏こそすれ国民の一人(いちにん)、何卒(どうぞ)我等生涯のうち、何かお国の為になる事をして、お天子さまへ御恩報じがいたしたい」(『読売』1894年8月10日)として献金したことを知らせる記事などもあった。

幕末、自らが住む国一藩の「戦争」は、その家臣ではなかった多くの住民にとって、決して、「我々の戦争」ではなかった。しかし、1868年に明治新政府が発足して以降、学校・軍隊・諸儀式・祝祭等を通しての臣民—国民化教育、新聞・雑誌メディアなどのもつ「教育・教化・一体化」機能、そして、なにより、敵国という「他」の現前化によって、列島住民の多数は「自国」意識—「我われ日本人意識」を持つようになっていった。さらに、

その戦争自体を戦うのが、武士ではなく、列島各地に住む一般の庶民・民衆なのである。こうして、日清戦争は、列島民衆一臣民・国民にとって、「我われの戦争」と化していった。

幕末の時点において、「日本」に対する帰属意識も、それに対する一体意識も持っていなかった列島住民が、それから3・40年後の日清・日露戦争の時点では、日本（国家）に対する強い帰属・一体意識を持つに到っている。それは、強い「日本人・日本国民」意識—アイデンティティを持つに到ったと言い換えることもできるだろう。

むろん、「日本」を一つの地域・集合体のようなものとして捉え、呼称することは、上の井深梶之助が言うところの「実に茫々漠々として雲をつかむ如き」ものであれ、「日本、唐土、天竺」などの形で、近代以前から、一定の層の人びとの中には、存在していただろう。また、徳川幕藩体制時代に、経済・政治・思想などのある側面において、近代国民国家としての「日本」につながるような、「日本」としてのゆるやかな一体性が形成され始め、「日本—日本人」意識が、本居宣長ら国学者や儒学者などの知識人を中心に生まれていたとも言えるだろう。（その「かたまり」を、「皇国」や「神州」「本朝」と呼ぶか、「天下」や「本邦」「我が邦」などと呼ぶか、その呼称は別として）

しかし、私が問題にしたいのは、上に述べて来たような、近代国民国家の成立—形成過程で、日本（国家）と自分自身とを一体化させ、「私は日本人」「我われ日本人」という強い意識を持つに到っていく場合のその「日本・日本人」の像—正体である。

## 二 「日本人」をつくった「国体思想」

### 「創られた伝統」としての国体

明治日本国家の出発時、その新国家は、列島に住む大多数の住民・民衆にとっての国—国家ではなく、それは、そのとき、彼・彼女らの「外部」に存在していたと言える。したがって、新政府にとっては、彼・彼女らの「内部化」—組織化が急務であった。新国家との間に（当然ながら）何らの関係もない列島民衆に新国家による統治の根拠（正当性—正統性）を示し、帰属意識を持たせ、自らが組織しようとする国家へと住民—民衆を統合する必要があったのである。

そのために彼らが持ち出したのは、武士・大名らを従わせるときと同じく天皇であり、その組織化の論理と思想がよく表現されているものが、『京都府下人民告諭大意』（1868年10月）である。それは、新国家の統治の根拠を示し、住民を教化するために、明治新政府成立間もない1868年10月に京都府下に出され、その後、政府によって全国的に配布され、その普及をめざしたものである。その『告諭』の要旨は次のようなものだった。

「神州」（日本）は、太古、天皇の祖先が開き、代々、その「皇統」かわることなく、この国を治めて（つまり、「万世一系」）、「しもじも」をいたわり、「しもじも」もまた天皇を尊び仕え奉って、ほかの国のように、国王がたびたびかわったりしない、「上下の恩義」が厚い国なので、「よろづのくに」に勝り、優れている。

ここに表現されている「日本・日本人」像とは、一言でいえば、「国体」イデオロギーといえるだろう。「国体」とは、治安維持法が死刑対象とした「国体の変革」の「国体」であ

り、昭和天皇と大日本帝国支配層がアジアの人びとへの殺戮と列島「臣民」の犠牲を全く顧みることなくその「護持」に必死となったあの「国体」である。「国体」という言葉は、大日本帝国下において、概念上の曖昧さを抱えたまま極めて強いタブー性を有していたものであるが、その基本には、次のような概念一定義が存在していた。

「日本」は、古来、(天照大御神の神勅に基づいて) 万世一系の天皇が統治し、その統治下の民もまた、古来、天皇に忠誠を尽くして来た。それは、古代から不変の「日本」固有のすばらしいものであり、かつ、世界に例のない「万国無比」のものである。これが、日本の「国体」である。

もちろん、このような国体思想における「日本(皇国)・日本人(皇民)」像は、歴史的事実に基づいているものではない。近代明治国家の統治者たちが、それまで、天皇とも「国体」とも無縁であった大多数の列島民衆を新国家に統合し統治するために、それが「日本(の伝統)」であるとして新たに創りあげた虚像である。つまり、「創られた伝統」であると言える。

ちなみに、「創られた伝統」とは、イギリスの歴史家ホブズボームらの著書『The Invention of Tradition』の邦訳のタイトル名であり、「伝統の創造」や「伝統の捏造」といったことを含意している。遠い昔から継承されて来たと思われている「伝統」の多くが、実は近代になって、「国民統合」を図るために、古来の歴史的材料などを使いながら人為的に創り出されたものであるということを示す概念である。上の「国体」的「日本・日本人」像も、国民(臣民)を創出し、国民統合を図ることを目的として人為的に「創られた伝統」であると言えるだろう。

ここでは、明治国家—大日本帝国の核心に存在するこの国体思想の性格と意味するものを、教育勅語に見ておきたい。

### 国体イデオロギーとしての教育勅語

教育勅語の核心は「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」にあるとは、よく言われることである。大日本帝国文部省図書局による教育勅語の『全文通釈』によれば、ここは、次のような意味である。「万一危急の大事が起こったならば、大義に基づいて勇気をふるい一身をささげて皇室国家のためにつくせ。かくして神勅のまにまに天地とともに窮(きわま)りなき宝祚(あまつひつぎ)の御栄(みさかえ)をたすけ奉れ。」(「宝祚」は「天皇の位」の意)。

しかし、何を根拠・理由にして、「一身をささげて皇室国家のためにつくせ」などと命じることができるのだろうか。天皇—国家によるこのような命令を、まるで当然—自然の如くになさしめているもの。それが、この『勅語』の冒頭に(以下のように)表現されている国体イデオロギーであり、上のように天皇が命じ得る根拠なのである。

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ

(明治) 天皇の祖先 (である神々や歴代天皇) がこの国を始めたのは「宏遠」なことであり、道徳を樹立したのは「深厚」なことである。そして、その天皇に忠誠を尽くし、天皇と (しもじもの) 民が「心を一にして」代々その美風をつくり上げて来たことは「我が国体の精華」であり、「教育ノ淵源」もまたここに在るのである。ここに表明されているのは、大日本帝国 (支配) 体制の核心にある国体イデオロギーである。

### 〈国体原理〉と〈人民主権・人権原理〉

教育勅語は、直接的には、自由民権思想・運動に対抗し、それを抑えるために発布された。その核心である国体原理によれば、人民とは、自ら主体となって政治—自己統治を行ったり、国家権力に抵抗・対抗したりするものではなく、天皇・国家に従うものとする。教育勅語は、国体原理に依拠して、それこそが「日本人 (臣民)」であり「日本の伝統」であるという形で「日本」と列島民衆を勝手に定義し、その「像」にしたがって自らをつくりあげる—「教育する—される」ことを列島民衆に強いたのである。そして、その『勅語』に従うものは「朕カ忠良ノ臣民」なのである。つまり、『教育勅語』の本質とは、天皇・国家に忠実な「被治者 (—統治される者) 像」の提示であり、勧めであり、強要である。

以上見て来た、国体的「日本人」像は、社会・国家を自ら形成していく主体としての近代市民革命的人間像とは違い、あくまでも、統治される側の人間—統治の客体としての (模範的) 人間像—被治者像であることに、その特異な性格がある。そして、「日本」像の日本も、ありがたい天皇と、その天皇に治められ、忠節を尽す「日本人」によって構成されているが、それを、万邦無比の素晴らしいものであると無条件に断定する、極めつきの独善性にその特質がある。このような近代国体イデオロギーの形成に大きな影響を与えたのが本居宣長らの国学や、儒学を基本としながら宣長の影響も受けた後期水戸学などである。

近代・国体イデオロギーの源流となる国学や水戸学 (の対内的側面) は、江戸の後期から幕末にかけ、崩れかけたその統治秩序を「上から」立て直そうとする統治者の立場に立って、「被治者」に「心からの服従」を求める性格を持つものであった。それは、天皇をその頂点において、上下の秩序関係—位階秩序を守り、徹底することを農民・民衆に要求する「統治のための民衆教化イデオロギー」であった。つまり、そもそも、〈人民の人民による人民のための政治〉の原理と対極にあるものだったのである。

明治国家—大日本帝国は、列島民衆を支配・統治するために、この「統治のための民衆教化イデオロギー」に必要な手を加えつつ、自らの統治原理としたのである。

## 三「日本150年」の向こうへ—もうひとつの列島社会・東アジア—

### 日本ナショナリズムの解体

筆者は冒頭で、「天皇制日本国家150年」—日本ナショナリズムの克服・解体作業の開

始が、このいまこそ、切実に求められているのではないだろうかと書いた。では、解体は、どのような原理に依拠して行うか。

それは、現憲法の人民主権・人権原理、そして、平和主義原理である。これらの原理を、上記の国体一天皇制・レイシズム・植民地主義・「富国強兵」侵略政策等々に対峙させ、徹底的に統制することによって、無化一解体していく。憲法から導き出す形での批判原理の形成・蓄積の質量が少ないように見える植民地主義やレイシズムに関しては、国連人権諸条約とそれを構成する原理に依拠してそれへの批判―統制―解体を行なっていく。そうして、「国体」等の原理で組織され形成されたところの「日本」を解体し、憲法の人民主権・人権原理・平和主義原理、そして、国連人権諸条約を構成原理とする新たな列島社会の形成を目指す。

### 「日本―日本人」の今後―そして、我われ東アジアピープル―

では、いまの「日本人」意識の方はどうするか。日本人としてのアイデンティティ―「我われ日本人意識」を、アジアの人びとへの加害の歴史―記憶の共有と、その加害責任（―継続されている植民地主義による現在進行形のそれを含めて）を共同で果たす主体を構成するものとして持つ。そして、その集団が自らを構成する原理を、憲法の人権・人民主権・平和主義原理に置く。さらに、そのアイデンティティを、加害の歴史と加害責任を果たす主体としてのそれは保持したまま、東アジアに生きる私たち―〈我われ東アジアピープル〉の方へと開いていけないだろうか。東アジアの平和・共生をつくる〈主体〉の形成の方へと。（アイデンティティとは、多層的・多層的であるはずだし、また、そうあるべきだと思う。）

現在の「日本人」集団の状況を考えると夢見にしか見えないことは承知である。しかし、もはや行き着くところまで来ているように見える「日本―日本人」の「現在」を脱し、未来へと向かうための展望は、このようなものとしてあるのではないかと、私は思い、イメージする。

自らの加害に対してその責任を果たさず、現在なお、アジアの人びとや国内のマイノリティを差別・抑圧し続ける日本国家及び「日本人」集団のその構成員としての責任は背負いつつ、〈我われ東アジアピープル〉の方へ。「日本 150 年」の向こうに、このような自己像―「われわれ像」を、私は描きたい。

※ この拙稿は『礼賛される「日本 150 年」とは、実は、何か』『民主主義にとって象徴天皇制とは何か』の二著を抜萃・構成する形で書きました。紙数の関係で、本稿に記したことの裏付けや根拠史料などはあまり記載できませんでした。詳細は、直接、上記二著にあたっていたら嬉しく思います。以下にご連絡いただければ送らせていただきます。

〈連絡先〉 TEL/FAX:0898-25-7238 Email:takaihiroyuki123@gmail.com

住所／794-0063 愛媛県今治市片山 3-6-5 価格／前者 800 円 後者 900 円

（たかい・ひろゆき：1955 年生まれ。「四国朝鮮学校の子どもたちの教育への権利実現・市民基金」「えひめ教科書裁判を支える会」スタッフ。著書に『誤謬だらけの「坂の上の雲」―明治日本を美化する司馬遼太郎の詐術』（合同出版）『日本問題としての「北朝鮮問題」―朝鮮国家に対する「日本言説」を検証する―』（第四企画）など）

## なぜ中国は気前よくベトナムと北朝鮮に領土を譲与したか？

—毛沢東、周恩来らの国際主義精神を見る—

凌 星光

南シナ海のベトナム領「白竜尾島」はもと「夜鶯島」と言い、淡水のあるかなり広い中国領土であった。しかし、それは 1957 年に中国から譲与されベトナム領となった。

### ベトナムとは兄弟だ！

この島は北緯 20° 01′、東経 107° 42′ に位置し、全島長さ 3 キロメートル、最も広い幅は 1.5 キロ、面積は 2.5 平方キロで、かなり大きな島である。トンキン湾の中心から少しベトナムよりにある島である。1955 年時点では、住民は 64 世帯 249 人（男 127 人、女 122 人）が居住し、すべてが漢民族で漁民としてアワビの生産に従事していた。二つの村があって、大きい方は「浮水洲村」、小さい方は「公司村」と呼び、広東省海南行政区儋県に属していた。

1957 年になぜ中国人島民を移住させ、この島をベトナムに上げることになったのか。それはベトナム戦争と関係がある。ベトナムの指導者ホーチミンが中国に来て、アメリカ帝国主義の飛行機を監視するためにレーダーを設置したい、「夜鶯島」を貸してくれないかと中国側に申し込んだところ、毛沢東はベトナムとは同志であり兄弟関係だ、そんなケチな貸すなどではなく、上げようということになった。今では考えられないことだ。

その後、複雑な歴史を経て、最近では中国とベトナムとの間では島を巡る主権争いが絶えない。ベトナムはこの島を拠点として広い海域の主権を主張し、中国の漁民を拿捕することも起きている。1947 年の国民党時代に南シナ海に 11 段線を引いたが、今では 9 段線になっているが、2 段除去した原因は島の譲与が関係しているとのことだ。現在、海外華僑華人のネット上では、毛沢東、周恩来の「夜鶯島」譲与は国家利益の裏切り行為と非難の声が聞かれる。

北朝鮮に対しても同じようなことがある。1950 年代以前には、中朝国境は鴨緑江と図們江を境とし、水面は中国に所属していた。有名な長白山の観光地天池も完全に中国に属していた。それが 1950 年代に、中朝友誼を固めるために、中国は川の間線境界を境界とすること、また川の中にある島はすべて北朝鮮に所属するとした。その後、金日成が長白山の天池は金日成の太陽「革命事業の発祥地」であるゆえ、天池の一角を譲り受け、革命教育の記念基地にしたいと申し込んできた。毛沢東は、一角などケチなことではなく、半分を上げようということになった。しかも長白山の三つの峰を譲り与え、そのうちの一つ「白頭峰」は「將軍峰」と改称され、正に革命教育の基地

となった。

(資料出所：「四海承風」、2015年8月26日)

### 形骸化しつつある国際主義精神

現在、中国は一般の国と同じく、領土保全、国家主権保持を核心的利益として絶対に譲らない姿勢を示している。それに基づいて、毛沢東、周恩来批判の声が上がっているが、それは正しくない。では現在の核心利益論が間違っているのであろうか。間違っていない、それも正しい。この相矛盾した論理をどう説明するか？ それは社会主義、共産主義理念と現実の近現代国際政治論の矛盾として説明できる。

マルクス主義による社会主義理念に基づけば、国家や国家主権、領土というものは消滅していく運命にある。歴史的に形成された民族とか国家は存在するが、国家や民族を超えたインターナショナリズム、国際主義が提唱される。1919年に設立されたコミンテルン(共産主義インターナショナル)はロシア共産党の呼びかけによるものだが、各国共産党はその一支部に過ぎなかった。そこでは民族や国家の利益よりも世界の社会主義を実現するための国際主義が優先された。

1924年、レーニンが亡くなってからは、スターリンが一国社会主義論を打ち出し、各国共産党は社会主義祖国であるソ連の外交政策を擁護することが国際主義とみられるようになった。その結果、ソ連大国主義による他民族、他国家への抑圧が露呈するようになり、各国共産党間で国際主義と民族主義の矛盾が発生するようになった。1952年のスターリン死後、その矛盾はますます激しくなり、社会主義理念に基づく国際主義は形骸化していった。

しかし、真の共産党員は国際主義者であるべきで、狭隘な民族主義者、愛国主義者であってはならない。当然、毛沢東、周恩来は国際主義者であって、社会主義国であるベトナムや北朝鮮に対して寛容である。領土保全や国境の画定についても、今では考えられないような気前良さを示す。人類の歴史、社会主義実現を考えた場合、それは決して間違っていないし、理にかなったものである。習近平が人類運命共同体理念を提起したが、それは社会主義に基づく国際主義の現代版と見ることができる。

### 毛沢東は戦略的には正しい！

改革開放後、中国において中国的特色のある社会主義の建設というスローガンの下で、国際主義が言われなくなり、専ら愛国主義、国家主権の保持が強調されるようになった。それはなぜか？ 近現代国際政治秩序を是認するようになったからである。

近現代国際政治は1648年に締結されたウエストファリア条約によって始まる。国家主権、領土、国民の概念が形成され、近代国際政治が始まり、その基本的仕組みは現代に及んでいる。中国も含めて社会主義国は、長年、既存の資本主義国際秩序を否定し、革命によって新しい社会主義国際秩序を打ち立てようとした。しかし、社会主義制度の欠陥、更には社会主義陣営の分裂によって、それは失敗に帰した。そこで中

国共産党は改革開放政策に乗り出し、既存の国際政治経済秩序を基本的に肯定するようになった。その不公平なところや欠陥は、西側先進諸国と共に改革していくという姿勢に変わった。そこで、今まで無視してきた国際法を学び、踏襲していくことになり、国家の主権や領土保全を重視するようになったのである。

スターリン生存の頃までは、世界的社会主義の実現はそう遠くない将来とみられていた。既存の資本主義国際秩序は社会主義国際秩序に取って代われる。ところが伝統的社会主義は失敗し、現代資本主義は社会主義要素を取入れ、資本主義の再生が図られた。そこから得た結論は、世界の社会主義実現は遠い将来であり、既存の国際秩序の合理的なところは継承し発展させるべきだ。というわけで、現在中国は、一方で目標である人類運命共同体（国際主義）を説き、他方で国家の利益、国家主権保持、領土保全を強調する。その両者を結び付けて出てくるのが、国家主権の係争を棚上げし、共同開発を進めて、係争を解消していこうというのである。現在中国に、強烈なナショナリストがおり、愛国主義絶対論、国家主権絶対論、領土保全絶対論を説くが、それはマルクス主義に反するし、中国共産党の政策とも相反する。

今から考えると、ベトナムと北朝鮮への領土譲与は、戦術的には思わしくないが、戦略的に考えた場合、決して非難されるべきことではない。

（りょう・せいこう：1933年、東京の深川に生まれ、浜松で育つ。1953年、一橋大学経済学部を中退して中国へ。1980年代末から日本で執筆、講演活動。福井県立大学名誉教授、一般社団法人日中科学技術文化センター顧問。著書に『中国の前途』（サイマル出版会）『中国の経済改革と将来像』（日本評論社）『21世紀の日中関係の在り方』など多数ある）

# 法政大学経済学部同窓会建立 「平和祈念碑」

どう守り、どう伝えるか  
学徒出陣を体験した世代が 後輩に残すメッセージ

加藤 毅

## 法政大学多摩キャンパスに建つモニュメント

東京の町田市と八王子市が接する丘陵地帯の一角に、法政大学の広大なキャンパスがある。現在四つの学部、図書館、ホール、各種のグラウンドや体育館などを備えるが、緑深い樹々に覆われていて、市街地にあって校舎群が密集する市ヶ谷キャンパスとは全く趣きの異なる“多摩キャンパス”である。

このキャンパスの一隅、経済学部棟群の一角にいささか異型の石造りの大きなモニュメントが建っている。本体部分は三つの巨石が、一見不安定に見える形で構成され、その一つに碑文が彫り込まれている。そして碑文のある石の前に、英語、ハンガール語、中国語の訳文が焼き付けられたステンレス板が埋め込まれた訳文碑が据え置かれている。

これが“平和祈念碑”と呼ばれる、学徒出陣という史実を踏まえ、戦争の惨禍を記憶し、再び学園が戦争に巻き込まれないように努めて欲しいという、先輩から後輩へのメッセージを込めたモニュメントであり、1996年、経済学部同窓会が大学内外に呼び掛けて建立したものである。

## 建立活動は 1995 年に始まった

法政大学経済学部同窓会は、1992年に創設された。創設に参加した卒業生の中には、自身戦地に赴き、復員の後復学をした人も多く、その自分たちの体験に基づく反戦の想いを、何らかの形で後輩たちに伝えたいと考えている卒業生もまた多かった。そういう体験を持った人々が、同窓会の最高年齢層をなす年回りであったとも言えよう。

同窓会が創設されるや、さまざまな活動や事業が提案され、卒業生相互の親睦や交流をはかるための活動のみならず、現役学生の就職活動支援、ゼミ活動支援なども実行に移されていったが、自分たちが体験した学園生活を吹き飛ばした悲惨な戦争体験や、戦場で命を失った先輩や同輩たちへの鎮魂の想いを、是非とも後輩たちに伝えることを実現したいという熱意も盛り上がっていったのである。

時あたかも終戦50年を迎えるときにあって、是非ともその想いを形にして残したいという機運が熟し、「平和祈念碑」を同窓会の手で建立したいということになった。

その建立活動の中心にあったのが、根上淳こと森不二雄さんであった。著名な映画俳優として知られる森さんは、同窓会活動の全てに関り熱心に活動した

が、特攻隊員の生き残りであるという思い、ことに特攻作戦で死んでいった仲間たちへの悼みの気持ちを持ち続け、同窓会活動を通じて後輩たちにメッセージを残したいと唱え続けていた。

### どんな「碑」を建てるか どの様にメッセージを残すのか

終戦 50 年という機会を失することなく、なんとしてでも実現を図りたいと言う熱意が周囲の同様な思いを結集させ、組織としての取組みを決定したのは、1995 年 9 月であった。担当する特別委員会を組織し、その委員長には森不二雄（根上淳）さんが就くことになったが、当時は若手の会員に過ぎなかった私も特別委員の末席に連なった。

それまでも、決定を見てからも、どのような形でそれを実現するかについての熱い議論は続けられた。結論的にメッセージを伝えるための「祈念碑」を立てることを決めたとはいえ、生まれたばかりで貧乏な同窓会が、どの様に資金を調達するのか、調達できるのかが最大の不安であり、従ってどんな祈念碑を造れるのか、造るべきなのか委員会のみならず、組織全体での議論と心配は尽きなかった。

一方では、「慰霊碑」や「忠魂碑」を建てるべきではないという意見や、自然石に文字を掘るだけではだめだ、造形そのものにメッセージ性がなければ大学の構内に建立する意味が薄くなる、造形はプロにまかせるべきだという意見も有った。

資金については、同窓会内部のみならず、学部を越えた卒業生、教員・職員はもちろん、大学の外にも呼びかけをして集めよう、そのこと自体が「平和祈念碑」建立の意義に叶うということと、行動美術協会の著名な画家である会員の星野和雄さんの強い意見と俳優根上淳の感性の共鳴が一つの方向性を示すことになり、造形は当時行動美術協会に所属されていた彫刻家の斎藤徹さん、碑文として刻む文字は書道家の青柳志郎さんをお願いすることを決め、碑文そのものは森（根上）さんが原案を作りその後特別委員会で議論して決めることになった。

当時の森（根上）先輩の活躍ぶりは凄かった。何よりも資金をどう集めるかに集中するしかなかったが、俳優としての自分の名前を利用することも厭わず、マスコミに向けてもアピールし、朝日、毎日、読売、東京など全国紙にも取り上げて頂いたが、碑文の作案、彫刻家である斎藤先生の案内で碑石の原石を現地に見に行くことなど、仕事をする暇がないほどに奮闘した。何しろ募金を続け乍ら、制作をして頂いていたので、果たしてお金が集まるであろうかという不安で、夜も眠れなかったという除幕式後の述懐は全くその通りであった。

幸いなことに募金に応じて下さる方々の輪が、日を追って予想を超えて広がり、根上淳氏夫人であるペギー葉山さんとのご縁で、ご夫君が海兵第 14 期生であったという石井好子さんからも募金をして頂くなど、大きな金額が集まった。

## メッセージとしての碑文と訳文碑の附設

森さんは、碑文の原案を早々に作成したが、それを最終案にするまでの議論が重ねられたことは先に述べた。最終的に決まったものは以下の文言である。

多くの学生が 業半ばにして  
軍や工場に動員され  
学園と学問を放棄せざるを得ない不幸な時代があった。  
五〇年前のことである。  
君たちは決してそんな青春を送ってはならない。

1995年 5月

### 法政大学経済学部同道会

碑文の詰めを議論している段階では、募金が予想を超えて寄せられ始めていたので、建立計画の当初からそれを是非やりたいと考えていた、英語、中国語、ハングル語の訳文碑を附設することに踏み切った。  
訳文は、留学生の諸君にもこのメッセージを伝えたいということであったが、翻訳はそれぞれを母国語にする留学生に依頼した。

## 除幕式の挙行と大学への碑の寄贈

1996年3月4日、建立工事をとにかく急いだのだが95年内に完成させることは難しく、3月までは大学の年度内の「終戦50周年」だといささか強引な解釈をして除幕式を盛大に行った。その日は曇天ではあったが、予想を超えて多くの方が参加して下さり、モーツアルトの「レクイエム」の流れるなか、下森定総長、村串仁三郎経済学部長、神阪昴哉同窓会長の手で除幕し、白鳩数十羽を放鳥した。

作家は口にはしなかったが、「平和祈念碑」は、巨石の組み合わせでなっているが、一見不安定にも見える。平和とは不安定なもので、いつ崩れてしまうか分からない。それを守ることは心してかからねばならないものだ、という理解が語られた。そして一見不安定に見える巨石の積み上げは、見えないところに直径2センチ以上のステンレス製の丸棒が何本も差し込まれ、地震で倒壊することは無いと言う。この埋め込まれたステンレスの丸棒こそ、平和を支えるための蔭の力であるとも。

同窓会員はじめ経済学部教員、大学関係者、協賛して下さった多くの方が見守る中での除幕であったが、全員が想像以上に大きく、一見不安定にも見える異型の祈念碑に感激し、学徒出陣が強行された往時をしのんだ。特に出征体験を持つ高齢の同窓生の想いは万感籠るものであったと思われた。私もその中にいて、これで目的は達成されたと興奮していたが、実は達成ではなく始まりであったのだと思い知るのは、恥ずかしいことではあるが後日である。

除幕式は野外であったが、その後校舎内に場所を移して「平和祈念碑」の大学への贈呈式を行った。下森総長からは、阿利莫二、青木宗也、二代の総長が「学徒出陣」に対する深い想いと、例えば卒業証書を受けとれなかった卒業生やその遺族に、後年卒業証書を授与されるなど特別な対応をされながらも、大学として組織的な調査すら行えていないなど、十分な取り組みをなし得なかったことを慙愧に思うメッセージを強く残しておられるという状況を踏まえ、大学卒業生の取り組みによっていささかでもそれを埋めることが叶ったと、先輩総長の想いとそれぞれの取り組みを踏まえつつ感謝の言葉を述べて下さり、祈念碑を大学のもので受け止めて頂くことがなった。募金の残余金をもとに、募金をしてくださった方々のお名前をステンレス板に刻み、別の石に埋め込んで傍らに建てたが、その余の残金は、祈念碑の当面の管理費として大学に受け取って頂いた。

### メッセージは学生たちに伝わっているか

7年後の2002年、平和祈念碑建立7周年を記念し、「平和の集い」を多摩キャンパスで行った。雨風にさらされている祈念碑を清掃し、刻まれた文字の色を入れなおした。この時点でも学生のこの平和祈念碑や「学徒出陣」への関心が高くないことは懸念されるものではあったが、現役教授である奈良本英佑先生に記念講演をして頂くことで、学生への発信を行ったつもりでもあった。

法政大学では、大学の経て来た歴史を学生に学ばせるべく、2011年度から自校教育科目「法政学への招待」を開講したところ、戦時下の状況、とくに学徒出陣に関して、教えるに足るだけの事実が判明していないことが痛感された。そこで大学史に関する調査・研究を任務とする「大学史委員会」では、このテーマに正面から取り組むこととし、2012年度から六年間の期間を設定して「『法政大学と出陣学徒』事業」と銘打つ調査研究を行った。本誌『星火方正』27号に寄稿された高柳俊男国際文化学部教授も副委員長として参加されているプロジェクトであるが、この大学史委員会が主体となり、この事業の中で大学主催の公開シンポジウム「学び舎から戦場へ」を、学徒出陣70周年を記念して2013年12月16日に開催した。この時高柳教授から経済学部同窓会にお声がかかり、経済学部同窓会が建立した「平和祈念碑」についてレポートを行う機会が与えられた。レポートは「平和祈念碑」建立の経緯を報告するものとなったが、学徒出陣70周年、祈念碑建立からも17年が経過している中で、さすがに「先輩が後輩に伝えたいメッセージ」を体現しているこのモニュメントが、現在の学生にどの様に受け止められているか、メッセージは伝わっているかを考えざるを得なかった。

建立した私たちは、平和祈念碑の碑文のみならず、モニュメントとしての姿かたちには少なからず誇りを持ち、折に触れてその場所を訪れたけれども、キャンパス内に新しい橋が架かり学生の学内での流れが変わったこともあって、学生たちの平和祈念碑に関する関心は年を追って薄れて行き、碑文の意味はお

るか、平和祈念碑の存在までもが関心の外に追いやられてしまうことになった。メッセージが伝わるのがどんどん希薄になっていったのである。シンポジウムのレポートを担当した私は、「先輩たちが残したメッセージは、学生たちに果たして伝わっているだろうか」と締めくくったけれども、残念ながら「メッセージが伝わっているとは言い難い」と言うことを改めて認識せざるを得ない機会となった。また、市ヶ谷キャンパスや、小金井キャンパスを卒業した卒業生の大半が平和祈念碑を目にする機会を持たず、存在すら知られていない状況にあることも思い知るようになった。

### 引き継ぐものとしての「責任」—— 建立 20 周年記念事業を行って

このシンポジウムを機会として、平和祈念碑の伝えたいものを、間違いなく伝え残してゆく為には、それを引き継ぐ立場にある同窓会自身が常にそのことを意識し、学生諸君が碑の前に足を運び、碑文の伝えることを心に刻んで貰うための不断の努力を、機会を捉えつつ継続せねばならないと悟らされたのである。

シンポジウムから二年後の 2015 年は、平和祈念碑建立 20 周年に当たると共に、学徒出陣から 72 年、終戦から 70 年に当り、かつ政情、世情に戦争を意識させる状況があった。同窓会はこれを単なる周年行事と捉えるのではなく、「平和祈念碑」の伝えるものを噛みしめ、若い世代、高齢世代共に戦争を考える機会としたいと考えて実行委員会を構成し、また大学史委員会の協力も得て、7 月と 11 月の二回、碑前の集会や講演会、出征体験を持つ先輩の生の体験を聴く会、学徒出陣関係資料展などを企画、実施し、風雨にさらされてきた平和祈念碑のクリーニングも実施した。詳細は同窓会が作成、刊行した「法政大学経済学部同窓会平和祈念碑建立 20 周年記念誌『平和祈念碑建立運動とは何であったのか』—平和への願い・反戦への誓い」に詳述されているので、ご参照頂ければ幸いであるが、これまで不十分であった継承者としての務めの、あまり大きなものではないが第一歩を踏み出した。

大学史委員会は、2018 年に、「法政大学と出陣学徒」事業報告書として「学徒出陣証言集」（第一・第二分冊）という膨大なヒアリング調査報告書を刊行し、詳細調査の一端を明らかにして大学の長年の悲願の一部を達成した。（本誌 27 号にも紹介記事）

また私たち同窓会は 20 周年記念行事を進める中で、現役学生に平和祈念碑への理解を深めてもらうためには、何かを積み増さねばならないことを改めて痛感した。たとえ祈念碑を訪れても碑文の本意を理解して貰うことも難しくなっている。いろいろと議論を重ねる中で、碑石の近くに「解説・案内板」を設置することを決め、2017 年に大学の承認を得て、ステンレス板に「学徒出陣」を解説する文章と、往時に法政大学で挙行した「学徒出陣壮行会」の写真を焼き付けた解説スタンドを、祈念碑の傍らに設置した。

「満蒙開拓」に関する「加虐と被虐」両面についての、想像を超える長期に亘る、そのうえ様々な困難な環境・状況を掻い潜っての追跡、調査、記録、救援、慰霊、研究のさまざまな積み重ねには、只々驚異を感じざるを得ない。絶えることのない関係者の熱いご努力とご苦勞には心から敬服するばかりである。「満蒙開拓平和記念館」はその象徴的な存在であろうし、本誌の存在もまた然りであろう。

私たち同窓会もそのことにもっと学び、取組みはその万分の一であっても“継続”を旨として平和祈念碑を守り、先輩たちのメッセージを伝えてゆかなければならないと考える。

## 参考資料

- ・法政大学経済学部同窓会創立 20 周年記念誌  
「法政大学経済学部同窓会 20 年のあゆみ 新たなスタートに向けて」  
2011 年 11 月 法政大学経済学部同窓会刊
- ・法政大学経済学部同窓会平和祈念碑建立 20 周年記念誌  
『『学徒出陣』を回顧する—『平和祈念碑建立運動とは何であったのか』  
— 平和への願い・反戦の誓い』  
2015 年 7 月 法政大学経済学部同窓会刊
- ・「学徒出陣証言集（「法政大学と出陣学徒」事業報告書下）」  
第一分冊・第二分冊 （法政大学史委員会編集）  
2018 年 3 月 法政大学刊



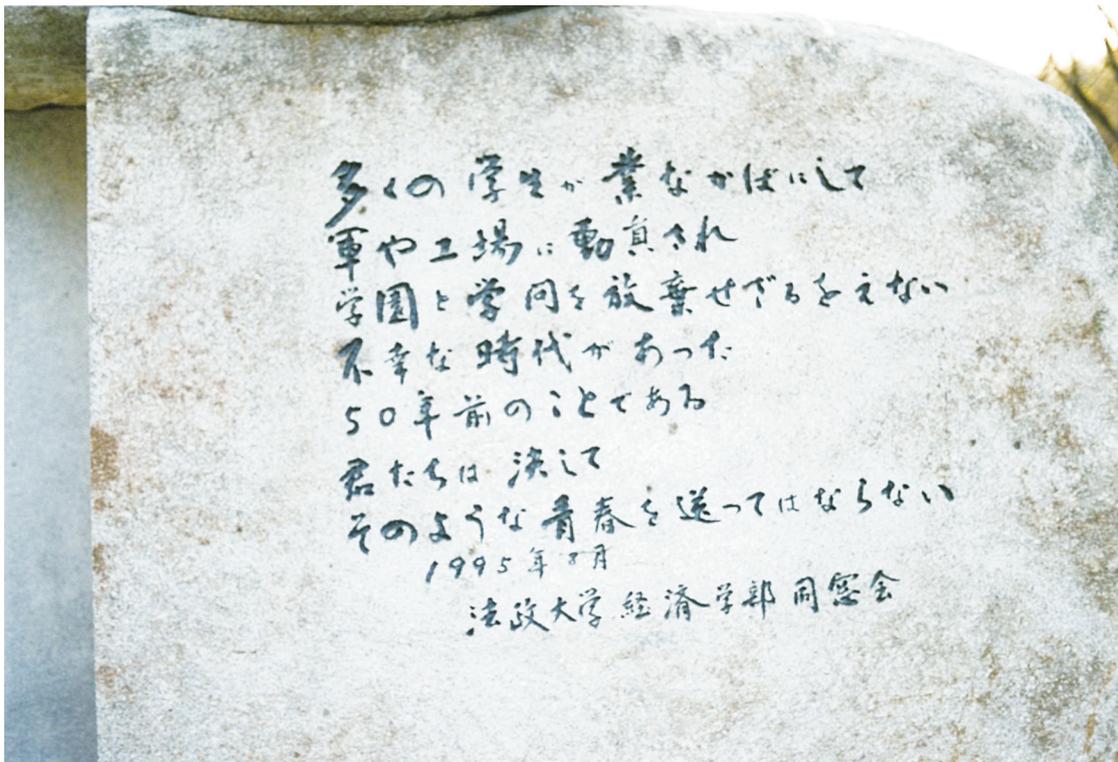
市ヶ谷キャンパスでの学徒出陣壮行会



祈念碑建立に奮闘した根上淳



平和祈念碑全景



碑文

(かとう・たけし：1937年東京本郷生まれ。45年、長野県下伊那郡竜丘村（現飯田市）に疎開。法政大学経済学部卒後、医療機器・福祉介護機器の開発製造、輸入販売業務に携わり、現在、法政大学経済学部同窓会会長代行。一社法政大学校友会理事)

大類善啓様

記憶を記録に

～哈爾濱の思い出～

ご縁あって方正友好交流の会に入会させて頂くことになりました。

私は9歳の時、胡蘆島から米軍のLSTで佐世保へ上陸した引き揚げ者です。胡蘆島では帰国船を待つ間、収容所周辺を遊び回っていましたが、「あつ、へびだ！」と恐怖の叫び声を発した一瞬、大人達がやってきてへびを捕獲するやいなや、皮を頭から下へ剥がし焼いたのです。「ぼんも食べ！」と見つけたお礼にもらい美味しく食べたのです。後にも先にもへびを食べたのはこの一度だけで白い身だったのが印象的です。LSTは戦車を運ぶ軍用船で、私たちは戦車代わりに船倉に詰められ船のエンジン音が響いていました。しかし、船上の甲板では子どもの相撲大会が催されるなど退屈しのぎの余興もあり船内を歩き回っていました。そんな中、母国への上陸を目前にしながら船中で死去された方の遺体を海中に沈め船は汽笛を鳴らしながら回旋する船葬の悲しい出来事もありました。

私は思い出の地、胡蘆島についてNHKのTVでドラマ化された「どこにもない国」に感動し、その種本ともなっている『満州奇跡の脱出』を購入し我が歩みをなぞっていました。ところが、「星火方正」(会報27号)をいただき愛蔵書の『満州奇跡の脱出』には真実でないところが多くあることを知り『大地の子』(NHKのTVドラマ)を我がことのように思っていただけにショックでした。そして、方正に関わる哈爾濱でのことを思い出しています。

2010年8月3日から5日間、大津市教職員9条の会が「中国平和の旅」と称して哈爾濱、瀋陽を訪れたのです。731部隊の悪事については『悪魔の飽食』(森村誠一)で一応頭には入っていましたが「731部隊罪証陳列館」の地下室では人体実験の犠牲になられた3000余の方の名前が壁面に刻んであり合掌なくしてその前を通ることは出来ませんでした。そして、この旅の主目的である中国の養父母、残留孤児との懇談会が実現しました。私たち15人は3つのテーブルに分かれ在華孤児や養父母と親しく語り合い学びの昼食を取ることが出来ました。

日本人孤児の揚治國さん、哈爾濱市紅十字会長胡曉慧さん、中国人養母の李淑蘭さん等とお出合いしたのです。その時、中国の人たちにも持参した楽譜を配り全員で『東京ー北京』を歌ったことなど楽しい思い出ばかりです。憲法第9条を守る日本の教師が哈爾濱を訪れているということで団長である私は記者の取材を受けたりしました。私たち一行の帰国後、哈爾濱市日本残留孤児養父母会事務局長の石金楷さんから丁寧なお手紙をいただくことになりそれ以来、親しくお付き合いさせてもらっています。未だ直接お出合いしていない石さんですが私が元気な間に是非お出合いしたいと願っています。

<余話> 哈爾濱は皮革製品の優れた町としても有名で素晴らしいショルダーバッグが目にとまり購入しました。通訳が「カワイイヨ」としきりに言うので当たりをキョロキョロしましたがどこにも「可愛い」子は見当たりません。しばらくして私の求めたバッグは「皮良い」というお買い得商品だということが分かりました。自

慢のバッグは、その時から書類入れに使用しました。

待望の養父母連絡会の方々との昼食会に臨み会場の飯店に到着したのですが、私は、哈爾濱の皆さんへのプレゼントとして用意したお土産を忘れていることに気がつき急遽タクシーで宿泊先へもどるのですがその車の中で、せっかく買ったバショルダーバッグを飯店入り口の石段に置き忘れていたことに気がきました。あゝ、もうだめだという気持ちをなんとかなだめ、パスポートと財布があるのは不幸中の幸いだと中半あきらめて飯店に戻ってきました。早速、受付カウンターで事の一部始終を話すと「ああ、これですね、届いています」というのです。哈爾濱市民の親切と道徳性にただただ感謝あるのみで初対面の養父母の方々への挨拶にあたり私はこのエピソードをお話しせずにはおれませんでした。

その後、私たちの旅は平頂山殉難遺骨館、「撫順戦犯管理所」等を訪れるのですが、欲張りの私の本心は同じ黒竜江省でも哈爾濱ではなく、ロシアとの国境の町「黒河」の奥地にある「のんじゃん」という町です。哈爾濱のように美しい町でなく何処にでもある田舎町ですが、その地は、そこで生まれ共に捕虜生活を送りながら帰国できず死んでいった妹と弟の生きていた地だからです。父はシベリヤへ抑留され、母に連れられ長男の私と二男の3人は幸いにも胡蘆島経由で佐世保へ上陸することが出来たのです。もし、母が中国人養父母に妹や弟の養育を託していたら別の人生があったかも分かりませんが母は死ぬまで我が子を手放しませんでした。妹、弟の死に私も立ち会い葬儀をしましたが涙を流す者はありませんでした。

子や孫のためだけでなく方正友好交流会の皆様にもこのような帰還者がいるのだということを知って貰えればと我が記憶の蘇らせを試みました。

2019/03/07

長尾 寿

(ながお・ひさし：1937年8月生まれ。現在、滋賀県大津市在住)

# 生きるために闘ってきた人生

中島 茂

## 渡満時の状況（事情）

泰阜村左京 6歳の時父は三信鉄道の線路工夫でしたが、大勢の家族を抱えて生活が近難だった。住んでいた家も同じ部落で母の実家の兄さんから借りていたもの。その叔父さんも満州に行くことになっていて、誘われるように一緒に渡満したのです。

敦賀港から朝鮮の新津に着き（確かでないかも）、そこから汽車に乗って満州の華川県大八浪開拓団に入植しました。9月頃でしたがトラックの荷物の上に載って家のある部落に着きましたが、もう寒かったと思います。

翌年の4月に開拓団本部の近くにあった小学校に入学し、家から遠い処だったので寄宿舎に入って学校に通いました。

## 戦前の状況

開拓団は、泰阜村分村満州大八浪開拓団と称していました。移住当時の人口は、1390人、11の集落（区）団の本部・学校と寄宿舎は8区にありました。

学校と寄宿舎の生活ですが、私は体も小さく弱虫だったので、三年生まで女子の部屋で姉たちと暮らしたのです。学年の生徒数は約30人ぐらいでした。（全校生は150人位でした）

冬はとても寒くて外で遊ぶようなことはできなかったが、近くの山（丘のようなもの）でそり遊びもした。他の者はスケートもしたようです。（道が凍っていてスケートができた）雪で道は自由にできて真っすぐにすることもあった。（寒い時で零下30度以上になることも）

夏は休みになると、大きな川の（牡丹江）支流で泳いだりしたが、私は2回も溺れて怖くなりとうとう泳ぎができないまま今に至っています。

入植（学）して3年ごろから戦争ごっこが始まり、寄宿舎では上級生が下級生にたいして兵隊の真似をして、殴る蹴るの乱暴を働くようになった。

## 逃避行のはじまりと状況

昭和20年8月9日団員の病人を除く男18歳～45歳が全員召集されました。（根こそぎ動員）開拓団には、団の幹部一部と女・年寄・子供が残っただけでした。

翌日（8/10）危険だから本部近くに集まれとの命令が出て、近くの親戚等の家に集まって次の命令を待っていると、今度は鉄道の駅に集合せよということになり、駅周辺の部落に詰め込んで汽車に乗るなどの相談を大人はしていた。

ところが、二日ほど待って汽車は来ましたが、「汽車に乗ると飛行機に打たれる」「これが最後に通る汽車だから乗ろう」等々の意見が出てまとまらず（ここにはほかの団員もいたのではないかと）結局汽車を見送り山道を隠れて逃げる「逃避行」となったのです。

集団で逃げ始めた時は、牛馬に荷物を載せた車で出かけたのですが、三日目頃には道は狭くなり、橋が壊されている状態で車と大きな荷物はみんな捨てて、子供を含めて人が持

てるだけの荷物にして、現地人に見つからないように、脇道や道でないところを歩きました。道中に日本人が住んでいたような跡には、激しく荒らされた跡があって、とても子供ながら怖かった。

もう幾日も歩くと腹が減ったのに気づき、ある日の夕方幾人かで現地人の家に入ってご飯をもらって食べたこともあった。多分その家はおとなしい良い人だったのでしょう。落ち着いてご飯を食べられたのはそこだけだったと思います。

そして、ある日昼間少し大きな街に出たとき、飯やご馳走を出してくれて食べていたら、「早くここを出て行け」と言われて部落を出ると、待ち伏せしていたように周囲から一斉に銃弾が発せられ、多くの団員が殺されました。いつも歩くときは、なるべく親戚や知り合い同士が一緒なのに、この時はもうそんなことはかまえず、自分自身が逃げるのに精いっぱいの大混乱となりました。

この悲惨な状態が収まったのは、日が暮れる頃になっていました。少し落ち着くと暗闇の中を親戚・兄弟を探す人の呼び声が深夜に及び、翌朝になってやっと残った者たちだけで逃避行が続けられた時、いきなり日本軍が現れ、「ジャムス」で残物整理してどこかへ逃げる途中とのことでした。その後はこの兵隊さんたちが道案内をしてくれて、危険な面はなかったが、歩くに困難な険しい森林地帯とか大きな川を渡るなどをしました。（この中で又多くの犠牲者は出ました。）ソ連につかまる数日前、日本兵が打たれて残骸があちこちに散乱している光景も見ました。

この間、何を食べたかも思い出せないほど、食べ物は口にしていません。ある時とうもろこし（キビ）畑を通りかかり休憩したとき、まだキビが実らず袋が出来たころですが、それを我先にとかじって食べたことがあります。水も川を通るようなときは飲めたが、ほとんど飲んだ覚えがない。ある日先日降った雨のあと、車の轍（わだち）にたまっていた泥水を、幾人かで争って飲んだこともあります。

9月3日の朝、方正県のある中国人の部落で逃避行者全員が収容されました。ここではじめて8月15日に日本が負けて戦争が終わっていたことを知りました。先導していた兵隊たちは、更に逃げ回って行きました。

## 収容所の状況

ソ連兵の監視の下一夜を「方正県」の県庁の在る街の大きな土塀の堀の際で野宿しまして、翌日7キロ離れた旧日本人の開拓団部落に、その他の開拓団の人たちと確かな数字はわかりませんが、約5、000人はいたとのことでした。

収容された元開拓団跡は、学校が一つと一つの塀に囲まれた集落ですから、とても何千人が一時的にも住めるわけがありません。でも何か月もその狭いところで過ごしたのです。

はじめのうちは、附近にあった野菜をとって食べたり、僅かな配給（高粱）がありましたが、その後は一切ありません。丈夫な者や賢い人たちは、附近の小高い山（砲台山）に関東軍の物資補給基地があって、いろんな残物（缶詰・乾パン・衣類・鉄兜など）を毎日のように探し求めてきて、鉄兜を鍋にして煮物をつくって食べていました。

やがて11月頃になると、中国（満州）の寒い冬がやってきて、いやでも部屋では座ったままで体を寄り添い、家族ごとに抱き合って暖をとっていました。

ところが以前からソ連兵の「女狩り・略奪」が行われ、女性はみんな頭を丸坊主にした

り顔を炭などで黒くして難を逃れていました。(話によると誰かが犠牲になって慰安婦になっていたとのことです) ソ連兵とは、ソ連がドイツと戦ったとき、監獄にいた「囚人」を戦地に送り、その勝った勢いで旧満州開拓団に襲い掛かった来たことです。

そして何よりも恐ろしいのは、シラミが湧きわからない病が充満し、年寄りや子供が毎日死んでいきました。(妹もこの時亡くなった3才)

12月の厳寒の冬になり、食べ物は無い・寒さは厳しくなり(夏に逃げ出したままの衣服)・死を待つだけの状態でした。

そこへ現地の中国人が、女性を自分や兄弟の嫁さんにと毎日のように誘いがありました。はじめは皆かたくなに拒んでいましたが、生きるためにはと思うようになり、これも選択の一つであると誰となく考え、その道に誘われ結果的に命拾いをしたのであります。(私の姉たちも家族のために犠牲となったのです)

(収容所になった方正地域の中国人は、男性が圧倒的に多く女性が少ないので、五体満足の男性でも一生独身は珍しくない)

そのために、中には夫婦でありながら、兄弟だと言っていつわり、言葉に表せない苦しい思いをした人たちもいます。

ほんの一部の人たちが、旧の開拓団に戻って何年か暮らしたり、冬を越えて日本に帰る人たちも当然でしたが、それは並大抵の苦労ではなかったと聞いています。

(中国人に使われながら働いて、お金を手にして生活しながら長い道中を経て、やっと船に乗れたとのことです。そして道中病気になったり歩けないようになって亡くなる人も多かったと聞いています。)

泰阜の団長は、収容所まで一緒に来たが、ソ連兵によってシベリヤ送りされる途中で逃げる事が出来て開拓団に戻ったが、間もなく現地中国人の手によって処刑されたそうです。

## 中国人の家に入ってから生活

「隋」という姓の家に引き取られたのですが、(2番目の姉当時18歳になっていたのかな?)なんとその家には10人ぐらいの家族が一つの屋根の下で暮らしていたのです。そこへ5人が加わっての人数だったので、翌年母が私と弟を連れて、近くに住む一人で豆腐屋をしていた人の処へ再婚して移りました。

少し暮らしていて、日本へ帰る動きがあったので、帰ろうかなと思ったところ、二人の姉をどこかへ隠されてしまい、みんなと一緒に還ることが出来なかったのです。

そのうちに、朝鮮戦争が始まり身動きできなくなって、とうとう8年近く中国人のようにして中国で生活していたのです。(すでに日本語は忘れ専ら中国語で暮らしていました)

中国人の家庭で寒い冬を越して少し落ち着いてみると、もう半年前のできごとを忘れ目の前のことだけに夢中になっていました。

はじめは、日本人を「鬼子」だ、その子供は「小鬼子」だと言っていじめられました。ひどい時は、一歩外へ出れば石などをぶってつけられ、棒で叩かれることもあった。早く新しい言葉を覚えその日をどう暮らすのかしか考えられなかったのです。

だから短い間に日本語は忘れ、専ら中国語でまわりの中国人の子どもと遊べるようにな

っていきました。しかし遊んでばかりではなく、夏は「豚追い」という誰でも嫌がる汚くて危ない仕事をしました。

悲しい出来事がありました、それは家族を救ってくれた大事な2番目の姉が、二人目のお産で命を亡くしたのです。

私は15歳のころ現地の風土病「カシンベック」病にかかり、生死をさまよって目が覚めると全身の関節が膨らみ変形し強い痛みをとまなう身体になってしまいました。

困っていたら、方正の街にある病院で薬剤師として働いて居た浜松出身の日本人と出逢い、その方の紹介で中国人の小学校で2年間勉強することができました。その後養父が同じ病気で働くことができなくなったので学校を中退し、近所の知り合いの人の経営する印刷所へ就職し帰国するまでそこで働きました。

僅か2年間働いただけでしたが、この間に住んでいた家を買取り、暮らしに困らないで生活ができていたので、一時はもう日本へ帰らなくてもいいかなと思う時もありました。

昭和28年になって、日本人は祖国に帰りなさい。という中国政府の指示があつて帰ろうとしたが、2番目の姉はすでに病死していて、4番目の姉が2番目の夫の弟と結婚させられて、2番目の姉の子どもと自分の子供がいたので、結局姉たちを置いて母は男の子二人だけ連れて帰ってきたのです。(残された姉は残留婦人となって40年間やっと昭和60年に日本に永住帰国しその後7人の子供を日本に引き取りました)

私たちの「第4次帰国者」の一行は、途中で日本からの帰国船が何らかの事情で来なくなり、その間中国政府は大変なもてなしで、歓待してくれました。(戦後中国の復興に貢献されたお礼とのこと) (1953年「昭和28」7月14日)

## 帰国してからの生活

帰国船「興安丸」で舞鶴港下船したのですが、引揚者に対する援護費をめぐってトラブルになり、2～3日滞在し一応の解決が(今次のみ4万円でしたが、大人1人1万円で妥結)、あつてそれぞれ落ち着く先へ向かいました。(私は父のいる泰阜村左京の家に)

村から学校へ入学を勧められたが、弟だけ小学校6年～中学卒業まで年の差があつたが義務教育を終えることが出来ました。

私は3人も家族が増えたので、働くことを考え、翌年の9月泰阜北農協へ組合長の理解があつて就職しました。(トラックの助手)

運転免許証までとらしてもらつて約4年勤めましたが、「満州」で病んだ病気(カシンベック病)が悪化し、飯田の街に住んでいて戦前タクシー運転手だった伯父の紹介で、タクシーの会社に再就職して定年まで働きました。

私は母親と一緒にいたのが苦労は少なかったが、親のいない子供や女性は本当に言葉に表せない悲しい思いをしたと思います。

私は、大好きだった学校生活も経験できず、すべてが見よう見まねで生活に必要な勉強を通じて、周りの人たちに助けられながら生きてこられたと思っています。

何れにしても、一旦戦争になれば、国民には自由に意思決定することができなくて、時の政治・行政の権限を持っている人たちの言いなりにされてしまうということです。

終戦を迎えて思ったことは、て半年前頃から関東軍の家族が内地へ帰る動きがあり、関

東軍は、ソ連の侵攻があると「南方に移動」と称して、開拓民を置き去りにしたのです。軍と共に乗り物に乗ろうとすると、開拓民を足で蹴っ飛ばして追い払われたそうです。また道路の橋も、軍は開拓民が後をついてこれないように壊したそうです。

尚政府は無条件降伏をしたのですが、せめて邦人を安全に帰国させること位を、条件にするべきだったと強く感じます。(しかし日本政府は開拓移民を「棄民政策」として位置づけていたのです。)

先の戦争や今世界のあちこちで行っている戦争をみても解るように、その犠牲者は必ず何の罪のない一般の市民でしょ。殊に満蒙開拓の移民政策は、日本本土の人口減らしと「満州」で侵略戦争をしている『関東軍』を守るためだったことが、今では明らかになっていますが全くの棄民政策だったのであります。

どうかもう二度と私たちのような、戦争犠牲者を出さない為にも、今日本の権力者たちは、夢よもう一度と言わんばかりに平和憲法を変えて「戦争のできる国」にしようと考えていますから、皆様のご理解とご協力によって戦後の平和な国を守るために心よりお願いしたく存じます。

私の姉が戦後40年に帰国したのですが、飯田の法務局は親兄弟同席の処で「あなたは中国人だから帰化して日本人になりなさい」と言われたのです。肉親もいて役場の諸資料(戸籍謄本等)がるにもかかわらず、仕方な帰化の手続きをしました。

◆私たちのような戦争犠牲者を二度と出さない為にも特に次の世代を担う人たちに戦争を憎み平和の大切さを、肝に銘じていただきたく強く要望するものです。

私は生きている間「語り部」の活動を続け、もっと多くの方に真実を訴えます。

(なかじま・しげる：1934年下伊那郡泰阜村で生まれる。現在、長野県飯田市在住。命を育ててくれた方正県は第二の故郷、平和主義という人生観を教えてくれた所と思い、日中友好運動に携わる。今後も更に多様な活動を続けたいと、2018年、方正友好交流の会に入会した)

## ハルピン市と方正県との間に高速鉄道が開通！

石 金 諧

ハルピン市と方正県との距離は僅か180キロメートル。昔から両地の間には列車のレールが施設されずにきましたので、ハルピン市から方正へ行くには、高速道路入口への市内移動も含めると、3時間以上を要しました。

ところが、2018年9月30日に、ハルピン市と佳木斯市との間に、高速鉄道が正式に開通したのです。これにより、ハルピン市から方正県までは、僅か70分程度で行けるようになりました。

ハルピン市と佳木斯市との往復便数は、一日26便（朝5時から夕方5時まで）、停車駅はハルピン、寶西、寶州、方正、得莫利、依蘭、佳木斯（終点）など19カ所です。

方正駅の位置は、方正県の城西地より2.5キロメートル離れています。また。駅前からは、市役所などの市内の中心地へ遠距離移動ができるバス停が設けられています。

方正県は、風景秀麗、醇風名勝の観光地です。その県内の中心から28キロメートル離れた所には、日本の敗戦前後に亡くなられた大勢の日本人たちが葬られている方正日本人公墓、また、日本人残留孤児を育てた中国人養父母の墓がある「中日友好園林」があります。そこには毎年、国内や海外からも大勢の関係者が慰霊と観光に引き寄せられて来るようになっています。

この度の高速鉄道の開通により、方正行きは更に便利になりました。

《解説》石金諧さんは1957年生まれ。長年ハルピンに在住し、ハルピン市日本人残留孤児養父母連絡会の事務局長として活躍されている方であり、近年は東京の江戸川区に在住。本稿は飯沼利之さんが日本語に翻訳され、それを基に大類善啓が再構成したものである。

# 牡丹江、ハルビン 鎮魂・平和の旅

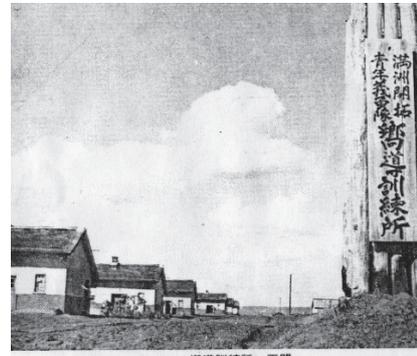
藤後 博巳

この随想は、神戸の友人が敗戦直後、旧満州で亡くされたお父さんを偲んで、ご親戚の方も含めて当地を旅する際の参考資料と、私の自己紹介の意味で中国での稀有な体験を知って頂けたらという思いがありました。

中国で加害と被害を同時に立たされた私としては、あの忌まわしい戦争の事実を、後代に語り継いでいかなければという自責の念に駆られて、友への手紙という形で記述しました。

## 満蒙開拓青少年義勇軍(満州開拓青年義勇隊)

1945年8月15日、私は日本の敗戦を旧「満州」(現在の中国東北地方・以下満州)のハルビン市内から、さほど遠くない新香坊地区に在った、日本人開拓団の幹部養成が目的で創立された満州開拓青年義勇隊嚮導訓練所で迎えました。私はまだあどけない16歳の少年でした。



満州開拓青年義勇隊嚮導訓練所

この満蒙開拓青少年義勇軍(義勇軍)は同世代を除いた殆どの人が初めて耳にする名称で知れ渡っていません。私の少年時代を知っていただくためにも、これについて触れさせていただきます。

1932年(昭和7年)当時の日本政府は、日本国の生命線としての位置づけのもとに、「満州国」をデッチ上げました。そして、満州開拓移民事業が日本の重要な国策と規定し、6年後の1938年、義勇軍(現地では日本軍と思われるので義勇隊に改称)が創設されました。

その対象は、尋常高等小学校高等科2年(現在の中学2年)を終了した数え年16歳の少年より募り、開拓事業に若さと力を注入するとともに日本陸軍満洲駐屯部隊—関東軍の予備軍的役割をも負担して北方のソ満国境の護りを固めようとの目論見が現実化したものです。これは農事・軍事訓練を受けながら、旧「満州」農地の開拓に当たらせるもので、一種の屯田兵といえます。その社会的な背景とその主旨は、義勇軍編成の建白書(原文のまま)によれば、「満15歳以上18歳の農家子弟大約70万を算す。これ等青少年の過度な都市集中が、あるいは多数の失業者群を発生し、あるいは国民体質の低下を誘い、あるいは各種社会問題、思想問題の因となる等、国家民族の将来に如何に大なる疾患をもたらすべきやは、われ等の憂慮に堪えざる所なり。近時軍需工場賑盛を極め、多数の青少年工を吸収しつつあるも、なお幾多の青



茨城県内原・義勇軍  
訓練所訓練所

少年は農村に待機しつつあるのみならず、就職年齢(満15歳)に達しては、離村すべきものに約20万を算す。ここに義勇軍編成の事を掲げて、希望に満ちたる生活の門戸を開き、最も有意義なる銃後報国の方途を策すにおいては、全国の子弟は翕然(きゅうぜん・集まり合う様子)これに応じて起ち、父兄亦、欣然これを賛するを疑わず。(後略)」

以上の短い文章で、その大体の意図を汲み取られたと思いますが、詳細についてはまたの機会に譲りたいと思います。ちなみに、今回訪れる牡丹江地域は義勇隊訓練所、義勇隊開拓団、一般開拓団が最も密集したところであり、多くの犠牲者を出し、多くの中国孤児を生み出しています。

私がいた前出の新香坊というところは、私にとっては運命を大きく変えた、決して忘れられないところでもあり郷愁の地でもあります。また、ここは貴方のご家族が住んでおられた元ハルビン市の鉄嶺地区から、そう遠くないところでもあります。偶然にも敗戦時に、お互いが近くに居たこととなります。

### 1945年8月15日

日本の敗戦は私が満州へ渡ってわずか1年半後のことでした。敗戦前後のハルビンで貴方のご家族も体験されたのではと思いますが、敗戦直前の8月9日にハルビン市内が初めてソ連軍による空襲がありました。これは私がソ連と戦闘状態に入ったことを知った瞬間でもありました。その翌日、私たちの訓練所の近くにあった日本陸軍満洲駐屯の関東軍倉庫がソ連軍の空襲を受け、炎上しているその光景を目にしたとき、戦争が身近に迫っていることを実感しました。「いよいよ来るべきものが来た」という緊張感と同時に一抹の不安感というか、悲壮感を抱いたことを今でもはっきりと覚えています。それは、一戦を交えて死に果てるという現実と直面したときでもありました。

その翌日の8月10日、私たち義勇隊訓練生は関東軍の命令で当時、日本人居住地区の道理地段街にあった関東軍の防衛司令部に動員されます。そこで初めて破竹の勢いでソ連軍が南下してくることを知り、慌てふためく司令部の将兵の姿を見て少年ながら、事態の深刻さと関東軍の敗北を予感しました。

そこには1日しかいませんでしたが、私たちの訓練所に帰ってから数日後の8月15日の昼、あの天皇裕仁の放送を聞くこととなります。雑音がひどく聞きとれ難くて私たちの間では、終戦宣言とソ連に対する宣戦布告の二つの受け取り方に分かれて紛糾しました。後者から近くの丘陵で決戦を唱える者が続出しましたが、この放送が終戦宣言だったと分かってこの騒動はけりが付き、ホットしたものです。というのも、もしも交戦していたら死んでいたかも知れないと思ったからです。

### ソ連軍の進駐

8月の末になって私たちの訓練所にソ連軍がやって来ました。本格的な進駐の始まりです。同時に彼らの略奪に遭うこととなりますが、初めて見る自動小銃を突きつけられて、大事にして



ハルビン進駐ハルビン進駐のソ連軍のソ連軍

いた腕時計や万年筆をもぎ取られたときほど敗戦の惨めさ、屈辱をこれほど感じたことはありませんでした。しかし一方ではその行為が勝利者の報いだとも思い、観念していたのも事実でした。

その後、日本軍が中国で行なった三光作戦（殺し尽くす、奪い尽くす、焼き尽くす）や、あの南京大虐殺という暴虐の限りを尽くしたことを知り、両者で共通していることは兵士たちの戦意高揚と戦争勝利のために、上官がその行為を黙認していたという軍規軽視がそうならしめたということもわかりました。後で聞いた話では、さすがのソ連軍上層部も中国からの抗議で、この行為を取り締まざるを得なかったようでした。

ソ連軍の進駐とほぼ同じくして私たちの訓練所が、奥地から引揚げてきた開拓団の人たちの難民収容所として供されることとなります。この人たちから、関東軍に見捨てられた開拓団の悲惨な末路と、農地を奪い取られた中国人の報復的な略奪、ソ連軍の暴虐無尽な振る舞い知ることになり、私が受けた略奪とは比べものにならないその行為の酷さを初めて知り、強い憤りを禁じ得ませんでした。



ハルビン市内の日本人浮浪

### 牡丹江捕虜収容所へ

ソ連軍に囚われて牡丹江へ敗戦直後の 9 月に入って、ハルビン市の多くの日本人男性がソ連軍によって訳の分からぬままに拘留される事件が起こります。当時はこれを「日本人狩」と言われ、大変恐れられていました。今流でいうならば拉致です。対象が大人と聞いていましたが、未成年の私たちもこの強制抑留（ソ連は捕虜という認識）事件に巻きこまれ、後述するハルビンから 200 ㎞も離れた牡丹江に連行されて、初めて酷い強制抑留を体験させられる破目におちいります。

貴方のお父さんとこの事件との関連はわかりませんが、もしかしたらこの事件に遭ったかも知れません。また、これとは関係なく本人が関東軍ハルビン特務機関のロシア語通訳だったので、別の形で牡丹江に連れて行かれたかも知れません。いずれにしても、お互いがごく身近なところで、しかも同じ時期、同じ環境のもとで、敗戦によってもたらされた混沌とした世相の中で翻弄されたことは確かなようです。

関東軍将兵のシベリア強制抑留についてですが、私たちが牡丹江に連行されたときに、初めて多く将兵たちが収容されていることを知りました。そして彼らも、私たちも、この地から日本に帰国するものと信じていました。しかし、結局、将兵たちは裏切られてシベリアでの強制抑留の災難に遭うことになります。



ソ連軍の捕虜になった関東軍自動車部

私がこの抑留事件について元同僚から資料を入

手し、その経緯の一部が解明できました。それによると敗戦後間もない9月8日、私の元訓練所を接收し、その管理責任者でもあったソ連軍のマスロフ少佐から「内地送還のために牡丹江に移動」の指令を受け、その日の午後5時発の列車で私たち130名が訓練所の近くの新香坊駅(ハルビン駅より牡丹江方面二つ目の駅)から、国境に近い横道河子駅に向けて移動させられたと記述されています。すでに、この時点でソ連政府は正式にこの抑留を決定していたことが、今では明らかになっています。

この抑留は、日本に帰すという口実で私達を騙して連行し、重労働に従事させるという、人道主義に反する重大な犯罪行為に他ありません。史料によればこの抑留が日本政府とスターリンとの密約のもとに行われました。まったく酷い話ではないでしょうか。

話を戻しますが、訓練所の教官が私達が学生という理由でソ連軍当局に対して釈放を懇願し、その甲斐あってハルビンの元訓練所に帰ることができることになり、幸いにもシベリア行きの災難に遭わずに済みました。そのころ、心身ともに憔悴していた私達が、もしも将兵たちとシベリアに連行されていたら、恐らく死んでいたでしょう。私にとってまさに生死を分けた運命の岐路だったともいえます。

初めにお話しましたように、今回企画しましたハルビンから牡丹江への列車の旅は、お父さんもおそらく乗られたであろうという思いもあってのことです。しかし、もしかしたら自動車か飛行機を利用されたかも知れません。私達や一般市民が下車させられた横道河子というところは、牡丹江からハルビン寄りの約50キロ手前に位置し、ここは元満州国鉄道の開拓科学研究所があったところです。目的は日本開拓民に詳細、確実な材料を提供するために、この地区の白系ロシア人と中国人住民の生産、生活状況の研究でした。また、この一帯は中国共産党が指導する抗日ゲリラ部隊の活動地域でもありました。中国、日本どちらにとっても重要地点だったようです。また、開戦時に日ソ両軍の戦闘が激しかったところでもあり、多くの戦傷者を出しています。ここに下車させられた理由は、目的地の牡丹江へのレールが破壊されていたからです。

もしかしたら、貴方のお父さんも私達と同じ経路を辿られていたかも知れません。私達は途中、牡丹江手前の梅林というところにあった元関東軍施設(火薬製造)に収容されますが、ここまで三日間を要して到着して、ここには2週間ほど逗留しています。

この連行途上で、私達はいまだかつて体験したことない過酷な行軍を強いられることになります。携帯食料が尽きてもソ連軍からは与えられず、畑から玉蜀黍など盗って餓えを凌ぎ、大雨に祟られながらの野宿をするなど辛酸を嘗めましたが、私達は若かったせいか犠牲者をださなかったことは不幸中の幸いでした。

この行軍の途中で私が一番ショックを受けたのは、思いがけない情景を目撃したことです。それは、生まれて初めて目にする開拓団が奥地からの逃避行の途中で餓死したのか、はたまた、足手まといとなって大人の手によって殺されたのかわかりませんが、3人が並べられた上に箆を被されて遺棄された、変わり果てた無垢な子供たちの哀れな姿でした。

このことはいまでも、私の脳裏に焼きついていて忘れることはできません。そして、私を

日中不再戦・友好運動の原点がここにあったと思います。今でもこの開拓団の言語に絶する悲惨な逃避行の中で、多くの人たちが犠牲になった著書を見るに連れ、私はこのことを思い出して遣瀨ない気持ちに駆られます。

ほかに目にしたのは、敗戦も知らされずにこの地で戦い続け、その挙句の果てに戦鬪で傷つき、最後の水を求めて川にたどり着いて息絶えたのであろうか、腐乱し変わり果てた将兵たちの無残な姿でした。このとき、あの無敵を誇った関東軍の終焉を恒間見る思いでした。

私はこれまで思っていなかった捕虜として、武装したソ連軍に拘束されたこの1ヶ月というものは、いつ殺されても不思議でないという恐怖感がつきまとい、私の人生の中で最も忘れられない悪夢のような出来事でもありました。そして、敗戦国民の悲哀を嫌というほど味合わされることとなります。

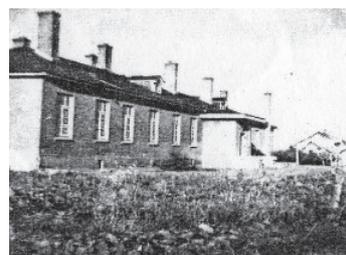
身内が一人もいない中国大陸で、これから先何があるかわからないという極限に立たされた少年の私には、大変な重荷でもあったことはいまでもありません。16歳の少年ですから無理からぬことです。いまでも自分ながら、よく耐えられたと不思議に思っています。

幸いにもこの強制連行途上、私たちからは一人も犠牲者を出さずに無事に牡丹江の捕虜収容所まで辿り着きます。記録によれば私たちや将兵たちは、関東軍牡丹江師団司令部跡に收容されて施設の撤去、爆破作業、線路工事、戦利品の貨物積み込みなどに従事させられたことになっていますが、私はこのときは病床に臥していましたのではっきりした記憶には残っていません。おそらく、一般の日本人もこの使役に狩り出された可能性があり、貴方のお父さんもそのうちの一人だったかも知れません。

この捕虜収容所では、元ハルビン訓練所に帰るまでの1ヶ月余りの間に、私たちの中からは犠牲者が出たという話は聞いてはいませんが、しかし、疲労と栄養失調による病人が続出し、私もその内の一人としてハルビンに帰るときは担架に世話になるという有様でした。帰国後、この収容所で数人の同僚が亡くなったことを知りました。

貴方のお話ではお父さんは牡丹江で病死されたということですが、恐らくその場所が将兵たちの捕虜収容所ではなく、市内の難民収容所か、市内の日本人居住地域かどちらかだと私は思います。その後の調べでわかったことですが、元満州電業の建物、元牡丹江中学校の前の建物が収容所として宛がわれ、入所者は奥地から逃避してきた開拓団の人たちなどでした。記録では、牡丹江市の日本人のほとんどが、日ソ開戦と同時にいち早くハルビン方面に避難していたそうです。今回の旅行メインの一つでもある「日本人墓地」については、その有無すらもつかめられていないのが実情です。

前述のように、ソ連軍から解放された私たちはハルビンの元訓練所に帰ってきたものの、そこは大難民収容所と化し、すでに私たちが残した食料は尽き、シラミの横行、発疹チフスが大発生という生き地獄に陥っており、凄惨な様相を呈していました。記録によれば、帰国するまでの約1年間で2千人ないし3千人の尊い命が失われており私たち同僚から11名が犠牲になっています。



新香坊難民収容所  
(元義勇隊訓練所)

若い私たちは、この人たちを救うために、ソ連軍の使役や市内で働いたりした収入で救援しますが、その冬の厳寒を乗り越えるために、私を含めた数十人が市内に住み込み、幸いにも生き延びることができました。もしも収容所に残留していたら、きっと牡丹江収容所の二の舞を踏んで病気になっていたでしょう。過酷な運命ともいえます。

以上が、私が敗戦前、直後の混乱期のハルビン・牡丹江に関わることについて記憶している範疇で記述しましたが、貴方のお父さんの行方についてわかる決定的なものが何一つありません。これについての私の記述はただ単なる推測に過ぎず、資料不足は否めません。

### 難民救済会をめぐって

お話では貴方のお父さんが牡丹江で難民救済に関わっていたようですが、私も同様なことをハルビンで体験しましたので、それについて参考のために記述させていただきます。その前に、これと大きく関わっている敗戦翌年の1946年に実施された初めての大きな日本人引揚げについて、理解を深める意味合いで少し長くなりますが触れておく必要があると思います。

敗戦の年の1945年10月、中・米双方は「ポツダム宣言」に依拠して上海で会議をもって、日本人送還(中国では捕虜送還と呼称)問題について組織的に帰国させることを決めて中国は国内輸送を、米国は海上輸送を受け持ち、翌年1946年末までに完了させることが確認されました。これにもとづいて、当時の中国共産党(毛沢東)と国民党(蒋介石)との内戦が一時中断され、ハルビンの日本人帰国が始ったのは敗戦翌年の8月で、貴方の家族も多分このときに帰国されたと思いますが、その辺の事情については、貴方のお姉さんからお聞きしたいところです。

最近の中国側の資料によりますと、敗戦1年前の1944年8月現在、満州にいた日本人は約166万人で、翌年の敗戦当時のその分布は〈国民党統治区〉84万人余、〈共産党統治区〉33万人余、〈ソ連軍統治の大連地区〉27万人余で合計145万人となっています。ちなみに日本政府の発表では敗戦当時の全中国居住日本人は358万人となっており、その約半数が満州にいたこととなります。一方、当時の中国新聞報道によれば、帰国者総数は18万2千人余名となっています。

このような大規模の送還をスムーズにするための措置として、これに関わる機関が必要になってくるのは当然のことでした。これについては、後に触れます。

敗戦の翌年早春、ハルビン市へ中国内陸から中国共産党指導の東北民主聯軍(元八路軍＝後の人民解放)がやってきました。私が見たのもこの時期で、初めての解放軍との出会いもありました。資料によりますと、この部隊に同行していた日本人民解放連盟(延安で日本軍捕虜等によって組織される)のグループが、居留日本人会を交えて「人民救済会」を組織します。これは解放軍と残留日本人の協議機関のようなものでした。この救済会が主にすることは奥地から逃避してきた開拓団などの難民救済でした。

その手始めの仕事が生活物資を集めて難民に支給し、当面の生活を援助することでした。そして、この救済会があとの日本送還をスムーズに進めるための役割を担う、重要な機関と

なっています。多分、牡丹江市も同じパターンだったのではないのでしょうか。

以上、私が知っている難民救済に関しての事情ですが、この救済会が後述の日本人残留問題に大きく関わっていくことになります。私が後日、この救済会が夢想だにしなかった解放軍に参加して行くきっかけとなり、私にとってはソ連軍につづく2度目の抑留でした。

当時はこの抑留される理由について諸説が飛び交い、今でもその真相は明らかにする文書もなく、中国はこのことについて今に至るも説明がなされていないのが実情です。半世紀前の過去のことを、いまさら何故にと思われるかも知れませんが、私がこの問題に執着する謂われは、私にとってこの問題は私の人生の運命を大きく変えた問題(事件)であったからです。

これは、日中友好協会を通してわかったことですが、中国は最近になって、私のような新中国建設に関わった日本人に注目して、調査を進めているようです。この問題についても、明らかにしてほしいものです。残念ながら、その結果報告が私は知らないまま、現在に至っています。

### 八路軍(人民解放軍)に抑留

当時は、私たちから言えば「抑留」ですが、解放軍からの言い分は革命戦争のための「協力留用者」で「君たちは決して捕虜ではなく、中国解放のために残って貰った国際友人」という位置づけをしていました。実際にその後、中国人兵士と同等の扱いを受け、なんら差別されることはありませんでした。

現在、このことについて頷けられるのは、彼らにしてみれば私たちのような軍国主義に凝り固まっている者に説明だけでは到底理解してもらえず、体験(解放戦争参加)するなかでわかってもらえるしかない、思ったかも知れません。

この留用要請の理由が、次のように諸説紛々入り乱れていました。

- 一、救済会から居留日本人会に、シベリアへ送られた関東軍の中に病人が多数出ているので、その救出のために救援隊を組織してほしい。
- 二、一とほぼ同じ理由ですが、違っている点は救済する対象が将兵ではなく、病気で奥地から出て来るのが不可能な開拓団の病人、負傷者となっていること。
- 三、元訓練所幹部から帰国を理由に私たち元訓練生が集められた際に、日本人会からこの救援隊の話が持ち出されたので、そのために私たち約百人が帰国はその後という約束で選抜され、私もその内の一人でした。
- 四、中国人民解放軍(以下・解放軍)から日本人会に、「国民党軍が送還中に多くの若い日本人を抑留して戦力増強しているという事実が明らかになったので、移送事業を中断せざるを得ず、したがって帰国を断念して解放軍に協力してほしい」というものでした。

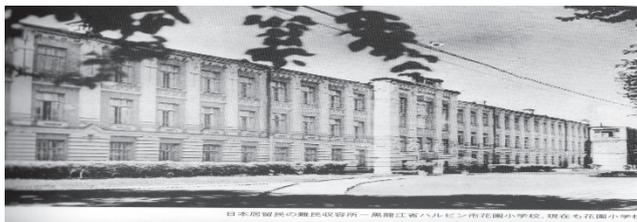
この救援隊の対象になったのが、初めから他ならぬ屈強な私たちであったことが一目瞭然です。私の記憶に残っているのは、最後の国民党軍による抑留説で、その信憑性が高く、その他は当時一人歩きしたように思えてなりません。

私は、この留用の発端は、前述の最初から解放軍に人力提供が目的で、このような手の込

んだことが仕組まれていたのではと思えてなりません。結果的には解放軍から居留日本人会を通して、元気な私たちが日本人を代表して人的供出させられたのが、ことの真相だったようです。

また、この話がどういうやりとりのもとに進められていったかの詳しい経緯は、今もって不透明のままです。当時、私たちの間では悪く言えば、この居留日本人会に「騙されて解放軍に身売り」されたと思い、その仕打ちを大変恨みました。しかし、生きていくためには解放軍に従うほかなく、無力な私たちにはどうしようもありませんでした。

私は今でも鮮明に記憶している当時の情景といえば、完全武装の解放軍兵士に囲まれて元花園日本人小学校に連れて行かれたことです。私の記憶に残ってはいませんが、ここで幹部から中国の解放戦争(国共内戦)への協力が



元日本人花園小学校(現存)

が告げられ、最前線部隊の担架隊として身柄を留用されることが初めて分って、啞然とされて陰悪な雰囲気になったそうです。

解放軍に参加してこの小冊の最後に、私のその後の人生に大きく関わっていく解放軍での経緯を要約して記述したいと思います。そのなかで、私の思想変遷の一端を、貴方やご家族の方に少しでも理解していただけたらという思惑があつてのことです。

### 11年ぶりの帰国

私が1955年(昭和30年)2月帰国してから入手した資料によりますと、このとき抑留(一部の者は希望)を余儀なくされた元満州国の日本人は、8千人あるいは一万人とも言われており、うち3千人前後の人たちが従軍して、前線、後方で働いています。

その対象は主に医師など医療関係、鉄道関係、航空関係、映画関係と幅広い層の人たちで、農業関係者の私たちの殆どは医療関係の仕事にたずさわっています。私の場合は前述の担架要員に携わった後は、自動車部隊に入って中国の各戦役に従軍し、最後は海南島解放作戦に参加するという稀有な体験をします。

私も含めたこれらの人たちは、留用のきっかけはともかく、解放軍での生活体験を積むにしたがいました。解放軍を指導する中国共産党の理念と活動態度を知るに連れて意識が変化し、中国革命の意義を認識して、やがて解放戦争と新中国建設の積極的な担い手となってゆきます。そして軍国少年から、帝国軍人から「革命の戦士」へと翻身した人たちは、決して少なくはありません。この人たちがそれぞれの分野で大きく貢献し、新しい国づくりに大きく関与していきます。

また、解放軍の兵士として、私の友人を含めた多くの日本人が、中国革命の大義を達成するために戦場で貴重な犠牲となっています。新中国成立によって日本人「留用者」の任務は基本的に終わりましたが、当時の日中関係は、彼らの集団引揚げ再会について話し合える状況ではありませんでしたので、その後も留まらざるをえませんでした。



八路軍当時の筆者

ここで私たちの帰国実現の経緯をちょっと触れさせてもらいます。これは私の帰国後に知ったことですが、1952年(昭和27年)北京放送が突然、1949年以来中絶していた日本人居留民約3万人のうち、帰国希望を希望する者を3年ぶりに帰還させると伝えたのが発端のようでした。私は、この中国政府から正式とも言える3万人の日本人残留者数も、このとき初めて知りました。

これに基づいて、日本赤十字社が中心になり、日本の代表団は日赤、日中友好協会、アジア太平洋地域日本平和連絡会のいわゆる3団体が中国政府から指定されました。そして、この代表団が北京に飛び、一ヶ月余りの会談の結果、帰国者の乗船地など五項目が決められ、帰国再開の運びとなったのです。

私は1955年(昭和30年)2月に、第18次帰国として天津市に近い塘沽港から舞鶴港に帰国し、実に11年ぶりに祖国の土を踏みました。これまで私たちの留用について、中国側の正式な文書による見解(評価)は見聞したことはありませんでしたが、つい最近になって入手した解放軍出版社(中国語版)の「中国人民解放軍第四野戦軍戦史(141頁)」に記載されていました。それには帰国再開が基本的に終了した1956年5月、周恩来国務院総理が日本の代表団と接見の際、「我々は1部の日本人に感激しています。彼らは解放戦争の時期に医者、看護師、技術者として参加し、この人たちは我々と日本人との人民友好関係締結の確信をさらに強めました。日本の軍国主義は確かに残酷だが、我々を援けた日本人は大変多かった」と話されている。

この書籍を通して、多くの中国の人たちが私たちのことを知る機会ができたことは、日中友好運動にとって大変よいことだと私は思っています。帰国後、この人たちが日中両国間の友好の架け橋となって国交回復運動に大きく貢献し、また、私たちは夢想だにしなかった「文化革命」による日本の民主運動へ大国干渉に対して戦い、そして「真の日中友好運動」を守るために奮闘、献身しました。

映画評論家の山田和夫氏は、解放軍兵士が新中国成立勝利を目前にした戦闘で、その苦痛と恐怖に満ちた苛さを描いた映画「戦場のレクイエム」の短評の中で次のように記述しています。「世界を圧倒した北京オリンピックの開会式典、あの度肝抜く華麗壮大な国力の発揮は、その『貴重な犠牲』があればこそだ」。また「中国はいま市場経済を通じて社会主義への路線をとり、唯一の超大国米国の地位をおびやかす躍進を遂げているが、同時に貧富の格差拡大、拝金主義や利己心の広がりなどの矛盾が表面化、この映画が真摯に訴える革命のかけがえのない記憶も、ともすれば忘れがちだ」、そして「この映画はそのような矛盾を乗り切る力があること、それを語りかける秀作」と。この指摘は最前線で銃弾飛び交う熾烈な戦闘を体験した私を含めた元解放軍の多くの日本人の共感と呼び、そして、私たちの気持ちを代弁されたと、受け止めるに違いありません。

以上の記述は、私の長い人生のほんの1部分の出来事に過ぎません。駄文はご容赦を乞い、ご笑覧いただければ幸いです。また、今回の旅行の資料としての価値が、多少なりあれば本望です。きなお、敗戦直後の解放軍の動向、言語については、敢えて事実として書き留め、他意のないことを付け加えておきます。

いま、安倍政権と一部の勢力が過去の侵略戦争を消し去ろうとし、憲法九条を踏みにじって日本を再び「戦争する国」に変えようとしているとき、私のように中国で敗戦の事態に直面し、政府や軍隊に見捨てられ、動乱の中、塗炭の苦しみをなめた者にとっては、絶対に容認できません。そして、中国での体験を一人でも多くの人に語り継ぐ大切さを、今、痛感しています。

(とうご・ひろみ：1929年生まれ、89歳。大阪府富田林市在住。15歳で満蒙開拓青少年義勇軍に入り、満洲へ。ハルビンで敗戦を迎え、ソ連軍捕虜として牡丹江捕虜収容所へ。釈放後、難民生活を経て八路軍に。1955年、日本に引き揚げ。医療活動に従事する傍ら日中友好運動に従事。関西紫金草合唱団名誉団長)

# 宝塚市の高碕記念館を見学して

長澤 保

今年は中華人民共和国 70 周年の節目。日中戦争が勃発して敗戦、82 年の時が流れた。日ソ中立条約が破棄をされ、1945 年 6 月 9 日、ソ連軍はソ満国境を各所から侵攻し、北満に移住しておられた日本人の農業開拓者は、襲撃されて逃避行・集団自決の惨禍に遭遇された。ソ連兵たちは乱暴狼藉を働き、略奪婦女暴行の限りを尽くしたことは史実として知られている。武装解除された日本兵がシベリアへ抑留され、極寒の地で労働させられた体験者とも複数の方々と出会った。私の家族も父が満鉄社員で撫順炭鉱に勤務しており、小学校 3 年生だった（東公園国民学校）。妹と四人家族で、日本人住宅街に居住していた。

8 月 15 日、昭和天皇の玉音放送をラジオで聞いた父は、戦争に負けたとつぶやいた。通学していた学校は中国軍により閉鎖された。治安の乱れ食糧不足など不安な毎日を過ごすことになった引き揚げまでの生活体験は脳裏に焼き付いている。父の腕章に 45 と 1/4 と記されていた。撫順駅から無蓋貨車に乗せられ、集結地の錦州に向かった。撫順駅では親しく仕事をしていた中国人の見送りを受け、リュックサックにたくさんの飴を詰めてもらい別れを惜しんだ。葫芦島から貨物船に家族四人は乗船し、3 日ほどで博多に到着するも、防疫のためか沖合に数日の停泊後に上陸、頭に DDT の粉末をかけられた。救護テントでいただいたおにぎりの美味しかったことを忘れていない。

日本の敗戦から在満邦人が引き揚げに向けて、当時ほどのように進められたのか。自宅に避難された家族は、優先の順位で 7 月頃に自宅を去った。私の家族は 9 月頃だったと思う。父の実家長野にたどり着いたのは 10 月の中頃だった。

さて『星火方正』27 号の「誰が満州引き揚げを実現させたのか？」——加藤聖文さんの寄稿された論文を拝読して、認識不足であったことを含めて疑問が生じた。ポツダム宣言を受けた 6 月以降の大本営の動向を、NPO 法人松代大本営平和記念館が催した学習会に出席して、大本営による戦争の遂行、「国体護持」に向けどのように対応したかを学んだ。

加藤氏は論文として記述された満州引き揚げに関して、こう書かれている。＜日本政府は残留日本人が苦しんでいるにもかかわらず彼らを見捨てたと誤解されているが、敗戦国は助けることはもちろん「見捨てる」という主体的な行動すらできない、これが戦争に負けるということである。＞

私もそうなのだと思っていた。しかし信濃毎日新聞 1993 年（平成 5 年）8 月 13 日付（別掲資料）「日本人 180 万人棄民方針 終戦直後」のサブタイトルに、「ソ連の指令下に移し…」のリード文章に驚いた。2011 年 5 月 21 日松代学習会きぼうの家で講師の永井瑞江さんは満州で体験した多くの事象に隠されていた真実を知り、各地で語り続けている。「五族協和」の欺瞞と満州建国して 13 年後に国家が消滅、「どこにもない国」となった。旧満州の最後

の年 1945 年は無政府状態になっていた。

8 月 14 日領事館宛に「在満邦人は全て現地に同化せしめよ」の打電をした朝枝繁春参謀は、当初の既定方針であったと証明されている。

さて高碓達之助記念館を見学の目的は…。元満州重工業開発総裁で敗戦後は日本人救済総会の会長、高碓達之助氏が、吉田茂外相と鮎川義介満州重工業開発相談役宛に発信した「密書」同じ内容の手紙を朝鮮ルート・大連ルートの 2 班に分けて、「密使」が 9 月 22 日出発。10 月 10 日頃に朝鮮班、続いて大連班も日本に辿り着いた。私は「密使」とはどんな人かを知りたかった。朝鮮ルートは「満業」の岩井・小笠原両社員、大連ルートは吉田・相馬の両社員が密航したことも、細字の「密書」も記念館の一室に展示されていた。書物も閲覧ができた。1946 年 4 月にはソ連軍が満州からの撤退で、長春の街には中共軍と国府軍の戦闘になり、中共軍の勝利で長春の様相は一変したと高碓氏は記述されていた。

私はこの書物を読みコピーをお願いした。高碓氏はソ連・中共・国府と満州の支配者が次々と変わる中で、常に生命の危険にさらされており、日本人右翼からも狙われたことがある。彼らの言い分は「高碓は日本をソ連や中共に売る売国奴だ」。

敗戦という現実下に考えるべき最大の責務は、日本人の生命を守り無事日本へ帰すことである。敗者が勝者に無益な反抗を試みることは死を意味することであり、多数の日本人を混乱に導くだけである。中共治下でも国府の支配下でもそれが私の基本的な態度、この記述に私は感銘した。

「今の私は猫みたいなものだ。犬は主人につくが、猫は主人が変わっても家に住み着いてネズミを捕るだけだ。決して新しい主人に手向かうことはしないが、餌だけは与えてくれないと困る」——この人生哲学に共感を覚えた。

中共軍が満州を支配して一か月後、国府軍が長春に進撃して 1946 年 5 月 20 日に長春は国府軍の手中に陥ちた。国府軍は、これまで中共に協力した人間は皆殺しする方針で、高碓は、いの一番にやり玉に上がるだろう……。周囲の人は逃亡を勧めた。しかし高碓氏は 6 月の初めに公安局を訪れてその後の処置を相談されたとのこと。「以前のことは気にしないで、我々の経済顧問として産業開発に協力してくれ」、高碓氏は喜んで引き受け「日本人の帰還促進を図ってくれるなら何でも協力しよう」と答えた。

この頃、東京の連合軍司令部からボーレー調査団が満州へ来て、目的は戦後、ソ連が満州から接收した諸設備の調査にかり出され、終戦時からの報告書をまとめ協力した。アメリカは感謝していたと記されていた。

1946 年（昭和 21 年）4 月 23 日、最初の引き揚げ命令が発せられ、5 月 15 日に難民第一大隊 1542 名が送り出され、各地で次々と送還が開始された。高碓達之助氏は国民政府の使者という意外な肩書で日本に帰ることになった。1947 年（昭和 22 年）10 月 15 日、引揚列車に増結された特別車に乗って、高碓氏は瀋陽を発った。その時に駅まで送ってくれたのが、かつての撫順炭鉱長、久保孚氏だったが、この人は不幸にも 1948 年 4 月に、中国民衆

虐殺事件（平頂山事件）の罪を問われ、瀋陽監獄で銃殺されてしまった。久保氏と駅頭で別れた情景を思い出すたびに、人間の運命の諸相を感じずにおれないと述べられていた。

10月15日に出発した高碓達之助氏は「壺蘆島」から石炭輸送船に乗り途中の労苦を重ねて10月末に佐世保に入港したと記述されていた。

長野県立図書館で入手した満州帝国建国10周年を記念した地図は、「壺蘆島」だった。大連は満州国ではなく国境線を見ると中国領土だった。中国側の地図は以前から地名とし、葫蘆島が明記されていたと思う。丸山邦雄氏らの所持していた地図は、旧満州国で地名まで変えてしまったと思う。奉天→瀋陽に戻った。

高碓達之助氏は1962年11月、LT貿易で廖承志さんと会談されるなど、日中貿易の草分けとして有名な存在であり、周総理や廖承志さんらとの記念すべき写真が館内に大きく展示されていた。3月10日（日）公益財団法人東洋食品研究所、高碓記念館の見学では、担当の山本克久様には懇切丁寧なご案内をいただき心より感謝を申し上げたい。ありがとう！！

（ながさわ・たもつ：1936年生まれ、46年9月、葫蘆島より引き揚げ、長野県畜産試験所に勤務。労働運動にも関わり、また日中友好運動に携わる。現在、長野日中友好協会広報委員長として活動する。現在、長野市篠ノ井在住）

.....

東京新聞（2019年4月13日付朝刊）より転載

**日露戦争 捕虜収容所の映画で主演**  
**ロデオン・ガリュチェンコさん(31)**

日露戦争（1904～05年）の際、国内初のロシア人捕虜収容所が松山市に開設され、一流国入りを目指す日本は捕虜を厚遇した。この史実を基に作られ、3月から各地で順次公開中の日ロ合作映画「ソーキーンの見た桜」で、負傷して収容された将校を演じた。

作品では、手当てした日本人看護師との愛が描かれる。「学校で習った日露戦争は、旅順攻防戦や日本海海戦、ロシアの敗戦といった程度。ほとんど知られていない歴史の

一ページを両国の人々が知る機会になれば」と期待する。モスクワの演劇大学に進み、在学中の2007年、脇役として映画デビュー。その後も映画にドラマに数多く出演してきた。少年時代にソニーの家庭用ゲーム機で、忍者が登場するソフトを使って遊び、日本に興味を湧かしたという。「本も読み、江戸時代の長い鎖国を経て、明治以降に飛躍的な発展を遂げた歴史に関心を持っていた」という。愛媛や徳島でのロケに伴って昨

年、日本行きが実現。松山城や道後温泉は忘れられない思い出になった。「松山では今も、100人近い元捕虜の墓が丁寧に管理されている。深く感謝したい」（平林倫）  
2019.4.13



この人

# 満蒙開拓平和記念館を訪れて

横井 幸夫

私が長野県下伊那郡阿智村にある満蒙開拓平和記念館（以下、記念館）について知ったきっかけは2つある。

1つ目。2016年11月17日に天皇・皇后両陛下が記念館を訪れた。私はこのことを新聞で読み知った。ただし訪問に関してのテレビ、全国紙の報道は大きくは無かった。小さな扱いの報道だったといえるだろう。この訪問について寺沢秀文館長は自らのブログ・テラサワ日誌の同年12月26日の記事にこう書いている。

『既報の通り、去る11月17日、天皇・皇后両陛下が当記念館にご来館されました。今回のご来館は両陛下の「強いご希望」によって実現されたものであり、これまで余り振り返られることの無かった満蒙開拓という史実に対して、国民の皆さんにももう一度目を向けて欲しいという強い願いの元にご来館下さったものと思います。勿論、天皇制や天皇の戦争責任等、様々なご意見等の立場があることは承知していますが、先の戦争に対して真摯に向き合い、ご高齢の中、慰霊等の旅を続けられておられる両陛下の活動等に対しては深く敬意を表させて頂くところです。今回、両陛下が敢えてこの記念館を「強いご希望」により訪問されたということは、両陛下の満蒙開拓の史実に対して国民と共に向き合おうとされる強いご意志を感じました。でなければ、出来てから僅か3年余りのこの辺地に立つ小さな民間運営の記念館に両陛下がご来館されると言う正しく奇跡のようなことは起き得なかったと思います。そのご意志を受け止め、これからも記念館からの平和の発信に努めたいものと改めて思います。』

天皇・皇后両陛下がこの記念館を訪れた目的は寺沢館長がここに書いた通りだと思う。確かに「辺地に立つ小さな民間運営の記念館」だった。

2つ目。方正友好交流の会理事長の大類さんが会報「星火方正」を贈ってくれる。2018年5月発行の第26号の会報に『「満蒙開拓平和記念館」館長就任に当たって』との寺沢秀文館長の記事が載り、また記念館を訪れた2人の大学生の感想記事も載っていた。寺沢館長の寄稿には記念館開館までの道筋が詳しく書かれている。2006年に飯田日中友好協会の河原進会長が記念館建設構想をもらした。その後、紆余曲折を経て7年後の2013年に記念館は開館した。初代館長に河原進会長が就任、2017年に2代目の寺沢館長が就任した。

私はこれらの記事を読み、いずれ機会が有れば記念館を訪れようと考えていた。



私は冬の寒さがまだ残る今年3月の初めに家内と記念館を訪れた。我が家のある横浜から車で東名高速—圏央道—中央高速を乗りついで記念館への道筋は遠かった。マイカー、貸し切りバス以外の公共の交通機関を利用し記念館を訪れるのには多くの苦勞が伴うだろう。岡谷JTから阿智村までの中央高速は右手間近に中央アルプスを、左手遙か遠くに南ア

ルプスを、眺めながら伊那盆地を走りぬける。中央アルプスの最高峰は2,958mの木曾駒ヶ岳で、南アルプスの最高峰は3,193mの北岳だ。二つのアルプスの山頂、稜線にはまだ多くの積雪が残る。中央高速の飯田山本ICを降りてくねくねとした下り道を走ること約15分、谷底のような場所に記念館があった。敷地内、周りの木々、草花はまだ芽吹いておらず、寒々とした景色が広がっていた。訪れたのは平日の午前中だったので、私たち夫婦以外にほかの参観者に会うことは無かった。

展示の多くはパネル説明によるもので、当時の品々は極めて少ない。この記念館が建てられたのは1945年の敗戦から68年経った2013年のことだ。68年の歳月は、日本に戻った多くの満蒙開拓民がこの世を去り、また多くの資料、遺留品が散逸、消失するのに十分すぎる時間だ。

展示とともに大きな比重を占めるのは満蒙開拓に行き、帰国した人々への聞き取り、オーラルヒストリーである。記念館はいま開拓民の生存者からの聞き取りを積極的に続けている。しかし、満蒙開拓に加わった生存者の多くはすでに80歳代、90歳代となっている。あと20年もすれば、満蒙開拓を経験した人々、すなわち戦争を経験した人々、はほとんどいなくなるだろう。

戦後の日本を、一部の短い期間を除き、事実上一貫して支配してきた保守政権、保守政党は戦争の記録を破棄し、歴史から消し去ることに熱心であった。ドイツの政府と国民は戦前に自国政府の行った戦争犯罪、戦争の痕跡を記憶にとどめる努力をしてきた。日本の政府と国民は戦前に自国政府の行った戦争犯罪、戦争の痕跡を消し去ろうと努力してきた。いまの政権政党である自民党は戦争を推し進めた人々、戦争犯罪人が作った政党だ。したがって、自民党の政治家は自分たちが戦争推進者、戦争犯罪人の子孫、末裔であることを認めたくないで、先の戦争の痕跡、記憶を国際社会からも日本社会からも消し去りたいのだろう。評論家・加藤周一（1919～2008）さんは『日本人の多くは先の戦争で身内、親族の誰かを失っている。そこで「戦争でえらい目に遭った」という。しかし、えらい目に遭ったので、2度と戦争は厭だという発想、行動には結びつかない』と言った。戦争に反対することと、いま自民党政権を支持することとは両立しないだろう。

満蒙開拓団とは。満とは戦前の日本が建国した傀儡政権・満州国、いまの黒竜江省、吉林省、遼寧省。蒙とは中国の内モンゴル自治区、県庁所在地は呼和浩特(フフホト)。

満州を支配していた関東軍（当時の日本政府は関東軍の暴走をコントロールできず、すべて追認してきたので、関東軍と日本政府とは同義語）は1936年に満州農業移民移住計画を立てた。1932年の満州国建国から20年後の満州の人口を5千万人と見積もり、そのうちの1割、100万戸、500万人を日本からの開拓民、入植者で占めようというもの。日本からの開拓民の入植は1931年から始まり、敗戦を迎えた1945年までの14年間で満蒙に送り込まれた開拓民は青少年義勇軍を含め最終的に約27万人だった。地域別では長野県から最多の約3万3千が送り込まれた。長野県に満蒙開拓平和記念館が建てられたのは故あることだ。満州国が20年も続くと考えた当時の日本政府、日本国民はまさに集団的狂気状態にあったのだろう。

満蒙への入植はすでに住んでいる住民を追い出し、別のところに強制移住させることで行われた。1945年8月15日の日本の敗戦で満州国が瓦解し、日本の統治権が失われたことで、開拓民は日本政府の保護、庇護を失った。さらに敗戦後に、日本政府は開拓民の



館内は撮影禁止なので、館内の写真はない。

保護を中国、ソ連などに求めることはしなかった。日本政府は開拓民に現地にとどまり、自助努力で生きることを求めた。要するに見捨てたのだ。その結果、一部の開拓民は絶望のあまり集団自決した。開拓民は安全なところを求めて、また自力で日本に戻ろうと満州を放浪することになった。婦女の中にはソ連軍、中国軍から陵虐を受けた。男性は日本の敗戦直前の8月9日に満州に侵攻したソ連軍によりシベリアに抑留された。これらの事実を記念館が教えてくれる。

この記念館から学ぶこと、教訓を二つ挙げる。

戦前の日本政府は強制的に開拓民を満蒙に送り込み、敗戦後は開拓民を見捨てた。戦後に日本を支配してきた保守政権、日本政府は一貫して沖縄県民の民意を無視し、見捨ててきた。日本政府は2011年に起きた東日本大震災の被災者、中でも東電福島原発事故被災者を切り捨て、見捨ててきた。日本政府は東日本大震災の記憶を国民から消し去り、なかったこととして東京オリンピックを開こうとしている。これからも天災、自然災害が起きるたびに日本政府は被災者を見捨てるだろう。またこの保守政権は戦争を望んでおり、戦争になれば国民は戦地に送られ、そして兵士も国民も見捨てられることになるだろう。しかし、戦前も戦後も国民を見捨てる政権、政府を望み選んできたのはほかならぬ日本人、日本国民自身なのだ。

記念館は娯楽施設ではない。記念館を訪れる日本人は少なく、娯楽施設の東京デズニーランドを訪れる日本人は多い。東京デズニーランドは訪れる人に一時の快楽を与え、過去の歴史と将来への憂いを忘れさせる。記念館は訪れる人に良心を目覚めさせ、過去の歴史を思い出させ、将来を憂えさせる。私は東京デズニーランドを訪れたことはないし、これからも訪れる予定はない。金（入場料。前者は高く、後者は安い）と時間（前者は首都圏から近く、後者は首都圏から遠い）をかけてどちらの施設を訪れるかは各個人の人生観、価値観、生き方によるだろう。

注：本稿作成にあたり、満蒙開拓平和記念館図録、方正友好交流の会会報「星火方正」第26号を参照した。

（よこい・ゆきお：1948年神奈川県生まれ。東京外国語大学で中国語を専攻し東レ株式会社に入社後、北京駐在4年、上海駐在4年。2009年同社を定年退職後に国際アジア共同体学会（会長 進藤榮一筑波大学名誉教授）事務局に関わる）

# 林口へ行ってきました

野中 西夫

2017年1月17日、あるテレビ局の番組「世界の村で発見！こんなところに日本人」で、中国黒竜江省の林口という町で暮らす、席静波さんという日本人が紹介された。席さんは中国東北部（旧満州）に入植していた開拓団で暮らしていたが、3歳の頃第2次世界大戦末期の混乱で家族と離別してしまい、天涯孤独になってしまった。その後4人の中国人養父母に育てられながら、74歳になる今日まで中国で生きてきたという経歴の持ち主である。

テレビを見終わって、私は哀歓入り混じったなんとも複雑な気持ちになった。1人の日本人として、なるべく早い時期にお会いしたい衝動に駆られた。私は、思い立ったら行動は早い方なのだが、今回ばかりはそうもいかなかった。まだ行ったことのない未知の町、冬は厳寒の地、白内障を患っている目で不慣れた土地の夜を歩く自信はなかった。その上、会おうとする人は一面識もないのである。1年かけて準備をして、来年暖かくなったら必ず行こうと決めた。

## 1. 新潟からハルビンへ

2018年5月7日、林口に向けて出発した。経由地のハルビンへは、直便がある新潟空港から行くことにした。新潟へは、長年、2泊3日の合宿で行われた中国語学習会「中国語新潟」で行き慣れているし、ハルビンは以前もこの路線を使って行ったことがある。新潟駅南口に着くと迷わずジュンク堂前に向かった。

が、空港バスが出発する⑤番乗り場がない！何てこった、ジュンク堂前は、「中国語新潟」解散後の今も、毎年行われている同窓会の送迎バスの発着所で、⑤番乗り場は、ロータリー内の、駅舎に一番近いところにあったのだ。慣れは恐ろしい。重いスーツケースを引きずりながら引き返した。

空港バスの中の案内はロシア語を含めて5カ国語、バスの車窓からは海拔マイナス1m地帯の標識なども見えて、今まで知らなかった新潟を知った。

新潟空港は、ゴールデンウィークが終わったというのに大混雑であった。多くは帰国する中国人であったが、搭乗者の預け荷物の大きさ、多さが拍車をかけていた。2時間前に空港に着いたのに、離陸時間に間に合うだろうかひやひやした。

多くの旅客が、搭乗手続きの前のX線検査でクレームをつけられて、スーツケースやバッグの中身をすべて開けさせられたが、私も同じであった。預け荷物では、懐中電灯、血圧計、シェーバーなどの電池を使用した製品、機内持ち込み荷物では、こうもり傘。今までチェックされなかった携行品だ。結局、危険物ではなかったのですべて携行できたのだが、不満顔をした私に空港職員が申し訳なきように言った。「ハルビン空港は特に入国審査が厳重なので…。」やれやれ、初めての経験だった。

## 2. ハルビンから林口へ

降り立ったハルビンの町は、木の葉が開き始める季節で、私の住む熊谷

より1ヵ月あまり春の訪れが遅いようだ。心配した寒さもなく、道路の傍にはライラックの花が咲き乱れ、芳香が漂っている。ライラックはハルビンの市花で、中国語では丁香花（ディンシャンホア）だそうだ。

ハルビンから林口までは、26年ぶりの夜行寝台車に乗る。気分が高揚する。夜中の午前1時8分ハルビン東駅出発、林口までおよそ7時間の旅だ。

この辺は、日本では北海道の稚内に近い緯度で、夏の夜明けは早く、3時半には空が明るくなった。窓の外を眺めると森林がどこまでも続き、鉄道の沿線には人家が全くない。日本では見られないスケールの大きい風景に、しばし異国情緒を味わった。

### 3. 席静波さんに会う

林口駅には席さんと娘婿の梁さんが迎えに来てくださっていた。お互い初対面なのに、長年の知己であるかのような笑顔をたたえて。梁さんの運転する車で席さん宅に向かう。

席さんのお宅には、中学校の校庭が眼下に見下ろせる南向きの部屋があった。そこは明るい春の日差しが差し込んでいて、この一年、何回かやり取りした手紙からはうかがい知れなかった、穏やかな暮らしぶりが感じ取れた。

奥さんの心尽くしの昼食をいただきながら、私は今回の訪問の趣意を告げた。身内に残留孤児がいるので他人事とは思えないこと、席さんの味わったであろう人生の苦勞に、日本人として同情を禁じえないこと。そうして、聞くのをためらった、あの文化大革命の時代に、日本人であるがゆえの迫害は受けなかったのか、ということ。

席さんは、静かな、しかし、しっかりした声で答えた。「没有。没有迫害外国人。中国人心胸很宽广的。」

(訳：ありません。外国人を迫害しませんでした。中国人は心が広いです。) ここは中国東北部の田舎町、中央の政治運動は及ばなかったのか、私の心の中に、小説「大地の子」の主人公、陸一心が日本人なるがゆえに受けた、度重なる迫害が強く印象に残っていたのか、それとも、日本からやってきた私への席さんの気遣いだったのか。私は席さんと話をしていて、次第に心がやすらいでいった。苦勞をほとんど語らない席さんだったが、育ててくれた養父母への思いから、日本に帰国することは全く考えなかったという。今は、優しい家族に囲まれて平穩に暮らしている姿を拝見し、自分のことのようにうれしかった。

その後、席さんの案内で近くの小高い山に登った。頂上は公園になっていて、老人たちが三々五々、中国将棋やマーじゃん、トランプなど、思い思いの趣味を楽しんでいた。北方には連山が遠望でき、席さんがかつて暮らしてきた土地もそこにあるという。私は、その風景を眺めながら、厳しい自然の中で、過酷な運命を背負いながら生きてきた席さんの人生を思い、胸がいっぱいになった。

### 4. 帰国して思うこと

席さんに会ってよかった。何より、持病も無く元気に暮らしている姿をこの目で見て安心した。多くの日本人が持つこまやかな心配りが、席さんにも溢れていた。

夕方、町の公園や広場では子供たちが元気に遊び回り、老人たちがおしゃべりを楽しんでいた。日本では見かけなくなってしまった、夢のような光景を羨ましく思った。

鉄道のチケットもオンラインで買えるようになり、便利になった一方で、駅や空港の昇降はほとんどが階段で、重い荷物を持った非力な私には少々こたえた。日本流のサービスに慣れてしまった身には、驚くことや腹の立つことも幾つかあったが、それも新たな体験であり、異境を旅する面白さだった。



(左：席静波さん　　右：筆者)

(のなか・とりお：1945年7月16日埼玉県生まれ。1968年～2007年、埼玉県内の中学校・高校で国語科教師。1992年～1994年、上海対外貿易学院日本語教師。2007年～2008年、浙江大学日本語教師。)

「大地の子」も知らなかった私が、

## 方正地区日本人公墓を訪ねるまで

大澤 大介

中国残留日本人については特別な思い入れは無かった。終戦後の混乱のため中国に取り残された日本人が多くいたこと、そんな身寄りのない日本人を引き取って育ててくれた中国人がいたということ、そういう事実を何となく知っていたに過ぎない。ただ漠然と不思議に思っていたのは、中国人は侵略してきた日本人が憎くなかったのだろうか。そのような疑問を抱きつつも、努めて解明しようとは思わなかった。そんな私が中国残留日本人の問題に関心を抱くきっかけになったのは、会社の業務で残留体験孤児へのインタビューを行ったことだった。

### 残留孤児から聞いた「方正日本人公墓」

私は都内の映像制作会社で映像ディレクターとして勤務し、普段は主に通販番組などを作っている。「今から 30 分以内にご注文いただくと 5,000 円引き！」とかナレーターに絶叫させるような仕事だ。それがお門違いにも、日本に永住帰国した残留孤児と残留婦人を取材し、その貴重な証言を映像にして後世に残そうという事業に携わることになったのだ。「大地の子」も撮影に向かう移動中の新幹線で読んだほどの知識と意識の低さだった。

2018 年 9 月に撮影が始まった頃は、まさか自分が中国まで行くことになるとは思ってもいなかった。そもそも中国に残留を余儀なくされ、飢えと寒さに亡くなった大勢の日本人の墓が中国人の手で中国の地に建てられたことすら知らなかった。

「方正には亡くなった日本人のためのお墓がある」と聞いたのは、残留孤児へのインタビュー中のことだった。その人は続けてこう言った、「その墓は周恩来が建てさせたものだから、破壊されずに今も残っている」と。その人自身は瀋陽の収容所で孤児になり、中国人の養父母に引き取られ、46 歳まで中国で暮らした方だった。多くの残留孤児がそうであるように、父親は終戦前に兵役にとられ、母親はわずかな食糧を子供たちに与え収容所で亡くなった。当時、瀋陽の収容所には、売買目的で日本人の子供を引き取りにくる中国人がたくさん来たという。母親の死後、はじめのうちは、声をかけられても頑なに拒んでいたものの、やがて一人の中国人に案内され、養父母の家に連れていかれた。日本への帰国がいつになるのかわからない中、中国で生きていく決断をしたのだ。

### 『星火方正』で知った松田ちゑさんのこと

取材した残留日本人の中で、方正で収容所生活をした方は 2 名いらっしやった。お二人

の証言で共通していたのは、決死の逃避行だった。ソ連との国境近く、現在の黒竜江省にあった開拓団の村の人は、突然始まったソ連軍の侵攻を逃れて徒歩でハルビンを目指した。日中は目立たないように山の中に隠れ、夜を待ってから移動した。途中、松花江を何時間もかけて渡り、匪賊に襲われながら、方正の地にたどり着いた。方正には日本軍の兵站基地があったため、多くの開拓団が集まったという。しかし、食糧などは根こそぎソ連軍に没収され、そのままハルビンを目指して移動したが、10月になり寒さが厳しくなると方正に引き返した。日本軍の建物はソ連軍に接収されているため、野宿を強いられ、地面に穴を掘って寒さを凌いだ。もちろん、食べ物はない。いよいよ寒さが本格化すると毎日死者が出た。1体1体を埋葬することは到底不可能だから、大きな穴を3つ掘ってそこに遺体を安置していたのが、春を迎える頃には3つの大きな山になったという。それを八路軍が焼き、遺灰はそのまま野晒しにさせられた。生きるためには、中国人家庭に入るしかなかったとお二人は語った。

その後、松田ちよさんの嘆願によって、方正の遺灰が集められ日本人公墓が建立されたというエピソードは、『星火方正』で知った。「開拓民もまた、日本軍国主義の犠牲者である」という周恩来の懐の深い考え、また実際に公墓建立に尽力した方正県の人たちの広い心に感銘を受けた。そして、ぜひ参拝したいと思った。

### 日中友好の会の協力

ただ、はじめ私はもっと単純に考えていた。半年に渡って関わった仕事のケジメというか、区切りとして実際に中国東北地方・旧満州の地を自分の目で見てみたい、それならば日本人公墓の参拝もしたい。そう思って中国行きを決めたのだが、日本人公墓のある中日友好園林が閉鎖されていると知ったのは、往復の航空券を購入した後だった。そこから、方々に連絡を取り、またインターネットで調べて、なんとか参拝が叶う方法を探った。そうして、日本中国友好協会を知り、撫順の奇蹟を受け継ぐ会を知り、中帰連平和記念館を知り、方正友好交流の会を知った。「方正友好交流の会」の大類様からは、方正県政府の外事弁公室の連絡先を教えて頂いたが、電話しても繋がらなかった。出国の日が迫る中、こうなったら中に入れなくても行くだけは行ってみようと思腹をくくった。そんな時、以前仕事でお世話になった中国の方がハルビン出身だったことを思い出し、何か手がかりが見つかればとダメ元で聞いてみた。そうしたら、方正県に行ったことがあるという。それも、残留孤児のドキュメンタリー番組の制作で、撮影のために方正に行ったのだと。その時に、中国帰国者・日中友好の会に協力してもらったので、連絡を取ってみたら、と教えて頂いた。早速、連絡を取り事情を説明すると実にあっさり、方正県現地での案内を申し出てくださいました。「方正に到着する日時を教えてください、誰か案内してくれる人を見つけますよ」と。私が日時を伝えると、「当日、あなたの名前を書いた紙を持って駅改札で待たせるようにします」という。

## 高速鉄道で方正へ

果たして、3月22日（金）の午前9時に方正駅に到着した私を、曹さんが待っていた。ハルビンからは、高速鉄道で移動した。窓の外は、地平線の向こうまでのびた長い畝で、残留孤児の方の証言通りだった。真新しい駅舎の方正までは約1時間半、あっという間に着いた印象だった。地下通路を潜って、改札に行くと出口のところで、50代くらいに見える男性が私の名前が書かれた紙を掲げて、立っていた。私は手を振って応え、改札を出て両手で握手を交わした。すぐに駅前に駐車してある車に乗せてもらい、日中友好園林に向かった。

私を迎えてくれたのは、曹さんというお名前の方で方正県政府の方だった。車を運転したのは、20代の若い男性で二人は親子ではないように見えたが、親しい間柄だった。後から聞いて知ったが、若い男性は残留孤児の子孫なのだという。筆談で、目的地までは40分ほどと教えてもらった。方正の市街地を抜けると、道中は田園が続いた。道路脇に植わった背の高い並木が綺麗だった。新緑の時期はさぞ美しいことだろうと思った。

やがて日中友好園林に到着し、車を降りると、曹さんが紙に書いて、ここが入口だと教えてくれた。立派な門構えだが、やはり固く閉ざされている。その入口から数十メートル離れた別の入り口、おそらく管理人用の入り口から入らせてもらった。女性の管理人さんに曹さんが何やら話しかけている。曹さんに無理をさせてしまっているのではないかと、少し心配になって、思わず立ち止まってしまう。そんな私を曹さんは引っ張るようにして、中に招き入れた。園内は一面新雪に覆われていた。鳥の鳴き声の他は何も聞こえない。足跡一つない雪の道を歩いて、方正地区日本人公墓に向かった。積もった雪の重みで梢が低く垂れ下がり、身をかがめながら歩いた。日本人公墓の前に着くと、曹さんが紙に書いて、後ろの盛り上がった部分に遺灰が納められていると教えてくれた。私はここで亡くなられた方を思い、そっと手を合わせた。

曹さんは園内の一つ一つの碑石を丁寧に案内してくれた。最後に世界平和を祈念した碑の前でこの木は日本人が植樹したのだと曹さんが説明すると、これまで黙っていた若い男性の方が、日本語で「さくら」と言った。そこには、「日本では特別な花なんですよ？」というニュアンスがあった。東京で開花宣言があった日に訪中したが、目の前にある中国の桜はまだ蕾すらなかった。この桜が開花した風景を思い描き、桜吹雪の日本人公墓も見てみたいと思った。

帰路の途中でラーメンまでご馳走になり、方正駅まで車で送って頂いた。ハルビン行きの切符を購入しようとする、夕方5時まで満席だという。すると曹さんたちは、電話をかけ始めた。若い男性がスマホの翻訳アプリを使って、ハルビンまで車で出かける友人がいるから同乗するか、と聞いてきた。なんとも至れり尽くせりだ。私が頷くと、車で市街地へ向かった。

## この旅は新たな出発点だ！

ハルビンまで車で送ってくれたのは、孫さんという女性の方だった。方正の商店街で車を乗り換え、すぐにハルビンに向かった。孫さんは英語ができて、私も片言の英語で応じてコミュニケーションが少し取れた。ハルビンには、小学生の息子を迎えに行くのだという。ただ少し会話ができたとはいえ、話題は長くは続かない。3時間ほどの移動中はほとんど無言だった。それでも、私の訪問を方正の人たちに連絡し、便宜を図っていただいたのは、「石金楷」様であることを教えてもらった。そして、彼女もまた残留孤児の子孫であるということを知った。祖母は残留日本人だが、証拠不足で未だに日本政府から残留日本人に認定されていないという。悲しみに表情が陰るのがわかった。祖母の写真をスマホで見せてもらったが、孫さんと頬を寄せ合った写真だった。

ハルビン駅前前で降ろしてもらい、孫さんと別れた。念願の日本人公墓への参拝は叶ったものの、私は悔しさを感じていた。たくさんの方にお世話になりながら謝意をきちんと伝えられず、また孫さんの悲しみにあまりに無力だった。ただ参拝して終わりというほど、単純ではいられないことに気付いた。

帰国して思うのは、この旅は始まりにしなければならない、ということだ。私は偶然にも日本人公墓の存在を教えてもらい、『星火方正』でその重要性を知ることができた。そして、たくさんの方の善意とご協力のおかげで、日本人公墓の参拝が実現した。今度は私が日本人公墓の存在を伝える側になりたいと思う。そうすることが、お世話になった人への恩返しになることを願ってやまない。この旅の経験は、そのために役立てたい。近い将来、中日友好園林の門が開くことを信じて、微力ながら日本人公墓の周知に貢献できればと思う。

旅行にはムービーカメラを携帯した。日本人公墓の撮影もできたので、映像作品にして発表したいと考えている。正直、まだ撮影素材のチェックもままならない状況だが、その日が来たら改めてご報告するので、乞うご期待。

(おおさわ・だいすけ：1979年生まれ。米軍三沢基地の町で生まれ育つ。日本大学中退。自主制作映画に熱中した20代を経て、現在、映像ディレクターとして都内の制作会社に勤務。中国残留邦人の証言はこちらのWEBサイトで視聴可能：

[https://www.youtube.com/watch?v=Hoef4RKNx\\_8&list=PLMG33RKISnWj3RkwDLi0Ex7lJlO\\_j0Rx\\_](https://www.youtube.com/watch?v=Hoef4RKNx_8&list=PLMG33RKISnWj3RkwDLi0Ex7lJlO_j0Rx_)

# 合唱を通して中国の人々との草の根の文化交流

小淵 章

私は紫金草合唱団として2001年3月最初の南京公演に参加して以来、これまで紫金草合唱団としては2回、台湾公演を含めると3回、再生の大地合唱団としては3回の中国公演に参加してきました。公演で訪問した地域は、南京、瀋陽、撫順、北京、泰州でした。そこでは、中国の多くの市民の皆さんに南京事件の加害を扱った合唱朗読構成「紫金草物語—不忘歴史・面向未来」

(作詞・構成；大門高子、作曲；大西進)、平頂山事件の加害を扱った「再生の大地—撫順戦犯管理所—」(作詞・構成；大門高子、作曲；安藤由布樹)の合唱を通して、歴史の事実を見つめ平和と中国の人々への友好の思いを届け、行った先々で中国の市民合唱団や学生の合唱団の方々との交流をしてきました。帰国してからは、その都度、まだまだ知られていない歴史の事実と私達の取り組みや体験をより多くの方に知っていただこうと現地で撮った写真など入れて文章化し、私の所属する山の会や地域で9条の会などの平和憲法を守る市民運動をしている方に配布してきました。

昨年9月の「再生の大地」合唱団の撫順一中文化祭公演とその後訪れた侵華日本軍第七三一部隊罪証陳列館、方正県の日本人公墓・藤原長作記念碑参拝のことなども以下のように文章化して配布しました。

## 「再生の大地」合唱団訪中公演に参加して

私たち「再生の大地」合唱団(サポーター含めると40名弱)は中国の撫順第一中学校(日本では高校生にあたる)の文化祭に招かれ、昨年(2018年)9月10日～9月16日に訪中をしました。私にとっての今回の「再生の大地」合唱団の一メンバーとしての訪中の目標は、撫順市第一中学校文化祭での公演で、合唱朗読構成「再生の大地—撫順戦犯管理所」の歌詞に託された思いを合唱を通してしっかりと伝えること。もう一つは、今まで訪れたことのなかった長春、ハルピン(哈爾濱)、方正の地を自分の足で歩いて、歴史を訪ね学び、できるだけ今生きる人々の暮らしぶりを見ることでした。

## 私たち合唱団も生徒たちも熱演 —撫順一中での素晴らしい文化交流—

撫順一中の正門では、生徒たちの代表約20名と先生たちが、私たちを出迎えてくれました。正門を入るとなんと電光掲示板に「日本の再生の大地合唱団を熱烈に歓迎したい」との表示が。さらに進むと、模範の先生たち、成績の優秀な生徒たちの写真の一覧が。この学校は、1953年に創立されたということでした。校内には、日本に留学し九州帝国大学でも学んだ中国の作家、郭沫若の揮ごうした「撫順第一中学校」の看板が展示されていました。現在、生徒数2300人。

私たち総勢28名の合唱団は、手作りの舞台の上で演奏し、安藤先生は舞台下の中央でピアノを弾きながら指揮をされました。一年生約750名と日本でホームステイした生徒の家族の皆さんの前で、全曲演奏をしました。事前練習の時には、合わなかったりして少し心配だったけれど、本番では、舞台を真剣に見つめ、私たちの演奏の進み具合に合わせて歌詞の書かれたプリントをめくる生徒たちの集中した

姿に応えようとして私たちも熱の入った演奏になり素晴らしい出来栄えだったのではないかと思います。

私たちの演奏の後は、生徒たちの歓迎の踊り、歌（ソロ、デュエット）、合唱などの出し物を鑑賞しました。それぞれ見事な舞台でした。私たちが学校に滞在している間、案内、接待などに親切に関わってくれた生徒の皆さんには心から感謝をしたいと思います。



開演を待つ「再生の大地」合唱団と生徒たち



撫順 1 中の生徒の歌と踊り



撫順 1 中の生徒の合唱

### 侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館の訪問

撫順で短縮組コースの方たちと別れ、時速300kmを越す新幹線で2時間ほど乗車してハルピン（哈爾濱）駅へ。そこから、専用バスで郊外の平房にある七三一部隊罪証陳列館へ。陳列も工夫され、わかりやすいものでした。ここに着くまで、以前七三一陳列館に勤務し、『死ぬまえに真実を一侵略日本軍第七三一部隊の犯罪一』<sup>上</sup>中国人の証言 <sup>下</sup>日本人の証言（韓暁/金成民；著）を日本語訳した広島合唱団の中野勝さんからお話をうかがっていたので理解も深まりました。この場所で、1939年から1945年にかけて多くの中国人、ロシア人、モンゴル人、朝鮮人、総計少なくとも3000人近くの人々が人体実験の材料として使われ、無残にも殺されました。この罪を隠すために七三一部隊は、逃亡する前にすべての施設を爆破し、重要資料を持ち帰りました。部隊の解散にあたって、部隊長の石井四郎は、七三一のことはしゃべるな、公の職に就くな、お互い連絡を取るなど部下に命じたのです。本人は、戦後アメリカのGHQに人体実験の医学データを提出し、それと引き換えに一切の戦犯行為を免罪してもらったのでした。部隊の中には、罪を問われることなく、戦後、病院を開業したり、大学教授に納まったりしている人たちもいたのです。

私たちは、今もかろうじて残されている、凍傷実験室、ハタリス（ネズミ



凍傷実験室遺跡

の一種）飼育室、ボイラー室の残骸などを案内してもらいました。戦争中に日本人が犯した罪を改めて心に刻み付けました。多くの人に見てほしいと、思いました。副館長さんの話では、ここには、年間百万人の見学者があり、中国の小・中・大学生が多く、外国人では韓国人が一番多

く、二番目が日本人だ、ということでした。アウシュビッツ見学と同じように、撫順戦犯管理所、南京利濟巷慰安所旧跡陳列館、七三一陳列館を是非見学コースに入れてもらいたいものだと思います。教師時代に見学したアウシュビッツ・ビルケナウのことは、六年生の歴史・総合の授業で紹介することはできましたが、七三一陳列館も見学していたなら、歴史の事実として子どもたちに伝えることができたのに、と思いました。

帰国後、私たちに同行して平頂山事件や方正のことを話してくださった大谷猛夫さん（「中国人戦

争被害者の要求を実現するネットワーク」事務局長)の著書『日本の戦争加害が、償われないのはなぜ!？—中国人被害者たちの証言と国家・加害企業・裁判所・そして私たち—』(合同出版)を読んで驚いたことは、七三一部隊のことは、ここまで、資料がそろい事実がはっきりしていることなのに、現在の日本政府の公式見解は、「関東軍防疫給水部本部部隊」の存在は認めるが、防疫、給水の部隊であり、人体実験などの事実を裏付ける資料がないとして認めない、という立場をとっているということが、書かれていたことでした。日本政府の歴史の事実に向ける態度には、憤りさえ覚えました。

ところでこの大谷さんの著書は、日本の中国での様々な戦争加害の問題が整理され、未解決の課題がたくさん残されていることが紹介されています。それを列挙してみると、南京大虐殺事件、七三一部隊事件、無差別爆撃事件、平頂山事件、「慰安婦」事件、中国人強制連行事件、遺棄毒ガス事件です。東京を中心にいくつかの中国人戦争被害者の要求を支援する支援組織ができていることや草の根の市民交流の大切さ、市民運動の意味、等々の記述があります。草の根の日中友好を進める上でも基本のおさえとして大変参考になると思いました。お薦めの本です。

### ハルピン市郊外の方正県の日本人公墓・藤原長作記念碑参拝

あれは何年前だったのでしょうか、富士国際旅行会社で行われた伊藤千尋さんの講演会後の懇親会で大類善啓さんと同席したことがありました。その後、大類さんから『星火方正～燎原の火は方正から～』(発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓)という雑誌が送られてくるようになりました。その中でタイトルに興味を持った記事は読んでいたものの、ハルピン市郊外にある方正県にある日本人公墓については、充分理解していませんでした。今回の訪中に先立ちクラウン観光社から送られてきた「中国に存在する『日本人公墓』が問いかけるもの」(方正交流の会)、「私の視点 日中友好 日本人公墓を知っていますか」(方正友好交流の会事務局長：大類善啓 朝日新聞 2007年10月10日付朝刊)、「天を恨み地を呪いました—中国方正の日本人公墓を守った人たち—」(奥村正雄)などの諸資料を読んで、ようやく理解しました。

日本の敗戦の混乱により、旧満州に置き去りにされ、亡くなった5000人近い死者たちを葬る「日本人公墓」が、方正県に建立されています。その経緯とその持つ意味を朝日新聞2007年10月10日付の大類さん記事の抜粋で紹介します。

「もともと中国の土地であった旧満州に国策として入り込んだ開拓民は、ソ連の参戦、それに続く敗戦の知らせと同時に祖国を目指し逃げ惑い、難民、流浪の民と化した。人々は零下40度という酷寒にさらされ、飢えと栄養失調、発疹チフスなどによってこの方正の地で息絶えた。

それから数年、累々たる白骨の山を見たある残留婦人は、何とかして骨を拾って埋葬したいと願った。その願いは県政府から省政府を経て中央政府へ、最終的には当時の周恩来首相のもとまで届き、日本人公墓の建立が許可された。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない

1963年、日中が国交を回復する10年程前のことである。」「まだ貧しかった中国だが、それでも大金を投じて日本人公墓を建立してくれたのだ。」「中国に存在する唯一の日本人公墓である。66年から荒れ狂った文化大革命の時、紅衛兵たちがこの日本人公墓を破壊しようとした。しかし黒竜江省政府は、『これは日本軍の墓ではない。日本の庶民の墓である。彼らに罪はない。』と紅衛兵の要求を退けた。」「民族の憎悪を乗り越えて建立された日本人公墓は、これからの日中関係のみならず、今後の世界のありようを考える時、極めて示唆に満ちた存在だ。」

この日本人公墓の存在とその持つ意味を多くの人々に伝えようとしている方正友好交流の会の方たちの取り組みと「再生の大地—撫順戦犯管理所—」の合唱を通して、憎悪を乗り越え寛大な人道主義の精神を示した中国の人々と侵略戦争と加害の責任を自覚し平和と日中友好のために献身的に活動してきた中国帰還者連絡会の人たちのことを伝えようと、取り組んでいる私たちの思いは同じであることが、わかりました。

その公墓の近くには、1980年初頭から寒冷地での米作りの技術を中国に伝えた岩手県沢内村出身の日本人農業専門家の藤原長作氏の記念碑がありました。藤原さんは日中友好協会の農家視察団への参加をきっかけに黒竜江省方正県の技術指導を行いました。1983年には、藤原さんに同県から荣誉公民の称号が送られ、翌年には黒竜江省から初の科学技術賞を、「人民日報」から水稻王の称号を受けたのでした。こういう技術交流でも日中友好ができるのだ。素晴らしいことだ、と思いました。

以上のような文章に現地で撮った11枚の写真を添えて皆さんにお伝えしたのでした。

そして、今、私は七三一部隊のことを扱った混声合唱組曲「悪魔の飽食」（原詩；森村誠一、編詩；池辺晋一郎・神戸市役所センター合唱団、作曲；池辺晋一郎）にも挑戦し、今年の6月28日私の地元の小金井市の宮地楽器大ホールで行われる「加害の責任を問い、真の友好と平和を希求する 講演と合唱の夕べ」で、この舞台に立つために組曲「悪魔の飽食」の練習を開始しているところです。

（おぶち・あきら：1948年群馬県中之条町生まれ。41年間東京都で教師（小学校）生活を送る。1976年から東京都教職員合唱団「若樹」に、完全退職した2014年から「再生の大地」合唱団、東京紫金草合唱団にも入団。地域では西東京教育9条の会と憲法を教育に生かす西東京の会の事務局メンバー）

＜本稿は図書出版のぶ工房の堀田広治監修『あれから七十三年 十五人の戦後引揚体験記 旧満洲七話、朝鮮半島七話、台湾一話』からの転載である。27号書籍紹介でもこの本を紹介した。今回転載を了承された秋吉任子さん及び発行元にお礼申し上げます。（大塚善啓）＞

episode 3

台湾台北州  
たいほく（タイペイ）

台北

からの引揚

Atsuko Atsuko  
秋吉任子

## 一、終戦まで

終戦当時、私たち一家八人は、台湾台北州台北市に住んでいた。

父が、台北一中の英語教師として赴任したのは、昭和十三年（一九三八）三月のことである。その一カ月ほど前に、父母は三人の幼い息子（六歳、四歳、二歳）と昭和十二年十二月に生まれたばかりの長女の私をつれ、福岡県糸島郡前原町（当時）から台北市に移り住んだ。

最初の住まいは古亭町だったそうだが、私どもの心ついた頃には、台北一中教師の官舎である龍口町に暮らしていた。官舎での生活は、同じ学校の教員同士の家族として、助けられたり助けたりに近い所づきあいが楽しかったことを覚えている。

例えば、お隣の数学の藤下先生宅で天体望遠鏡をのぞかせてもらい星の観察をしたり、赤嶺先生の



STREET VIEW OF SAKAEMACHI-DORI, TAIHOKU, TAIWAN.  
觀盛のり通町榮（北臺・滬臺）

◆台北 栄町通りの盛観。日本企業の看板が連なる。[昭和戦前期の絵葉書／のぶ工房蔵]

お宅には、子どもの本が多数揃えられ、よく遊びに行つて読ませていただいたりしたものである。しかし、昭和十九年になると父に四十歳で召集令状が来て丙種合格の老年兵として兵役につくなど、戦局の悪化が世の中を暗くして子ども心に不安だったのを覚えている。「欲シガリマセン、勝ツマデハー!」とか「デマニ乗り、デマヲトバセバ君モ敵!」などとスローガンを毎日言わされていた。

## 二、終戦

終戦の詔勅を聞いた八月十五日のこともよく覚えている。防空壕から這い出し、ピーピーガーとやたらうるさいラジオから、天皇陛下のお言葉を聞いた。「タエガタキヲタエ、シノビガタキヲシノビ……」の一節は、よくわからな

いまま心に刻んだ。周りの大人にはそっと泣いている人もいた。

この日を境に町の様子が一変した。私たちは少し離れた南門国民学校へ集団で登下校していたが、その途中、物陰から礮が飛んでくるのである。時には「ニッポンコロ！」と小さく叫ぶ子どもの声があった。戦時中「チャンコロ！」という中国人に対する蔑称があり、私は両親に注意されていて使ったことがなかったが、この一言と礮の多さに、恨まれていることを子ども心に感じた。

長兄は、当時台北一中学二年生で、私たちの疎開先まで学徒動員先の工場などから、日暮れて遠い道を帰って来ていたが、この兄の穴の開いた鉄兜も記憶に残っている。戸外での作業の休憩中、先生の鋭い一声で、鉄兜を外においたまま防空壕にとび込んだら機銃掃射で鉄兜が穴だらけになっていたのだ。

### 三、引揚げが決まつて

応召していた父も、学徒動員の兄も戻って来て、日本へ引揚げることになったが、終戦のころは父が英語教師であったため敵性語は不要と職を追われ、官舎ではないところに仮住まいをしていたようだが、このころの記憶は定かではない。ただ、引揚の前に広い大通りに莫産とぎを敷いて不用品を並び、現地の人に売っていたことはよく覚えている。そんな莫産の列が並び、異様な光景だったが、品物は見ていて、あまり売れなかったようだ。

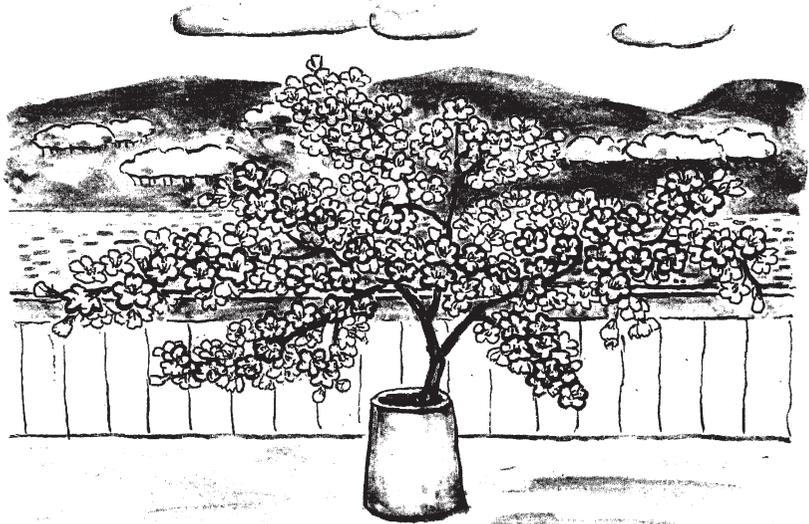
### 四、引揚げが始まる

昭和二十一年三月、ようやく日本へ帰国する運びになった。私の下に台北で昭和十五年四月に生まれた妹と、同十七年十二月に生まれた弟がいて、家族は八人になっていた。幼い弟妹には荷物もなかったが、他の兄弟は、着られるだけ服を着こみ小さなリュックを背負って着の身着のままに近い状態で出発した。お金は一人につき千円までと制限された。

私たちは、基隆港キリンから出る米国の貨物船リバティー号に乗ることになった。港に着くまでは、集結場所の学校の体育館に寝たこともあった。体育館でも驚いたが、港ではコンクリートの床にアンペラを敷いただけの上に大勢の人がぎっしりと坐ったり寝たりしていた。しかしこの頃には日本へ帰られるという期待で、不便、不自由な生活も子ども心にはあまり不安はなかったように思う。

### 五、出航―日本へ

数日後、いよいよ船に乗り込んだ。貨物船の一番底の船倉に、荷物のようにぎっしりとわたしたちは積み込まれた。仄暗く、窓もない船倉は、居心地のよいはずはなく、私はすぐに看板へあがつてゆき、父と並んで去りゆく台湾の島影が見えなくなるまで、小声で「さらば、台湾よ、また来る日まで……」



◆桜の一枝

ある朝、誰かの呼び声にと誘われて甲板に上がった。広い甲板の中央あたりに、大きな桜の一枝が活けられ、大勢の人々が集まっていた。わたしが初めて見る満開の桜は、青空に映えこの世のものと思えないほど見事で美しかった。大人たちは涙を流していた。余談になるが、私はこの時の影響か人に笑われるほど桜が好きで、庭に今は種類の異なる六本の桜を植えている。

天然痘騒ぎが収まってやっと上陸できた。これで、それぞれの故郷へ帰れると思ったら、今度はまた厄介な事件で収容所に足止めされた。それはある未亡人が、夫の遺骨を入れた骨箱に、寶石類を隠し持っていたことが露見し、改めて全員が身体や荷物の検査を受ける羽目になった。不自由な集団生活がまだ続いた。天然痘の発生とお骨の事件は、起きた時期がもしかすると逆だったかもしれない。しかし、両親に続き、長兄、次兄も他界した今、

と、ラバウル小唄のメロディーで歌ってみた。間もなく大海に出ると、船はすぐにピッチングにローリングと激しく揺れ始め、立っているのが難しくなったので、仕方なく船底の暗い隅に戻った。

航海中、私たちに与えられた食べ物は粗末な代用食が多く、大豆の荒く挽いた物や堅パンなど消化の良くない物が多かった。そのせいで、甲板にあるお便所には、たちまち長蛇の列が出来、お腹をこわしても、すぐにお便所につけ込めないことはとても辛かった。

ある時、日本人の船員さんが、自分たちの船室を見せてくれたが、看板に近い部屋は狭いながらも明るくきちんと整えられ、若い日本人のお兄さん船員がつづく羨ましかった。

航海の途中、一人の赤ちゃんが亡くなられ白い布にくるまれて、海に投げられたことがあり、船で死ぬと海に葬られると知った。

## 六、桜の一枝——無事、日本到着

子供心には、とても長く感じられた航海の後、船は無事に日本の港に着いた。父の記録を見ると、昭和二十一年三月ごろに基隆港を出港し、四月の中旬頃に着いたことになっている。広島県の大竹港に着いたのは、桜が満開の季節だったのは、よく覚えている。甲板から見える遠くの山々に白っぽいもやのようなものがあちこちに見られ、それが桜だと母に聞かされた。さあ、上陸と勇み立った一団に待ったがかけられた。天然痘患者が出たので上陸は禁止され、なぜか船員さんだけ上陸した。

確かめようもない。

収容所では、食糧不足のせいで、高粱（コウリヤン）入りのお粥が少量ずつ配られるだけなので、私たちはいつもお腹をすかせていた。配膳係のおばさんが、あからさまな依怙鼻屑をして皆が不満をもらし、母が抗議したこともある。

収容所について間もないころ、若い船員さん（と思う）が、「リンゴの唄」を元気に歌っていたのに、皆勇気づけられた。

## 七、帰郷

航海に続く長い収容所生活で、着替えもろくになく、入浴はおろか身体を拭くこともあまりできなかった。私たちは、虱にとりつかれ痒さに悩まされた。

ようやく帰郷した私たちが、真っ先に受けたのは、頭からのDDTの洗礼であった。自転車の空気入れのような器具で大量のDDTを、真っ白にみんななかけられた。私たちの帰郷の始まりは、DDTとともに始まったのであった。

「あきよし あつこ」



◆DDT散布 [昭和20年10月10日／米国立公文書館蔵『米軍が写した終戦直後の福岡県』より転載]



引き揚げの途中で倒れた日本人が眠る墓の前で手を合わせる日本部鳳琴さん＝11月15日、中国・黒龍江省方正県、平井良和撮影

### 中国残留日本人孤児

1931年の満州事変の後、中国東北部(旧満州国)に移住した日本人の子で、終戦時の混乱で親と別れて置き去りになった人たち。日本政府は、終戦時におおむね13歳未満で両親が日本人である人を認定する。10月末現在、2557人が永住帰国し、261人が中国で暮らす。

「日本人は最低だ」とのしられ、離婚した。72年の日中国交正常化の後、病床の養父から一枚の古い便箋を渡された。実の母が養父に自分を預けるにあたって二人で交わした手書きの「証明書」。母の名や「育てる力がない」と子を託す理由が書いてある。養父は「お前は日本人だ。お母さんを捜しに行っていないよ」と言った。養父をみとった後、肉親捜しを始めた。

### 子に「戻らない」

夫が14年に亡くなった後、心の支えは残留孤児の支援者や日本に戻った孤児らだった。新しい夫の庄山紘宇さん(80)もその一人。ユーモアのある人柄にひかされた。昨年、電話で話している時、庄山さんが何げなく、「結婚しようか」と言った。

### 母と抱き合い涙

再婚した夫と過すハルビンの家に「母親が来た」と突然の連絡が入ったのは82年6月。母は日本の肉親捜しの訪中団に参加していた。市内のホテルで再会し、抱き合い、泣き崩れ、互いに言葉が出なかった。母は故郷の長野県で撮った自分の写真や日中の会話辞典をくれた。ただ、実の父のことは話しながらなかった。当時の事情を知る人たちから「戦中に旧満州で亡くなった軍人」と聞かされていたが、母が未婚で自分を産んだ背景には複雑な事情があるようだった。

帰国した母に何度手紙を送っても返事はなかった。後に知人を通じ、新しい家庭を持つ母が、自分の帰りを望んでいないと知った。残留孤児としての認定には、両親がともに日本人であるという証明が必要で、父についての詳細な証言が得られないことが壁だった。

## 残留孤児の認定 得られぬまま

### 「日本人の子め」

1949年初夏、5歳の時の記憶がある。紙に何かを書き、養父と話す実の母。その足に「離れたくない」としがみついた。

ハルビンで自転車屋を営む養父母には実の子もいたが、隔てなく接してくれた。「日本人の子め」と言う人がいると、「誰が言った」と怒鳴りつけてくれた。14歳から工場で働き、18歳で農村の男性と結婚。2人の子ができたが、父を戦争で失った夫にはたびたび

旧満州で生まれ、終戦後の混乱期に日本人から現地の養父母に預けられて中国残留日本人孤児(「孤」)の認定を求め続けてきた74歳の女性が、「故郷」と思い定める日本へ移り住むことを決めた。日本にもう肉親はおらず、中国には家族や友人に囲まれた穏やかな暮らしがある。それでも、最後は故郷で過ごしたいと、9日に「祖国」へ渡る。

「自分の国へ帰る喜び、中国を離れたい思い。色々な気持ちで巡っています」。2日、中国・黒龍江省ハルビン市。鄧鳳琴さんは自身のお別れ会で約40人の親類や友人に思いを語った。日本政府から残留孤児としての永住権は認められていないが、8月に熊本県に住む同省出身の認定孤児の男性と結婚。熊本県菊陽町で一一緒に暮らすことになり、願い続けた日本での生活が始まる。

「故郷へ帰る。その願いが果たせる私は幸運なんだ」(ハルビン) 平井良和

# 日本人と認められてほしい

日本人でありながら、日本人と認められていない中国残留孤児の女性があります。彼女の名前は郇鳳琴さん。縁あって、昨年8月に熊本県に住む日中友好協会会員の残留日本人孤児・庄山紘宇さん(80歳)と結婚し、年末に日本へ帰国。郇鳳琴さんに激動の半生を伺いました。



生母は帰国を拒み政府は孤児と認めず

郇鳳琴さんは1944年中国生まれ。5歳になったとき、日本人の生母は「育てる力がない」と郇さんをハルビンの中国人に託しました。養父は自転車屋を営んでおり比較的裕福で、郇さんに教育を受けさせてくれました。周囲から日本人だといじめを受けたときも、「養父母や兄弟たちは私をかばってくれた」と、幼いころを思い出しながら語ります。

14歳から工場勤めを始めましたが、周囲から「日本鬼子」と罵り続けられ、「遠くへ行きたい」と、18歳年齢の離れた農村の男性と結婚

## 中国残留孤児の女性 74年ぶりの帰国



熊本城稲荷神社前で記念撮影

援者や支援団体との交流でした。その中で現在の夫となる庄山さんとの知己を得ます。

17年、江戸東京博物館で開かれた残留孤児展に参加した機会に、庄山さんが暮らす熊本県を訪れ、結婚を決意。中国にいる息子には「もう帰らない」と言い残して、昨年12月9日に帰国しました。

その後、風邪の症状で病院にかり、咳と胸の痛みが出て結核と診断され、日本での正月は入院生活に。日本語がでない郇さんですが、隔離病棟に収容されました。外部との連絡も閉ざされ、「電子辞書と筆談で医師や看護師と意思疎通しなければなりません」

現在、郇さんの滞在ビザは1年間。毎年更新が必要ですが、今後の課題は、「厚生労働省へ日本人残留孤児の認定を再び求めていく」こと。なんと、一日も早く「日本人としての自分」を取り戻したいという「胸のうち」を力強く語りました。

(猫)

結婚。その後起こった「文革(1966〜76年)で、父を戦争で亡くした夫からも責められ離婚。養父が亡くなる時に、生母との取り交わし書を手渡され、「日本へ帰ろう」と思い立ちました。1982年の日中国交10周年の時、長野県の出身である生母がハルビンに突然やって来て、彼女が自分の子でもあることを確認。しかし、未婚で郇さんを生んだ事情や父親のことは話しませんでした。

### 厚生労働省は、戸籍に名前がないなどの理由で帰国の申請を却下。両親とも日本人であるという証明がなく、郇さんは日本人残留孤児と認められませんでした。後に郇さんは生母から帰国を望まれていないことを知らされました。

心を支えた残留孤児支援活動

日本への帰国を果たせぬまま30年以上がたち、生母や再婚した夫も死去。心の支えとなつたのは残留孤児の支

# 文 化

北朝鮮の首都平壤(ピョンヤン)の南西。大同江が黄海に注ぐ河口付近に広がる南浦市は、日本統治時代に鎮南浦と呼ばれ、釜山、仁川に次いで大きな港町だった。私たち一家は(応召の父を除いて)1945年8月の終戦を鎮南浦で迎え、翌年10月に母の郷里である岡山県倉敷市に引き揚げてきた。

ソ連兵が夜押し入って来た時の恐ろしい姿、私たちが2カ月同居させ、かくまってくれた朝鮮人母娘との交流。記憶は残っていても、子どもの頃はそれが何を意味しているのか分からなかった。大人になって母と何度も文通しながら自分の記憶を確認し、同人誌に発表したり、まとめたりして



日本統治時代の鎮南浦の街角(鎮南浦商工学校同窓会誌「藍湖」より)

8月末、私たちは教員用住宅から立ち退かされ、日本人町と朝鮮人地区の境目にある小さな家に移り住んだ。母はソ連軍将校の家政婦となり、夜はソ連兵の軍服を繕う内職をした。中学生の長兄は病身のため、ソ連軍が接収した物資を運ぶ荷役にはつげず、大工仕事の補助役に駆り出された。9歳の次兄はソ連軍の食堂で働いて、黒パンやスープなど貴重な食べ

物を持ち帰ってくれた。11歳の姉が家事のすべてを受け持ち、私と2人の妹の面倒をみてくれた。



遠藤 みえ子

ぞき見すると、私の大切なひな飾りの金屏風を大尉の部屋に置き忘れたのが見えるではないか。姉は私を連れ、大尉側の玄関から忍びこみ、首尾よく屏風を手にしたが、去り際に音を立てて見つかったしまった。大尉は窓の格子の間に顔を

突っ込んで、ロシア語で怒鳴り散らす。姉は「盗んだんじゃないません!」と叫び返して、2人で家に駆け戻った。大尉は高熱を出した末妹を手当てしてくれ、良い人に見えたのに、3カ月後完全に家を占領。私たちは追い出されてしまった。

この時自宅に招き入れてくれたのが、お向かいのクリスチャンの朝鮮人母娘だ。困窮する私たち家族をしばしば訪ね、夜道を荷車で食料や燃料を届けてくれたキムおじさんも忘れられない。子ども好きで私たちをかわいがってくれた。当時、日本人をかばう朝鮮人は当局に拘束され、命を落とす危険さえあった。にもかかわらず、キムおじさんは私たちが引き揚げるまで見守ってくれた。彼の2人の息子は商工学校で父の教え子だった。おじさんは朝鮮の貴族階級とも言える両班出身で、師を大切にす

で38度線を歩いて越えた。道中お金を失くし、最後尾を遅れて追う私たち一家は、危うく置き去りになりかけたが、母の機転と気力と辛抱あればこそ6人の子は生き永らえることができた。

日本人の統率力、団結力、知恵と不屈の精神も、ぜひ後世に伝えたい。私は71年に児童文学の同人誌に初めて鎮南浦のことを書き、2012年に「1945年鎮南浦の冬を越えて」(長崎出版)という回顧録をまとめた。交流のある英国の作家に「ぜひ英語で読みたい」と頼まれ、今年2月に英訳「1945, Surviving the Winter in Chinampo」を自費出版した。あの多難な状況でも時勢に流されず、自らの信念を貫いた人々がいたことを、多くの人に知ってほしい。そう願ってやまない。(えんどう・みえこ) 児童文学者

## 歩いて越えた38度線

◇朝鮮 鎮南浦から引き揚げ、家族の記録を出版◇

任したからである。終戦時、父は41歳の老兵として応召し不在。15歳から生後7カ月まで6人が2人いた。

人の子どもを抱えた母は37歳。私は上から4番目。兄2人と姉1人、妹が障子に穴を開け、の

障子1枚が国境にある日、家の半分をソ連軍の大尉に接収され、彼が移ってくることになった。薄い障子1枚が国境となったのだ。3歳の妹が障子に穴を開け、の

不屈の精神伝える 鎮南浦の日本人1万6千人の引き揚げに、現地割は大変。引き揚げ者で作る「鎮南浦会」がまとめた記録「よみがえる鎮南浦」によると、日本人会の幹部は現地企業の中堅(30〜40代)社員たち。敗戦下の厳しい状況にもめげず、ソ連、北朝鮮当局と交渉を続けた。

日本人の統率力、団結力、知恵と不屈の精神も、ぜひ後世に伝えたい。私は71年に児童文学の同人誌に初めて鎮南浦のことを書き、2012年に「1945年鎮南浦の冬を越えて」(長崎出版)という回顧録をまとめた。交流のある英国の作家に「ぜひ英語で読みたい」と頼まれ、今年2月に英訳「1945, Surviving the Winter in Chinampo」を自費出版した。あの多難な状況でも時勢に流されず、自らの信念を貫いた人々がいたことを、多くの人に知ってほしい。そう願ってやまない。(えんどう・みえこ) 児童文学者

えんどう・みえこ

えんどう・みえこ

文 化

敗戦から70年近い今も決して忘れない。異国での約300日にわたる敵からの逃避行。そして捕虜となり、餓死寸前の体で明日をも知れぬ命におびえた日々を。15歳、中学3年生だった。農場で勤労奉仕

画の製作が、現在進行中だ。私は父の仕事の関係で北京に生まれ、満州国成立後はハルビン、そして首都新京（現長春）で幼少期を過ごした。一時、父の郷里である広島県立一中に進学したが、内地への空爆激化を心配した父から新京に呼び戻された。広島の級友たちはその夏、勤労動員の作業場で原爆にさらされてほぼ全員死んだ。私は難を免れたが、満州に戻ると地獄が待っていた。

1945年5月、新京一中3年生の130人が、東満の軍都東寧に送られた。ソ連との国境線にある農場で勤労奉仕する。7月までの2カ月という予定だった。農場での生活

は耐え難かった。国防衛の拠点要塞に挟まれた平原に、広い畑と粗末な三角小屋があるだけ。そこに寝泊まりし、朝から晩まで農作業。一汁一菜の食事にドラム缶風呂。ラジオもなく、暗くなる。楽しみは食

べ物の話か、歌うことくらい。早く新京に帰りたいが、理由もわからぬまま、期間が延長された。そして8月9日午前3時、重爆撃機が何機も上空を飛び去る音で目が覚めた。ソ連が午前0時に対日開戦し、満州各地を空爆して戻る音だった。原爆投下も知らず皇軍の勝利を信じて疑わなかった私たちは、その時まだ味方と信じて疑わず、

夏の太陽が照りつける日中を、脱水症状になりながら歩いた。湿地帯に水をたまりを見つけ、ボウフラの浮く泥水を皆で必死に飲んだこともあった。大人はシベリア送り19日、東京城に到着した。4日前に日本は降伏し、日本人は皆逃げた後だった。翌日、進入してきたソ連軍の捕虜となった。日本の開拓団跡地に鉄条網を張り巡らした臨

野営は免れたが中国東北部の寒さは厳しく、1日2食のおかゆはどんどん薄くなった。全員が栄養失調となり、倒れる者が続出した。あそこが最も絶望的だった。10月12日。雪が降ろうかというころ、突然解放された。投げ出されたのも同然の私たちは、ともかく北の牡丹江を目指して歩き始めた。飢えと寒さで、餓死寸前だった。

中国人の温情に感謝 私たちを救ってくれたのは途中にある中国人の村、石頭村の人たちだった。貧しい家に3、4人ずつ受け入れ、おかゆと卵、オンドルの温かな寝床を提供してくれた。まともな家庭料理は、新京の家を出て以来だった。家族同様に遇してくれた村人たちは、今も感謝の気持ちでいっぱいだ。元気になって再び歩き始め、途中でまた数日、ソ連軍に捕まりもしたが、なんとか牡丹江へ。そこから無蓋車を乗り継ぎ、ハルビンを経由して、10月20日、朝もや煙る新京に生還した。駅前解散。途中、日本人街の露店でうどんを食べた。人心地ついたところで帰りかけたとき、向こうから血相を変えて走ってくる人がいた。父だった。先に帰った道に知らせを聞き、心配して探しにきたのだ。道草してすっかり満腹の私を父は怒鳴りつけ、それから抱きしめてくれた。家に帰ると、母が待っていた。思えば母は私を送り出すとき、何かあるといけないからと、冬物のオーバーを持たせてくれた。それで寒さをしのいだのだ。ボロボロに汚れたオーバー姿の私を見て、母が号泣した。1998年、この体験

ソ満国境少年が見た死線

◇終戦後の逃避行と捕虜生活、手記もとに映画化進行中◇

田原 和夫



東寧農場の三角小屋と級友



そのまま寝てしまった。早朝、軍部から急いで新京に戻れとの命令が下りた。そのころには敵機の機銃掃射と、南北から侵攻するソ連軍の歩兵が近くまで迫っていた。私たちがとにかく歩き出したが、ここにも汽車はない。昼夜の行軍が延々と続いた。起伏の激しい林道を一晩徹夜で歩き、真

そのまま寝てしまった。早朝、軍部から急いで新京に戻れとの命令が下りた。そのころには敵機の機銃掃射と、南北から侵攻するソ連軍の歩兵が近くまで迫っていた。私たちがとにかく歩き出したが、ここにも汽車はない。昼夜の行軍が延々と続いた。起伏の激しい林道を一晩徹夜で歩き、真

を「ソ満国境・15歳の夏」（築地書館）として出版した。それを基に、松島哲也監督による映画化が決まった。撮影は8割方終わったが、残る中国口ケが政治問題の影響で中断している。日中国交正常化40周年を記念する作品でもあり、一日も早く撮影が再開することを望んでいる。（たはら・かずお＝中国の歴史と文化を学ぶ会会員）

# 文化

玄界灘に突き出した糸島半島(福岡県糸島市)にはかつて、近代中国文学の父である作家・魯迅が自ら碑銘を記した墓が立っていた。「鎌田誠一」と彫られた墓石は西海のかなた、中国・上海を向いていた。



上海事変で魯迅を助けた鎌田誠一が魯迅に贈った博多人形



上海事変で魯迅を助けた鎌田誠一が魯迅に贈った博多人形

た内山書店に勤務していた。店主の内山完造の命を受けて魯迅の身辺の世話を焼くようになる。誠一は油絵をこなし、東京美術学校(現東京芸術大学)を受験したこともある画家の卵だった。私は中国の文豪と日本の若き芸術家が結んだ友情に関心を抱き、半世紀近くにわたって調査を続けてきた。

最初に誠一のことを知ったのは日中国交正常化を翌年に控えた71年、中国の新聞紙上に載った小さな記事である。魯迅の

## 魯迅 日本人青年との友情

◇地下生活や上海事変を共にした文豪と画家の卵

横地 剛



32年1月、日本軍と国民党軍の間で上海事変が勃発した時、誠一は魯迅一家を迅速に避難させ、貴重な蔵書、絵画を泊まり込みで守っている。その後、日本人で構成する自警団に加わり、戦線の後方警備にあたった。それに関して興味深いエピソードがある。上海事変収束後、魯迅が「なぜ軍隊(自警団)に参加したのか」と問いかけたところ、誠一は「元寇の報復だ」と答えたという。当時の日本では、対中戦争を蒙古襲来と重ねる見方が広まっていた。これに対し、魯迅は「南宋の民衆も元によられたのだ」と返す。上海人のルーツである南宋の人々は、元を国を滅ぼされた。だから元寇の仕返しで上海人に武器を向けるのは筋違いだと諭したのだ。誠一は上海事変後に持病の結核が再発する。療養のため一時帰国し、再び上海に戻る際、歌舞伎などで知られる「信太入形」を毛手フにした博多人形を魯迅に贈った。伝説ではこの人形の女性はキツネの化身であり、陰陽師の安倍晴明を産んだ農地改革の混乱の中で失われたという。彼らの友情を次代に伝えるために、私家版で魯迅と鎌田誠一という記録集をまとめた。また福岡アジア美術館(福岡市)では2019年1月20日まで、2人が関わった近代アジアの木版画運動についての展覧会「關に刻む光」も開かれている。誠一の母校である福岡県立糸島高校や糸島市などが記念室を設ける計画も動き出した。日中の懸け橋たんとした青年の遺志は、今も多くの人々の心を揺さぶっている。(よこち・たけし)福岡貿易(社)

「魯迅という人はね、好々爺で美にいい人だったんですよ」といつたふうで、寿さんの話は始まった。誠一は先に渡航していた寿さんを頼り、30年に上海にやってきました。魯迅は当時「左翼作家連盟」設立などに関わったため、蔣介石率いる中国国民党の取り締まりを避け、半ば地下生活を強いられれていた。魯迅と誠一はともに絵画や版画が好きだったから、すぐに意気投合したよう

ら、すぐ意気投合したよう。国民党の手入れがあった場合、蔵書や絵画を事前に運び出せるよう、専用の木箱を誠一が作っていた。「鎌田誠一」の表札はそこへ、官憲の目を欺くために魯迅の書庫の入り口に掛けていたという。

泊まり込みで守る。絵画好きの誠一に、魯迅は格好の仕事を持ってきた。米国のジャーナリスト、アグネス・スメド

ツネの化身であり、陰陽師の安倍晴明を産んだ農地改革の混乱の中で失われたという。彼らの友情を次代に伝えるために、私家版で魯迅と鎌田誠一という記録集をまとめた。また福岡アジア美術館(福岡市)では2019年1月20日まで、2人が関わった近代アジアの木版画運動についての展覧会「關に刻む光」も開かれている。

誠一の母校である福岡県立糸島高校や糸島市などが記念室を設ける計画も動き出した。日中の懸け橋たんとした青年の遺志は、今も多くの人々の心を揺さぶっている。(よこち・たけし)福岡貿易(社)

遺品の中から「鎌田誠一」と書かれた表札が出てきたという内容だった。中国人は普通、自宅に表札を掲げない。なぜ魯迅が、それも日本人の表札を持つていたのか。私は東京外国語大学で中国語を学び、対中貿易の仕事に就いていた。ついでをたどり、誠一の兄で、自身も内山書店に勤務していた鎌田寿さんの知遇を得ることができた。

32年1月、日本軍と国民党軍の間で上海事変が勃発した時、誠一は魯迅一家を迅速に避難させ、貴重な蔵書、絵画を泊まり込みで守っている。その後、日本人で構成する自警団に加わり、戦線の後方警備にあたった。それに関して興味深いエピソードがある。上海事変収束後、魯迅が「なぜ軍隊(自警団)に参加したのか」と問いかけたところ、誠一は「元寇の報復だ」と答えたという。当時の日本では、対中戦争を蒙古襲来と重ねる見方が広まっていた。これに対し、魯迅は「南宋の民衆も元によられたのだ」と返す。上海人のルーツである南宋の人々は、元を国を滅ぼされた。だから元寇の仕返しで上海人に武器を向けるのは筋違いだと諭したのだ。誠一は上海事変後に持病の結核が再発する。療養のため一時帰国し、再び上海に戻る際、歌舞伎などで知られる「信太入形」を毛手フにした博多人形を魯迅に贈った。伝説ではこの人形の女性はキツネの化身であり、陰陽師の安倍晴明を産んだ農地改革の混乱の中で失われたという。彼らの友情を次代に伝えるために、私家版で魯迅と鎌田誠一という記録集をまとめた。また福岡アジア美術館(福岡市)では2019年1月20日まで、2人が関わった近代アジアの木版画運動についての展覧会「關に刻む光」も開かれている。誠一の母校である福岡県立糸島高校や糸島市などが記念室を設ける計画も動き出した。日中の懸け橋たんとした青年の遺志は、今も多くの人々の心を揺さぶっている。(よこち・たけし)福岡貿易(社)

# 友好訪問

## 科学技術文化の全分野で 日中交流をさらに展開させたい

**大**学の副学長を務める傍ら、昨年6月に凌星光氏(福井県立大学名誉教授)の後任として、まもなく創立40周年を迎える(一社)日中科学技術文化センターの理事長に推挙された。

日本留学を決めた。

### 恩師の勧めもあり 日本に留まった

山東省出身。来日30年以上。日本への関心には少なからず長姉の存在がある。姉が北京外大で日本語を学んでいた文化大革命さなかの1968年のこと、周恩来総理の思いは日中関係の回復に向かっており、北京外大などで日本語を学ぶ学生たちを湖北省沙市に集めた。姉を含む学生らは集中的に日本語を学習させられ、田中角栄氏の訪中のひのき舞台で日本の新聞記者たちの通訳として活躍した。姉はその後、日本での兵馬俑の展示会で来日。当時、清華大学に在学中だったが、その姉の勧めもあり

1986年、北京の清華大学から京都大学大学院に留学。勉学後は帰国して研究者として進む道もあったが、中国の恩師のアドバイスもあり、さらに研究に集中するため日本に留まり学究生活をすることを決意。鉄鋼関係の研究で博士号を取得し、その後、埼玉工業大学教授を経て2011年4月には同副学長に就任した。

### 良好で永続的な 日中関係を!

「現在、中国は経済の発展速度を調整し、環境を重視する安定的な発展モードに切り替えている時期です。一方、日本も高齢化・少子化問題を解決しながら安定した経済成長を考えているところでしょう」

社団の理事長として今、3つのことを考えている。まず第一は、日中間を仲よくしたい関係にしたいということ。「これは私の使命でもあります」。そう言うだけあって力強いメッセージとして聞こえた。

「第二は、日中間の科学技術文化交流の進展です。この共通点を見ても、日中両国は平和で友好な関係を構築しなければなりません」と強調した。



## 使命感を胸に創立40年の社団のかじを取る

一般社団法人日中科学技術文化センター理事長  
埼玉工業大学副学長

きょう えい  
**巨 東英** さん

### <プロフィール>

1954年山東省濰坊(いほう)市に生まれる。河北科技大学を卒業後、助教を経て清華大学大学院に入学。その後京都大学大学院へ留学。博士課程を卒業、工学博士を取得。2006年、07年に国際智能製造システム機構(IMS)最優秀論文賞を2回受賞。現在、埼玉工業大学副学長(研究・国際交流担当)先端科学研究所所長(兼任)

11月19日(月)14時から、東京・千代田区の学士会館で日中科学技術文化センター創立40周年記念行事、フォーラムがある。関心のある方は同センター(☎03-3295-0411)まで。

現在、日中科学技術文化センターは技術実習生、インターンシップ、留学生、介護業務などの事業分野を次々と拡大している。かじ取り役を担いながら、「使命感をもって各界の要請に応えて、成果を出したい」と張り切っている。

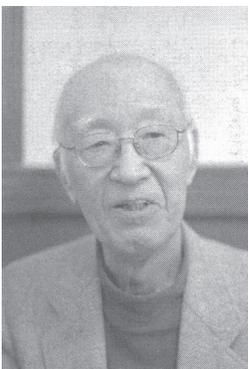
(大類善啓)

# この人に聞きたい

助かろうとしてしがみついてくる人を蹴飛ばした記憶があるんです。自分は助かったんですけど、いい思い出はない。それでずっと自分から話す気になれなかったんだと思います。

対話でした。昭和史や太平洋戦争の勉強を始めてから、元軍人や外交官、官僚たちのインタビューをするようになること、な

作家 半藤 一利さん



かにはすごい人がいました。陸軍中尉だった人からは「てめえみたいな戦争も知らねえ野郎に言われる筋合いはない」と怒鳴りつけられました。あんまりしゃくに障ったので「失礼だが私だって戦争は知っている」と、たんかを切りました(笑)。「どこで知った?」と聞くから、「あなたみたいにシンガポールで、のんびり終戦を迎えた人とは違うんだ」と、私は初めて東京大空襲の話をしました。それから社内でも知られるよ

うになり、聞かれたら話すようになりました。火から逃げ川へ

背中とかばんに火がつき、教科書やメンコや好きな女の子からの手紙が入ったまま、投げ捨てました。中川にはたぐさんの人が逃げて来ていた。ところが30分もしないうちに火が迫りました。どうしようかと思ったら、橋の下に舟があり、川に落ちた人を助けていた。私も乗せてもらい、落ちた人を助ける手伝いをしました。そのうち、相手に引張られ、私の方が軽かったので川へ落ちちゃった。

〈半藤さんの歴史探究の根っこにあるのは戦争体験です〉  
正直に言いますと、私はある時期まで東京大空襲で死ぬ思いをしてたというのを黙っていました。文芸春秋に入ってから、40歳を過ぎるころまで黙っていたので、ほとんどの人は私の空襲体験を知りませんでした。

## 人の死に慣れた

〈東京大空襲の前から、当時住んでいた墨田区向島の近所に爆弾が落とされ、死体を見る機会がありました〉

腕がもげてころがっていたりするのを見て、はじめはショックでした。でも、まだ15歳の子ともだったのに、だんだん戦争で人が死ぬのが平気になってしまった。哀れみや悲しみの感情が失われ、非人間的になった。そんな自分のことを他人に明かしくくく空襲体験を語る気になれなかったのです。それに、私は東京大空襲で川に落ちた時、

# すぎる人を蹴落として生き延びた東京大空襲

## 第2回 長年語れなかった体験



少年時代の半藤一利さん (後列右、本人提供)

の西にまず爆弾を落とし、次は東、最後は向島にと、囲むように爆弾を落とした。これは実にひどい作戦です。無差別爆撃の包围殲滅(せんめつ)戦です。焼夷(しょうい)弾がばらばら落ちてきて、まわりの家が爆発するように燃え尽す。これはとても消せない、逃げようとしませんが、北はものすごい黒煙で南へ逃げました。でも、南も燃えているから人が逃げてくる。右往左往し、隅田川は広くて泳ぐのは大変だからと、中川へ逃げました。途中で服の

上下もわからずもがくうち、長靴が脱げ、ゆらゆら沈むのが見えました。それでようやく、こっちが川底かど分かって水面に向かって泳ぎました。しがみつく人を振り払い蹴飛ばし、川面に顔を出すとき、さきとは別の舟がいて、私を引きあげてくれて助かりました。助かったけれど、火が風をよび、ものすごく寒かった。舟の上で震えながら、岸でたくさんの方が死ぬのを見ていました。小さな子どもを抱いて、川に飛び込むのをためらっていた女の人たちが何人も、まるで炭俵が燃えるように燃えていく。そんな光景を、15歳の私は、ぼーっと見ていました。何の感情もなしに見ていました。(つづ)



ほうまさ  
方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

——「方正友好交流の会」へのお誘い——

1945年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府よって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ4500人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります）

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、民衆レベルでの国際的な友愛精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は1993年に設立され、2005年6月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員 一口 1,000円 団体・法人会員 一口 10,000円

(口数は最低一口、上限はありません)

方正友好交流の会

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 (社) 日中科学技術文化センター内

電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400 E-mail : ohruai@jcst.or.jp

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス : <http://www.houmasa.com/>

## 《報告》

## ありがとうございました！

前号の会報 27 号入稿後、2018 年 12 月 7 日以降にカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受取った順に記載しました。2019 年月 4 月 19 日現在)

及川康年 広田彰夫 成田晃一 宮武正明 吉川孝人 大門高子 野村芙美子 甲斐国三郎 阿部則司 藤原作弥 今井和江 阿久津国秀 崎山ひろみ 榎戸吉定 竹之内信一 風間成孔 中嶋定和 竹井成範 柳澤永一 さいたま市大宮日中友好協会 根田春子 貞平浩 近寅彦 鶴沢弘 田澤仁 篠田欽次 高田京子 末広一郎 NPO 法人やまなみ 畑修三 小倉光雄 早川浩市 高木昂 福久一技 松尾政司 田中正昭 芹澤昇雄 山田敬三 肥後茂樹 矢吹晋 滝永登 山口真 小出公司 窪田かつよ 加納佳子 小関光二 奥村信子 岩増弘三 井上定彦 佐藤千栄子 平沢千恵子 酒井武史 亀山英雄 松村静子 竹中一雄 山田浩 江藤昌美 石橋辰巳 田井光枝 南村豊實 岡庭成巳 須貝佑一 小林浄子 光川澄子 村田和代 及川淳子 木戸富美江 篠原淳子 奥田俊夫 大久保勲 大島満吉 佐藤喜作 金丸良平 田平正子 岩永法子 久保孝雄 栗原彬 下里勝美 杉田春恵 篠原国雄 藤川琢馬 團野廣一 十時哲哉 小柴玲子 中島幼八 小玉正憲 小田淑代 佐藤すみ江 下山田誠子 松田信義 掛谷敏男 前川よしえ 岩間孝夫 中井詔太郎 黒岩満喜 高橋守男 菅原三太郎 平井明美 落合智恵子 高史明 岡百合子 柳生じゅん子 松村高夫 渡辺一枝 鈴木敏夫(葛飾区) 寺本康俊 依田高明 北澤吉三 宮城恭子 石井妙子 宮沢直人 崔鳳義 山内るり 村田吉隆 吉崎玲子 北村栄 北原武司 石井泰子 江田洋一 高橋健男 金成敬子 藤勝徳 宮本政樹 久保和男 秋葉二郎 新田百合子 伊原忠・泰子 成田正路 山中宗一 土川克廣 天竺桂尚徳 乃村晃 戌芳秀 新谷陽子 鈴木幸子 野中西夫 荒川幸二 竹内良男 鷺見秀勝 川村範行 大里浩秋 上条八郎 横井幸夫 山下美子 上村力 近藤耀子 長瀬哲 小渕章 長瀬保 岡山博 東海林次男 長尾寿 高木雅之 高木維治 村上弘充 名取敬和 石井敏夫 松村岩雄 伊藤昭 長堂朝圭 菊田真紀子 吾孫子隆 藤後博巳 今村隆一 藤村光子 西嶋拓郎 楠恒男 由井格 小池イヨ子 木村美智子 山本義輝

.....

## 書籍案内を兼ねた編集後記 大類善啓

### 『天皇陛下にささぐる言葉』 坂口安吾著

元号を巡ってのこの間のメディアの報道ぶりを見ていると、もういい加減にせんかい、と言いたくなるほどの狂騒ぶりである。友人知人の何人からは、このような風潮を憂えるメールなどを受け取り、同じように感じている仲間は確かにいるのだと改めて思った。

さて本書は、小さい出版社から出た本当に小さな本である。著者の坂口安吾は戦後、一世を風靡した無頼派作家の代表選手である。書名になった『天皇にささぐる言葉』は、1948年、戦後3年に『風報』という雑誌に掲載されたものだ。書名になっている天皇は、もちろん昭和天皇である。敗戦後、悲惨な戦争の傷跡を癒す時間もなく生活に追われる庶民たちだったが、昭和天皇は誰の入れ知恵なのか、焦土となった日本の各地を訪ね歩いた。

「なんでこんな愚かな戦争をしたのだ」「お前は戦争責任を感じているのか」という声を出す人もなく、人々は歓喜をもって天皇を迎えた。もちろん、天皇に対して腹立たしい気持ちを持っている人たちは天皇の前には来ないだろう。いや、俺は天皇に一言言いたいという人は、警備もあって簡単に近づけなかつただろうと思う。ともあれ、いわゆる天皇行幸という中、坂口安吾は、過剰な人々の反応や新聞やラジオ報道に対して疑問を持っていたのだ。

安吾はこう書いている。

「戦争中、我々の東京は焼け野原となった。その工場を、住宅を、たてる資材も労力もないというときに、明治神宮がやける、一週間後にはもう、新しい神殿が造られたという、兵器をつくる工場も再建することができずに、呆れかえった話だ。こういうバカらしさは、敗戦と共にキレイサッパリなくなるかと思っていると、忽ち、もうこの話である」

また、こういう文章もある。「日本は負けた。日本はなくなった、実際なくなることが大切なのだ。古い島国根性の箱庭細工みたいな日本はなくなり、世界というもののの中の日本が生まれてこなければならない」

安吾が生きていて、今の元号騒ぎを見たら、どんな感想を持つだろうか。

他に「墮落論」「天皇小論」「もう軍備はいらない」の3編が収録されている。

定価：本体 200 円（税別）、発行所：景文館書店 東京都新宿区戸山 1-14-18-409

.....

前号の加藤聖文さんの原稿は、27号の紹介が『日本と中国』や『日中友好新聞』に出たこともあって大きな反響があり、本誌を読みたいという電話やFAXが20数本来た。今号には、その加藤論文に関して、丸山邦雄について過小評価ではないかという寺沢秀文さんからの原稿をいただいた。両氏の丸山に対する評価の違いがあろうと、両氏の原稿を通して歴史への認識が深まることはいいことだと思う。

上野千鶴子さんの原稿は、本当は前号に入れるところだったが、ご承知のように著名であり大変忙しい方である。実は今号の入稿も難しいかと思っていて半ば諦めていたところに送られてきた。感謝以外の言葉がない。4月13日（土）に森一彦に来てもらい、すべての原稿をチェックしていた際、森から、上野さんの東京大学での卒業式での祝辞がフェイスブックに出ていると読んだが素晴らしいとのこと。帰宅して東京新聞夕刊を開けてみたら、社会面に大きく報道されていて驚いた。

高井弘之さんのことは当会の支援者でもある江藤昌美さんがいつも高井さんの著書を送ってくれて知ってはいたが、私からの依頼に原稿をいただけたことは嬉しいことだった。

投稿していただいた方々を含めて皆様には改めて感謝したい。次号も更に多くの方々からの原稿を期待しています。ありがとうございました。

### 《表紙写真撮影：寺沢秀文》

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第28号）2019年5月12日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email：ohrui@jcst.or.jp

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 日本分譲住宅会館 4F

(社)日中科学技術文化センター内 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

